

Oracle® Enterprise Performance Management System

Deployment Options Guide

リリース 11.1.2.4

著作権情報

Oracle® Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide,
Copyright © 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	7
ドキュメントのフィードバック	8
第1章. デプロイメント・オプションについて	9
第2章. EPM System製品のスケールリング	11
EPM Systemコンポーネントの垂直のスケールリング	11
仮定と前提条件	12
垂直のスケールリング	12
垂直スケールリングの検証	13
Java Webアプリケーションのクラスタリング	13
前提条件	13
EPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング	14
WebLogic手動デプロイメントでのJava Webアプリケーションのクラスタリング	15
WebSphereのデプロイメントの拡張	16
単一の管理対象サーバーのスケール・アウト	17
Foundation Servicesのクラスタリング	18
Performance Management Architectディメンション・サーバーのクラスタ化およびフェイル オーバー	18
Reporting and Analysis FrameworkおよびInteractive Reportingのスケールリング	24
仮定と前提条件	24
Reporting and Analysis FrameworkおよびInteractive Reportingのスケールリング	24
スケールリングの検証	25
Financial Managementサーバーのクラスタリング	26
IISのStrategic FinanceまたはFDM IIS Webアプリケーションのロード・バランシング	26
データ管理のクラスタリング	26
FDMクラスタ	27
Data Relationship Managementクラスタ	28
Essbaseクラスタの構成	28
アクティブ・パッシブEssbaseクラスタの構成(Windows)	29
アクティブ・パッシブEssbaseクラスタの構成(UNIX)	31
アクティブ-アクティブEssbaseクラスタの構成	36
Essbaseを垂直方向にスケール	43
Essbaseクラスタへの接続	44
OPMNによるEssbaseサーバーのサービス・フェイルオーバー	46
SOAクラスタと連携するためのFinancial Close Managementの構成	51
仮定と前提条件	51
ロード・バランサの設定	51
Financial Close Managementの構成	52
SOA高可用性のためのFinancial Close Management設定の検証	52
第3章. EPM System製品のOracle Web Services Managerの構成	55
Oracle Web Services Managerの構成	55
サービス・リクエストに対するOracle Web Services Policy Managerの有効化	56
メッセージ保護のキーストアの設定	57

OID、MSAD、SunOneへのWebLogicドメインの構成	58
Financial Close Managementの構成オプション	59
OAMのFinancial Close Managementの構成	59
電子メール通知の言語の指定	59
JMSイベント・モニタリングの構成	60
FDMEE構成オプション	61
初期セキュリティ・ポリシーの構成	61
FDMEEとPeopleSoftの使用	65

第4章. デプロイメントの変更 67

ポートの変更	67
データベース・パスワードの変更	68
仮定と前提条件	68
Shared Servicesレジストリ・データベース・パスワードの変更	68
EPM Systemコンポーネントのリポジトリ・データベース・パスワードの変更	69
Planningアプリケーション・リポジトリのパスワードの変更	69
Performance Management Architectインタフェース・データ・ソース・パスワードの変更	69
FDMリポジトリ・パスワードの変更	70
Data Relationship Managementリポジトリ・パスワードの変更	70
データベース・パスワードの変更の検証	71
データベースの再ホスティング	71
仮定と前提条件	71
再ホスティングされたShared Servicesデータベースへの接続の更新	72
再ホスティングされたEPM Systemデータベースへの接続の更新	72
再ホスティングされたデータベースの検証	72
Foundation Servicesの再ホスティング	73
ホストの変更	74
インストールおよび構成されたEPM System製品の所有権の別のユーザーへの変更	74
仮定と前提条件	74
インストールおよび構成された製品の所有権の別のユーザーへの変更	74
変更されたユーザーの検証	75
EPM Systemコンポーネントを別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成	75
仮定と前提条件	75
EPM Systemコンポーネントを別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成	76
データベース構成の変更の検証	77
単一のデータベース・スキーマを使用するためのEPM Systemコンポーネントの再構成	78
仮定と前提条件	78
EPM Systemコンポーネントを単一のShared Services Registryデータベースを使用するように再構成	78
データベース構成の変更の検証	78
SSLの再構成	79

第5章. Shared Servicesレジストリの更新 81

Shared Servicesレジストリのコンポーネント階層の理解	81
Shared Servicesレジストリの編集	82
Shared Servicesレジストリ内のコンポーネントの表示	82
コンポーネント・インスタンスの削除	83
コンポーネント・プロパティの更新	84

Shared Servicesレジストリ内のホスト・エントリの表示	84
第6章. Enterprise Managerを使用したEPM System Java Webアプリケーションのモニター	87
第7章. EPM Oracleインスタンスの削除とEPM Systemのアンインストール	89
EPM Oracleインスタンスの削除	89
仮定と前提条件	89
インスタンスの削除	90
インスタンス削除の検証	91
EPM System製品のアンインストール	91
製品のサイレント・アンインストールの実行	93
EPM Systemクライアントのアンインストール	94
デフォルト・インストール・ディレクトリと注意	94
クライアントのサイレント・アンインストールの実行	95
第8章. カスタム構成の実行	97
ヒープ・サイズの変更によるパフォーマンスの最適化	97
仮定と前提条件	97
ヒープ・サイズの変更	98
ヒープ・サイズの検証	99
オンライン・ヘルプのインストールと構成	100
仮定と前提条件	100
ローカルに実行するためのオンライン・ヘルプの構成	101
Essbase構成のカスタマイズ	101
Essbaseで使用するJREの特定のインストールの指定	102
JvmModuleLocationを使用したメモリの管理	102
64ビットWindowsプラットフォーム上での32ビット・ランタイム・クライアントの構成	102
(UNIX) EssbaseとOracle BI EEの統合用の環境の構成	103
Oracle BI EEおよびBI PublisherとEPM Workspaceの統合	105
EPM WorkspaceとOracle BI EEリリース10gとの統合	105
EPM WorkspaceとOracle BI EEリリース11gとの統合	107
Financial ManagementとOracle BI EEの統合用の環境の構成	107
Financial Reporting Studioのフォントの構成	109
仮定と前提条件	109
印刷サーバー・ユーティリティを使用したフォントの構成	110
トルコ・リラ記号のダウンロード	111
Interactive Reportingのフォントの構成(UNIX)	111
第9章. 障害リカバリ	113
障害リカバリに関する一般情報	113
障害リカバリのアーキテクチャ	114
EPM Systemコンポーネントの障害リカバリ	115
環境の構成	115
ホスト名の要件	115
データベースの推奨事項	116
ファイル・システムおよびデータベースの複製を使用しない障害リカバリ	116
追加情報	117

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracleのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracleサポート・サービスでは、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントへのフィードバックをお送りください: epmdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトでEPM情報開発をフォローできます:

LinkedIn - http://www.linkedin.com/groups?gid=3127051&goback=.gmp_3127051

Twitter - <http://twitter.com/hyperionepminfo>

Facebook - <http://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642>

Google+ - <https://plus.google.com/106915048672979407731/#106915048672979407731/posts>

YouTube - <http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts>

1

デプロイメント・オプションについて

このガイドでは、追加のデプロイメント・オプションの手順を説明します。このガイドの手順は、Oracle Enterprise Performance Management System製品の初期インストールおよび構成を、標準またはカスタム・デプロイメントを使用して完了してからのみ使用します。

Oracle(R) Technology Networkで[Oracle Documentation Library \(http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html\)](http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html)を確認し、このガイドの更新版がないかどうか確認してください。

2

EPM System製品のスケールリング

この項の内容:

EPM Systemコンポーネントの垂直のスケールリング	11
Java Webアプリケーションのクラスタリング	13
Foundation Servicesのクラスタリング	18
Reporting and Analysis FrameworkおよびInteractive Reportingのスケールリング	24
Financial Managementサーバーのクラスタリング	26
IISのStrategic FinanceまたはFDM IIS Webアプリケーションのロード・バランシング	26
データ管理のクラスタリング	26
Essbaseクラスターの構成	28
SOAクラスターと連携するためのFinancial Close Managementの構成	51

ほとんどのEPM Systemコンポーネントで、シングル・ポイント障害をアーキテクチャから除去したり、ロード・バランシングにより一定のパフォーマンスを維持する(あるいはその両方の)ために、アクティブ-アクティブ構成でのクラスタリングがサポートされています。

Oracle Hyperion Foundation Servicesをホストしているマシン以外にJava Webアプリケーションをデプロイする際は、WebLogic Server管理サーバーがFoundation Servicesホスト・マシン上で実行中である必要があります。Foundation Servicesと同じマシン上にデプロイする場合、WebLogic Server管理サーバーは実行中である必要はありません。

EPM Systemコンポーネントの垂直のスケールリング

EPM Systemコンポーネントを垂直にスケールリングできます。垂直にスケールリングする場合は、EPM Systemコンポーネントの既存のインスタンスをホスティングするマシン上で1つ以上の追加インスタンスを構成します。

EPM Systemコンポーネントは次のように垂直のスケールリングをサポートします:

- Oracle Hyperion Strategic FinanceおよびOracle Hyperion Financial Management Java Webアプリケーションを除く、WindowsベースのJava Webアプリケーション
- Oracle Essbaseサーバー
- UNIXベースのコンポーネント

次のコンポーネントは垂直のスケールリングをサポートしていません:

- Oracle HTTP Server
- すべてのFinancial Managementコンポーネント

- Oracle Hyperion EPM Architectディメンション・サーバー
- Oracle Hyperion Financial Close Management
- Oracle Hyperion Disclosure Management
- すべてのStrategic Financeコンポーネント
- すべてのOracle Hyperion Financial Data Quality Managementコンポーネント
- Oracle Essbase Integration Servicesコンポーネント

Oracle Hyperion Reporting and Analysisを垂直にスケーリングする場合は、[24ページのReporting and Analysis Framework](#)および[Interactive Reportingのスケーリング](#)を参照してください。

Essbaseを垂直にスケーリングする場合は、[43ページのEssbaseを垂直方向にスケール](#)を参照してください。

仮定と前提条件

この手順は次のことを仮定しています:

- EPM Systemコンポーネントを、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』またはOracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイドを使用してインストールし、構成しました。
- コンポーネントの最初のインスタンスをデプロイしたユーザーと同じユーザーとして、コンポーネントの最初のインスタンスをホストするマシンにログインしています。
- Foundation Servicesをホストしているマシン以外にデプロイする際は、WebLogic Server管理サーバーがFoundation Servicesホスト・マシン上で実行中である必要があります。Foundation Servicesと同じマシン上にデプロイする場合、WebLogic Server管理サーバーは実行中である必要はありません。

垂直のスケーリング

▶ EPM Systemコンポーネントを垂直にスケーリングするには:

1. Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemコンフィグレータを起動します: 「スタート」メニューで、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM Systemコンフィグレータ(すべてのインスタンス)」の順に選択します。
2. Oracleインスタンスで、この手順を完了してから「次」をクリックします。
 - 「EPM Oracleインスタンスのホーム・ディレクトリ」で、場所が、最初のインスタンスの構成中に指定された場所と同じであることを確認します。
 - 「EPM Oracleインスタンス名」に、新しいインスタンス名を入力します。
3. スケーリングするコンポーネントに必要な構成タスクを選択します。

単一の管理対象サーバーとしてデプロイされた一連のコンポーネントを垂直にスケーリングする場合は、「このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト」を選択します。

ほとんどのコンポーネントにおいて、データベースの構成タスクはデプロイメントごとに1回のみ必要です。ただし、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Editionの場合、追加インスタ

ンスを構成している場合は、データベースの構成中、表を削除して再作成するか、または既存のデータベースを再利用するかどうかを尋ねるプロンプトが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。

EPM Systemコンフィグレータは、最初のインスタンスと競合しないようにポート値を更新します。

4. デプロイメント・プロセスが完了すると、「要約」画面が表示されます。すべてのタスクが正常に完了したことを確認し、「終了」をクリックします。

サイレント・モードで構成している場合、レスポンス・ファイルに次のエントリを追加すると、一意のポートによってサイレント・レスポンス・ファイルを区別する必要はありません:

```
<auto_port_tick>true</auto_port_tick>
```

Windowsマシンで垂直にスケーリングする際、「スタート」メニュー、Windowsレジストリ・エントリ、およびWindowsサービス名にはインスタンス名が付加されます。

垂直スケーリングの検証

デプロイメント・レポートを実行し、コンポーネントが垂直方向にスケーリングされていることを確認します:

EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry report deployment
```

レポート・ファイル(deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html)は、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに格納されています。

スケーリングされたコンポーネントの追加インスタンスが表示されます。

Java Webアプリケーションのクラスタリング

この項では、WebLogicの管理とクラスタリングが理解されていることを前提としています。これらのタスクを熟知していない場合は、EPM System Java Webアプリケーションをクラスタリングする前に、技術援助を求めてください。

前提条件



注:

この項の情報は、クラスタに含まれる各ノードにJava Webアプリケーションがインストール済みであることを想定しています。

EPM System Java Webアプリケーション用にクラスタを設定する前に、次のタスクを完了します:

- Foundation Servicesをホストしているマシン以外マシン上にデプロイする際は、WebLogic Server管理サーバーがFoundation Servicesホスト・マシン上で実行中である必要があります。Foundation Servicesと同じマシン上にデプロイする場合、WebLogic Server管理サーバーは実行中である必要はありません。
- ロード・バランサ上で、セッションの永続または固定セッション(特定セッションに関するすべての要求を同じサーバーに送信するセッション)のいずれかを使用可能にする必要があります。
- クラスタに含まれるすべてのコンピュータでWindowsまたはUNIXのいずれか(両方ではなく)が使用されていることを確認します。
- クラスタに含める各ノードにEPM System製品をインストールします。各マシンの同じファイル・システムの場所にインストールします。クラスタ内の各物理マシンで同じファイル・システム・パスを使用することが重要です。これにより、クラスタ内の各ノードに対して環境変数を設定してカスタマイズするのではなく、クラスタ全体でこれらの環境設定を一度設定するだけで済みます:
 - すべてのOS - CLASSPATHおよびPATH
 - UNIX - LD_LIBRARY_PATH, LIBPATHまたはSHLIB_PATH

EPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング

EPM Systemコンフィグレータを使用した構成時にEPM System Java Webアプリケーションをクラスタリングできます。次の一般構成順序を使用します。この手順では、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System InstallerによりインストールされたOracle HTTP Serverは論理ホストであると仮定します。

▶ EPM Systemコンフィグレータを使用した構成時にEPM System Java Webアプリケーションをクラスタリングするには:

1. 環境内のマシンごとにEPM System Java Webアプリケーションをインストールします。
2. EPM Systemコンフィグレータの「タスクの選択」ページで「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」を選択し、最初のマシンでJava Webアプリケーションを構成します。

デプロイメント中、EPM Systemコンフィグレータにより、WebLogicの管理対象サーバーごとにクラスタが作成されます。

3. EPM Systemコンフィグレータの「タスクの選択」ページで「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」を選択し、2番目のマシンでJava Webアプリケーションを構成します。

デプロイメント中、EPM Systemコンフィグレータにより、WebLogicのクラスタにサーバーが追加されます。

デプロイメント内のすべての追加マシンに対して、この手順を繰り返します。

4. EPM Systemコンフィグレータの「タスクの選択」ページでFoundationタスクから「Webサーバーの構成」を選択し、最後にWebサーバーを構成します。その後、WebサーバーとOracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceを再起動します。

Java Webアプリケーションのクラスタリングに関する考慮点:

- EPM Systemコンフィグレータにより、管理サーバーごとにクラスタが構成されます。
- EPM System製品ごとに使用するクラスタは1つのみにする必要があります。EPM Systemコンフィグレータにより、管理対象サーバーごとに1つのクラスタが作成されます。

Java Webアプリケーションを手動でデプロイメントする場合、Oracle WebLogic Serverとのクラスタリングの詳細は [15ページのWebLogic手動デプロイメントでのJava Webアプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

WebLogic手動デプロイメントでのJava Webアプリケーションのクラスタリング

WebLogicを使用して手動でデプロイされたJava Webアプリケーションをクラスタ化できます。この項では、Java Webアプリケーションのクラスタリングの一般的な概要を示します。この手順の詳細は、WebLogicのドキュメントを参照してください。



注:

EPM Systemコンフィグレータを使用してJava Webアプリケーションをデプロイした場合、EPM Systemコンフィグレータにより、クラスタが作成され、このクラスタにサーバーが追加されます。WebLogicで追加タスクを実行する必要はありません。 [14ページのEPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

▶ Java Webアプリケーションをクラスタリングするには:

1. WebLogic管理コンソールを開始します。
2. Java Webアプリケーションを手動でデプロイした場合は、「ドメイン構造」ペインで「クラスタ」をクリックして、クラスタを作成します。

Java WebアプリケーションをEPM Systemコンフィグレータでデプロイし、「設定」をクリックしてそのJava Webアプリケーションの論理アドレスを指定した場合は、EPM Systemコンフィグレータによってクラスタが作成されるため、この手順は不要です。

3. Java Webアプリケーションを手動でデプロイした場合は、クラスタを選択して「HTTP」タブをクリックし、「フロントエンド・ホスト」に、ロード・バランサのホスト名およびポートを入力します。

EPM Systemコンフィグレータを使用してJava Webアプリケーションをデプロイし、「設定」をクリックしてJava Webアプリケーションの論理アドレスを指定した場合、この手順は必要ありません。EPM Systemコンフィグレータでの構成時に、すでにこの情報を入力しているためです。

4. 「サーバー」タブをクリックし、「追加」をクリックします。「クラスタにサーバーを追加」ページでリストからサーバーを選択し、「終了」をクリックします。
5. 「デプロイメント」タブをクリックし、EPM System Java Webアプリケーションを選択して、「ターゲット」タブをクリックします。そしてこのJava Webアプリケーションがデプロイメントされる対象のクラスタに対して、クラスタ内のすべてのサーバーを選択します。

すべてのEPM System Java Webアプリケーションにこの手順を繰り返します。

分散環境では、ノード・マネージャがクラスタ内のすべてのマシンに変更を伝播します。

6. クラスタに別のサーバーを追加してデプロイメントをスケールアウトするには:
 - a. サーバーを選択して「複製」を選択します。
 - b. 先ほど複製したサーバーを選択し、そのサーバーが実行されるマシンを変更します。
 - c. 新しく作成されたサーバーについては同じ名前方式を使用する必要があります。たとえば、FoundationServices0はすべて、FoundationServices1またはFoundationServices2のようにク

ローニングしてください。これによってstartManagedWebLogic.*の使用が可能になり、管理コンソールでサーバーを起動できます。

7. 必要に応じて、15ページのステップ 2から 15ページのステップ 6までを繰り返します。
8. WebLogic管理コンソールからサーバーを開始します。
9. EPM Systemコンフィグレータを起動し、「Webサーバーの構成」タスクを実行します。

WebSphereのデプロイメントの拡張

デプロイメントを他のマシンに拡張するには、Websphere構成ウィザードを使用します。

▶ デプロイメントを他のマシンに拡張するには:

1. 最初のマシンで、まだJava Webアプリケーションをデプロイしていない場合、次の手順を実行します。最初のマシンにすでにJava Webアプリケーションをデプロイしている場合は、この手順をスキップします。
 - a. EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/was_config_epm.bat | shを実行して、WebSphere構成ウィザードを開きます。
 - b. 「セルの作成と構成」を選択します。
 - c. プロファイルを作成した後、「終了」をクリックします。
2. 最初のマシンで、WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/bin/startManager.bat | shおよびWAS_HOME/profiles/PROFILE_NAME/bin/startNode.bat | shを実行します。
3. 2番目のマシン:
 - a. EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/was_config_epm.bat | shを実行して、WebSphere構成ウィザードを開きます。
 - b. 「マシンのフェデレートとセルの構成」を選択します。
 - c. 一意のプロファイルおよびノード名(たとえば、EPMSystemProfile2、EPMSystemAppNode2など)を挿入します。
 - d. 最初のマシンのデプロイメント・マネージャ・ホスト名、SOAPポート(デフォルトは8879、WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/properties/portdef.props、SOAP_CONNECTOR_ADDRESSを参照)および最初のマシンに使用するユーザー名とパスワードを挿入します。
 - e. プロファイルを作成した後、「終了」をクリックします。
 - f. WAS_HOME/profiles/PROFILE_NAME/bin/startNode.bat | shを実行します。
4. 最初のマシン:
 - a. EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/was_config_epm.bat | shを実行して、WebSphere構成ウィザードを開きます。
 - b. 既存のプロファイルを選択します。
 - c. デプロイメントするEPM System Java Webアプリケーションを選択して、デプロイメントを拡張します。



注:

WebSphere構成ウィザードは、一度に4つまたは5つ以上のEPM System Java Webアプリケーションをデプロイできません。4つまたは5つのJava Webアプリケーションごとにこれらの手順を繰り返します。

- d. 「オプションの構成を選択」パネルで、「アプリケーション・サーバー、クラスタおよびエンド・ポイント」チェックボックスを選択します。
- e. 「クラスタの構成」パネルで、各アプリケーション・サーバーのクラスタを作成します。最初のクラスタ・メンバー・ドロップダウンを使用して、適切なサーバーを割り当てます。

- f. メモリー複製のメモリーの有効化チェック・ボックスを選択します。
- g. 「追加のクラスタ・メンバーの構成」パネルで、各アプリケーション・サーバーのメンバーを追加します。2番目のノード名(たとえば、EPMSysAppNode2など)および適切なクラスタ名を選択して、構成を完了します。



ヒント:

最初のクラスタ・メンバーと同じ名前を指定し、名前の最後に異なる索引を付けることをお勧めします。たとえば、最初のクラスタ・メンバーの名前がFoundationServices0の場合、2番目のクラスタ・メンバーの名前はFoundationServices1になります。

5. WebSphere管理コンソールで、「サーバー」、「クラスタ」、**WebSphere**アプリケーション・サーバー・クラスタの順に選択します。
6. クラスタ名をクリックし、「適用」、「保存」の順にクリックします。
7. 各クラスタの [17ページのステップ 6](#)を繰り返します。
8. 「システム管理」、マスター・リポジトリへの変更の保存の順に選択します。
9. ノードの変更の同期化を選択して、「保存」をクリックします。
10. 「システム管理」、ノード・エージェントの順に選択します。
11. すべてのノードを選択して再起動します。
12. WebSphere管理コンソールで、「サーバー」、「クラスタ」、**WebSphere**アプリケーション・サーバー・クラスタの順に選択します。
13. すべてのクラスタを起動します。
14. system-jazn-data.xmlおよびjps-config.xmlの更新: (最初のマシンでrunWASDeploymentスクリプトを使用してJava Webアプリケーションをデプロイメントした場合は、この手順をスキップします。)
 - a. 最初のマシン(DM_PROFILEが存在する場所)から、次のパラメータを使用してrunWASDeployment.bat | shを実行します:

```
runWASDeployment.bat[sh] -cellName
EPMSysCell
  -profileName
EPMSysDMPProfile
  -nodeName
EPMSysNode
  -customProfile
EPMSysProfile
  -appNode
EPMSysAppNode
  -username admin -password
password
  -updateFiles
```

- b. 統合ソリューション・コンソールにログインします。「システム管理」、マスター・リポジトリへの変更の保存の順に選択します。ノードの変更の同期化を選択して、「保存」をクリックします。

単一の管理対象サーバーのスケール・アウト

- 後続のマシンの単一の管理対象サーバーをスケール・アウトするには:
1. EPM Systemインストーラを使用して、環境内の追加マシンに同じセットのJava Webアプリケーションをインストールします。スケール・アウトする場合、Java Webアプリケーションを追加または削除できません。
 2. スケール・アウトする各マシンからEPM Systemコンフィグレータを実行します。

- Hyperion Foundationの「タスクの選択」パネルで、「このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト」を選択します。

「このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト」オプションは、次に当てはまる場合にのみ選択できます:

- WebLogic管理サーバーが現在のマシンにインストールされていません。
 - 単一の管理対象サーバーがWebLogic管理サーバーにデプロイされています。
 - 単一の管理対象サーバーがマシンでまだスケール・アウトされていません。
- 「次へ」をクリックしてサーバーをスケール・アウトします。

Foundation Servicesのクラスタリング

この項では、Oracle Hyperion Shared Servicesの高可用性のためのOracle Hyperion Enterprise Performance Management System Lifecycle Managementの構成と、フェイルオーバー用のPerformance Management Architectディメンション・サーバーの設定について説明します。EPM Systemコンフィグレータを介したFoundation Services Java Webアプリケーションのクラスタリングの詳細は、[14ページのEPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

Performance Management Architectディメンション・サーバーのクラスタ化およびフェイルオーバー

アクティブ-パッシブ構成でフェイルオーバー用にPerformance Management Architectディメンション・サーバーをクラスタ化するには、Oracle Clusterwareを使用します。Oracle Clusterwareのドキュメントは、http://www.oracle.com/pls/db112/portal.portal_db?selected=16&frame=#oracle_clusterwareから入手できます。

Performance Management Architect Java WebアプリケーションおよびPerformance Management Architectデータ・シンクロナイザJava Webアプリケーションのクラスタリングの詳細は、[14ページのEPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

この手順では、Performance Management Architectディメンション・サーバー・コンポーネントを、クラスタ化されたディスク上のOracle Clusterware共有フォルダ、またはそのフォルダのサブフォルダにインストールし、EPM Systemコンフィグレータを使用して構成済であることを前提としています。

フェイルオーバーのためのPerformance Management Architectディメンション・サーバーのクラスタ化では、このタスク順序を使用します:

- Oracle Clusterwareを使用して仮想インターネット・プロトコル(VIP)リソースを作成および登録する。

[19ページのVIPリソース](#)を参照してください。

- 処理スクリプトを作成する。

[20ページの処理スクリプト](#)の項を参照してください。

3. Oracle Clusterwareを使用してアプリケーション・リソースを作成および登録する。

[21ページのアプリケーション・リソースの項を参照してください。](#)

4. Performance Management Architectディメンション・サーバーの論理Webアドレスを設定する。

[22ページのEPMA_CreateAndStartAppResource.batの編集を参照してください。](#)

VIPリソース

サブトピック

- [EPMA_CreateAndStartVIPResource.batの編集](#)
- [VIPリソースの停止および登録解除](#)
- [VIPリソース・ステータスの確認](#)

VIPリソースの作成、登録、起動には、EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/FailoverにあるEPMA_CreateAndStartVIPResource.batを実行します。VIPリソースはアプリケーション・リソースと一組になって、一元化されたアクセスを提供します。このバッチ・ファイルはコマンド・ウィンドウで実行し、完了すると一時停止します。いずれかのキーを押すと、コマンド・ウィンドウが閉じます。

EPMA_CreateAndStartVIPResource.batを実行する前に、これを環境に合うように編集できます。アプリケーション・リソースを削除した後にVIPリソースを停止および削除するには、異なるバッチ・ファイルを使用します。

ネットワーク経由でクライアントがアプリケーションにアクセスし、別のノードへのフェイルオーバーが有効になっている場合、アプリケーションのVIPアドレスを登録する必要があります。Oracle Clusterwareは、アプリケーションVIPに対して標準のVIPエージェントを提供します。新規のアプリケーションVIPの基礎をEPMA_CreateAndStartVIPResource.batで参照されているVIPタイプにすることで、クラスタ内にデプロイされるすべてのVIPで一貫した動作を保証できます。

EPMA_CreateAndStartVIPResource.batの編集

EPMA_CreateAndStartVIPResource.batを編集して、以下の変数の値を指定できます。これらの変数はスクリプトの最初に記述されます:

- ACTION_SCRIPT – Oracle Clusterwareのインストール先フォルダにあるusrvip.batのフル・パスとファイル名

このバッチ・ファイルは、VIPリソースの管理でOracle Clusterwareが使用する処理スクリプトです。
- VIP_IP – DNSに登録されているクラスタVIP
- START_TIMEOUT – 開始の失敗を宣言する前の、VIPリソースが開始するまでのOracle Clusterwareの待機時間(秒)
- STOP_TIMEOUT – 停止の失敗を宣言する前の、VIPリソースが停止するまでのOracle Clusterwareの待機時間(秒)
- CHECK_INTERVAL – 繰り返される確認の間隔(秒)

間隔を短くして確認をより頻繁に行うと、スクリプト・エージェントを使用する際にリソースの消費が増加します。リソースの消費を抑えるには、アプリケーション固有のエージェントを使用してください。

- `SCRIPT_TIMEOUT` – 処理が実行される最大時間(秒)

処理スクリプトが指定した時間内に完了しなければ、Oracle Clusterwareはエラー・メッセージを返します。タイムアウトはすべての処理(開始、停止、確認、クリーン)に適用されます。

- `RESTART_ATTEMPTS` – Oracle Clusterwareがリソースの再配置を試みる前に、リソースの現在のサーバー上でリソースの再起動を試みる回数

たとえば、値が1の場合、Oracle Clusterwareは2回目の失敗以降リソースを再配置しようとします。値を0にすると、再起動されることはありませんが、Oracle Clusterwareは常に別のサーバーにリソースをフェイルオーバーしようとします。

- `CRS_HOME` – Oracle ClusterwareのインストールのBINフォルダのフル・パス

VIPリソースの停止および登録解除

アプリケーション・リソースを登録解除した後、関連付けられているVIPリソースを停止して削除できます。これにより、VIPリソースは登録解除されます。VIPリソースを削除しても、Performance Management Architectのインストールには影響はありません。

- ▶ VIPリソースを停止して登録解除するには、`EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/Failover/EPMA_StopAndDeleteVIPResource.bat`を実行します。このバッチ・ファイルはコマンド・ウィンドウで実行し、完了すると一時停止します。いずれかのキーを押すと、コマンド・ウィンドウが閉じます。

VIPリソース・ステータスの確認

`EPMA_CreateAndStartVIPResource.bat`または`EPMA_StopAndDeleteVIPResource.bat`を実行した後、コマンド・ラインからこのコマンドを実行して、VIPリソースのステータスを確認できます。

```
crsctl status resource epmavip -v
```

ステータス`STATE=ONLINE`は、リソースが正しく実行中であることを示します。`EPMA_StopAndDeleteVIPResource.bat`を実行した後は、VIPリソースは存在なくなります。

処理スクリプト

Oracle Clusterwareは処理スクリプトを呼び出して、アプリケーション・リソース(たとえばPerformance Management Architectディメンション・サーバーなど)を停止または開始したり、アプリケーションのステータスを確認します。処理スクリプトは、Oracle Clusterwareまたはコマンド・ラインから実行可能です。処理スクリプトには日付、時間、実行された処理(開始、停止、クリーン、確認)および処理の結果(成功または失敗)が記録されます。

処理スクリプトは、`EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/Failover/EPMA_ActionScript.bat`を環境に応じて編集することにより作成します。

EPMA_ActionScript.batを編集して以下の変数を指定できます。これらの変数はスクリプトの最初に記述されます:

- LOG_PATH – アプリケーション・リソースの処理スクリプトが情報を記録するローカル・フォルダのフル・パス

例: set LOG_PATH=C:/CRS_ACTION/EPMA

有効なドライブ文字を持つパスを指定する場合、そのパスが存在しなければ、処理スクリプトによって実行時にパスが作成されます。

- LOGSCR – LOG_PATH値と環境の有効なファイル名の連結

例: set LOGSCR=%LOG_PATH%/ClusterActionEPMA.log

- SECONDS_TO_WAIT_FOR_START – 開始の失敗を宣言して呼出し元のプロセス(Oracle Clusterware)に0を返す前にアプリケーション・リソースが開始するまでの処理スクリプトの待機時間(秒)

例: set SECONDS_TO_WAIT_FOR_START=180

- SECONDS_TO_WAIT_FOR_STOP – 停止の失敗を宣言して呼出し元のプロセス(Oracle Clusterware)に0を返す前にアプリケーション・リソースが停止するまでの処理スクリプトの待機時間(秒)

例: set SECONDS_TO_WAIT_FOR_STOP=60



注:

Performance Management Architectのリリースが11.1.2.2の場合、EPMA_pre-11.1.2.2 sectionとラベル付けされた2つのセクションをコメント・アウトする必要があります。

アプリケーション・リソース

サブトピック

- [EPMA_CreateAndStartAppResource.batの編集](#)
- [アプリケーション・リソースの停止および登録解除](#)
- [アプリケーション・リソース・ステータスの確認](#)

アプリケーション・リソースの作成、登録、起動を行うには、EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/FailoverのEPMA_CreateAndStartAppResource.batを実行します。VIPリソースはVIPリソースと一組になって、一元化されたアクセスを提供します。

EPMA_CreateAndStartAppResource.batを実行する前に、これを環境に合うように編集できます。アプリケーション・リソースを停止および削除するには、異なるバッチ・ファイルを使用します。

crsctl stop resource EPMAServer -fを実行したり、Windows Servicesアプレットを利用してHyperion EPMA Serverサービスを直接停止することで、アプリケーション・リソースを停止する場合、Oracle Clusterwareはクラスタ内の別のノードでそれを再起動しようと試みます。アプリケーション・リソースがアイドル状態のままでは、EPMA_StopAndDeleteAppResource.batを実行する必要があります。アプリケーション・リソースをEPMA_StopAndDeleteAppResource.batを使用して削除した後に再起動するには、EPMA

_CreateAndStartAppResource.batを実行してそれを再作成し、開始してください。VIPリソースおよびアプリケーション・リソースを削除しても、Performance Management Architectのインストールには影響はありません。



注意

リソースとしてアプリケーションをOracle Clusterwareに登録するEPMA
_CreateAndStartAppResource.batを実行した後、Oracle ClusterwareコマンドによってPerformance Management Architectサーバーを開始して停止します。アプリケーション・リソースを(Windowsサービス・アプレット内などで)直接停止したり開始しないでください。

EPMA_CreateAndStartAppResource.batの編集

EPMA_CreateAndStartAppResource.batを編集して、以下の変数の値を指定できます。これらの変数はスクリプトの最初に記述されます:

- ACTION_SCRIPT – Performance Management Architectのインストールに含まれるEPMA
_ActionScript.batファイルのフル・パスとファイル名

このバッチ・ファイルは、アプリケーション・リソース(たとえばPerformance Management Architectサーバーなど)の管理のためにOracle Clusterwareが使用する処理スクリプトです。

- FAILOVER_DELAY – 失敗が検出された後、フェイルオーバー・プロセスが開始するまでの待機時間(秒)
- FAILURE_THRESHOLD – Oracle Clusterwareがリソースを使用不可とマークしてモニタリングを止めるまでに、リソースに対して指定した失敗の間隔において検出された失敗の回数。

リソースが指定した回数だけ失敗すると、Oracle Clusterwareはリソースを停止します。値が0の場合、失敗の追跡は無効化されます。最大値は20です。

- FAILURE_INTERVAL – Oracle ClusterwareがFAILURE_THRESHOLD属性を適用する間隔(秒)

値が0の場合、失敗の追跡は無効化されます。

- START_TIMEOUT – 開始の失敗を宣言する前の、アプリケーション・リソースが開始するまでのOracle Clusterwareの待機時間(秒)
- STOP_TIMEOUT – 停止の失敗を宣言する前の、アプリケーション・リソースが停止するまでのOracle Clusterwareの待機時間(秒)
- CHECK_INTERVAL – 繰り返される確認の間隔(秒)

間隔を短くして確認をより頻繁に行うと、スクリプト・エージェントを使用する際にリソースの消費が増加します。リソースの消費を抑えるには、アプリケーション固有のエージェントを使用してください。

- RESTART_ATTEMPTS – Oracle Clusterwareがリソースの再配置を試みる前に、リソースの現在のサーバー上でリソースの再起動を試みる回数

たとえば、値が1の場合、Oracle Clusterwareは2回目の失敗以降リソースを再配置しようとします。値を0にすると、再起動されることはありませんが、Oracle Clusterwareは常に別のサーバーにリソースをフェイルオーバーしようとしています。

- CRS_HOME – Oracle ClusterwareのインストールのBINフォルダのフル・パス

アプリケーション・リソースの停止および登録解除

- ▶ アプリケーション・リソースを停止して登録解除するには、EPMA_StopAndDeleteAppResource.batを実行します。このバッチ・ファイルはコマンド・ウィンドウで実行し、完了すると一時停止します。いずれかのキーを押すと、コマンド・ウィンドウが閉じます。

アプリケーション・リソース・ステータスの確認

EPMA_CreateAndStartAppResource.batを実行した後は、コマンド・ラインから次のコマンドを1つずつ実行して、アプリケーション・リソースのステータスを表示することができます：

- crsctl status resource epmavip -v
- crsctl status resource EPMAserver -v



ヒント：

コマンドを個別に実行するかわりに、両方のコマンドを実行するEPMA_Status.batを実行できます。これはEPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/AppServer/DimensionServer/ServerEngine/Failoverにあります。

リソースが正しく実行されると、ステータスがSTATE=ONLINEになります。

Oracle Clusterwareは、checkパラメータをアプリケーション・リソース作成時の確認の間隔に設定して、処理スクリプトEPMA_ActionScript.batを実行します。処理スクリプトが1を返す場合(アプリケーションが実行されていないことを示します)、クラスタ内の別のノードでアプリケーションを起動しようと試みます。

EPMA_StopAndDeleteAppResource.batを実行した後、コマンド・ラインからこのコマンドを実行し、リソースがもう存在せず、Hyperion EPMA Serverサービスがクラスタ内のどのノードでも実行中でないことを確認します。

```
crsctl status resource EPMAserver -v
```

Setting the Performance Management Architectサーバーの論理Webアドレスの設定

EPM Systemコンフィグレータを使用して、Hyperion EPMA Web層 – Webアプリケーション・サービスのPerformance Management Architectサーバーの論理Webアドレスを、クラスタのアドレスまたは名前に設定します。

- ▶ EPM Systemコンフィグレータで論理Webアドレスを設定するには：
 1. 構成するEPM Oracleインスタンスを選択し、「次へ」をクリックします。
 2. 「すべて選択解除」をクリックします。
 3. ツリーを展開します。
 4. **Hyperion Foundation**、「Webアプリケーションの論理アドレスの構成」の順に選択して、「次へ」をクリックします。
 5. 各Java Webアプリケーションに対して：
 - a. 論理Webアドレスの設定を選択します。
 - b. 製品コンポーネント: **DimensionServer**で、「ホスト」列の値をダブルクリックします。
 - c. 値を変更して、次の項目のいずれかを指定します：

- RACがOracle 11g リリース2またはそれ以降の場合はSCAN (Single Client Access Name)
 - アプリケーションVIP
 - アプリケーションVIPをポイントするホスト名の別名
- d. 「次」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックして構成を完了します。
 7. Hyperion EPMA Web層 - Webアプリケーション・サービスを開始します。
 8. 数分間待機してから、EPM Workspaceにログオンします。

Reporting and Analysis FrameworkおよびInteractive Reportingのスケールリング

この項では、Reporting and Analysisのサービス層コンポーネントのスケールリングの方法について説明します。

EPM Systemコンフィグレータを使用したReporting and Analysis Java Webアプリケーションのクラスターリングの詳細は、[14ページのEPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスターリング](#)を参照してください。

仮定と前提条件

- EPM System製品を、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイド*または『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』を使用してインストールし、構成しました。
- EPM Systemサービスが実行中です。
- 最初のホスト・マシンのReporting and Analysisの構成中に、EPM Systemコンフィグレータの「Reporting and Analysis Frameworkサービスの構成」ページで、共有ファイル・システムの場所であるリポジトリの場所を指定しました。Windowsマシンで、これはUNCパスとして指定されている必要があります。
- Windowsプラットフォームでは、Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework Windowsサービスは、ローカル・システム・アカウントの下ではなく、ネットワーク共有フォルダに対する十分な権限を持つユーザー・アカウントの下で実行されています。

EPM Systemコンフィグレータでこの手順を実行できます。「共通設定」パネルで、「**Windowsサービスをローカル以外のシステム・アカウントとして実行**」を選択して、共有フォルダのアクセス権を持つユーザーを指定します。

Reporting and Analysis FrameworkおよびInteractive Reportingのスケールリング

Reporting and Analysisサービス層コンポーネントを追加のホスト・マシンに対してスケールリングするか、単一ホスト・マシンで垂直方向にスケールリングすることができます。手順は、水平方向または垂直方向のどちらにスケールリングする場合も同じです。各ホストで、Reporting and Analysis FrameworkサービスおよびOracle Hyperion Interactive Reportingサービスの1インスタンスのみをインストールします。

Reporting and Analysis FrameworkまたはInteractive Reportingをスケールリングする対象のホスト・マシンごとに、この手順を完了します。

- ▶ Reporting and Analysis FrameworkおよびInteractive Reportingをスケーリングするには:
1. 水平方向スケーリングの場合: Reporting and Analysis FrameworkまたはInteractive Reportingを別のホスト・マシンにインストールします。
 2. EPM Systemコンフィグレータを起動します: 「スタート」メニューで、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM Systemコンフィグレータ(すべてのインスタンス)」の順に選択します。
 3. Oracleインスタンスで、この手順を完了してから「次」をクリックします。
 - a. 「EPM Oracleインスタンスのホーム・ディレクトリ」で、EPM Oracleホーム・ディレクトリの場所が、Foundation Servicesの構成中に指定された場所と同じであることを確認します。
 - b. 「EPM Oracleインスタンス名」に、新しいインスタンス名を入力します。
 4. Oracle Hyperion Shared Servicesレジストリ・データベースの構成画面で、次の手順を実行します:
 - a. 「前に構成されたShared Servicesデータベースに接続」を選択します。
 - b. Shared Servicesレジストリのデータベース接続情報と、データベースへのアクセスに使用するデータベース・アカウントのユーザー名およびパスワードを入力します。この情報は、Foundation Servicesのデプロイ中に入力した情報と同一である必要があります。
 - c. 「次」をクリックします。

Foundation Servicesと同じマシン上、またはShared Servicesレジストリがすでに構成済のマシン上でスケーリングする場合、Shared Servicesレジストリの構成画面は表示されません。

5. 「EPM Systemコンフィグレータ」で、「フレームワーク・サービスの構成」を選択します。また、Interactive Reportingも構成する場合は、「Reporting and Analysisサービスの構成」を選択して、「次」をクリックします。

「データベースの構成」タスクは選択しないでください。Reporting and Analysisのデータベース構成は、最初のインスタンスに対して1回のみ必要です。

6. 「Reporting and Analysis Frameworkサービスの構成」ページで、次の変更を行います:
 - 最初のホストの構成中に指定したのと同じ共有ファイル・システムの場所を指定します。このサービスをWindowsサービスとして実行する場合、マップ済ドライブのかわりにUNCパスを指定します。(これにより、Windowsがマップ済ドライブを起動時に作成しようとするときに発生する可能性がある権限エラーを阻止できます。)

すべてのマシンでこれと同じ共有ファイル・システムの場所を指定する必要があります。

 - 使用するポート範囲を指定するか、「次」をクリックしてデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。
7. Oracle Hyperion Interactive Reportingを構成する場合は、「Reporting and Analysisサービスの構成」ページで、使用するポート範囲を指定するか、「次」をクリックしてデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。
8. Reporting and Analysis Frameworkエージェント・ポートの構成で、使用するポートを指定するか、「次」をクリックしてデフォルトのポートをそのまま使用します。
9. 「次」をクリックして、構成が完了したら「終了」をクリックします。

スケーリングの検証

デプロイメント・レポートを実行し、コンポーネントがスケーリングされていることを確認します:

EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry report deployment
```

レポート・ファイル(deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html)は、EPM_ORACLE_INSTANCE/
diagnostics/reportsに格納されています。

スケールアップされたコンポーネントの追加インスタンスが表示されます。

Financial Managementサーバーのクラスタリング

次の手順は、サーバーをFinancial Management環境に追加し、クラスタを定義し、サーバーをクラスタに追加するための推奨プロセスの概要を示します。

- ▶ サーバーをFinancial Management環境でクラスタリングするには:

 1. Financial Managementを1つ以上の新規サーバーにインストールした後、EPM Systemコンフィグレータをすべての新規サーバーで実行し、「サーバーの構成」タスクおよび「データベースの構成」タスクを選択します。
 2. EPM Systemコンフィグレータをいずれか1つのアプリケーション・サーバーに対して実行し、「アプリケーション・クラスタの構成」タスクを選択して、クラスタの定義とサーバーに対するクラスタの追加または削除を行います。
 3. Foundation Services Java WebアプリケーションおよびWebサーバーを再起動します。
 4. EPM Workspaceで、優先クラスタに対して各アプリケーションを登録します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』の「EPM Workspaceへのアプリケーションの再登録」を参照してください。

IISのStrategic FinanceまたはFDM IIS Webアプリケーションのロード・バランシング

複数のStrategic FinanceまたはFDM IIS Webアプリケーションでロード・バランシングをサポートするようにOracle HTTP Serverを構成できます。ロード・バランサは、EPM Systemコンフィグレータを使用してWebサーバーの前に設定します。

- ▶ Strategic FinanceまたはFDM IIS Webアプリケーションのロード・バランサとしてOracle HTTP Serverを設定するには:

 1. Strategic FinanceまたはFDM IIS Webアプリケーションを含めたEPM System製品を2つ以上のマシンにインストールします。
 2. EPM Systemコンフィグレータを使用してEPM System製品を構成します。
 3. 環境内の各マシンで、Strategic FinanceまたはFDMを構成します。
 4. 1つのマシンで、「Foundation」タスクから**Webアプリケーションの論理アドレスの更新**を選択し、「ホスト」にロード・バランサまたはOracle HTTP ServerのURLを入力します。

このタスクは、環境内の1つのマシンでのみ実行する必要があります。

5. 最後にWebサーバーを構成します。(「Foundation」タスクの「**Webサーバーの構成**」を選択します。)その後、WebサーバーおよびEPM Workspaceを再起動します。

データ管理のクラスタリング

この項では、EPM Systemコンフィグレータの外部にあるData Management製品コンポーネントのクラスタリングについて説明します。FDMEのクラスタリングの詳細は、[14ページのEPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

FDMクラスタ

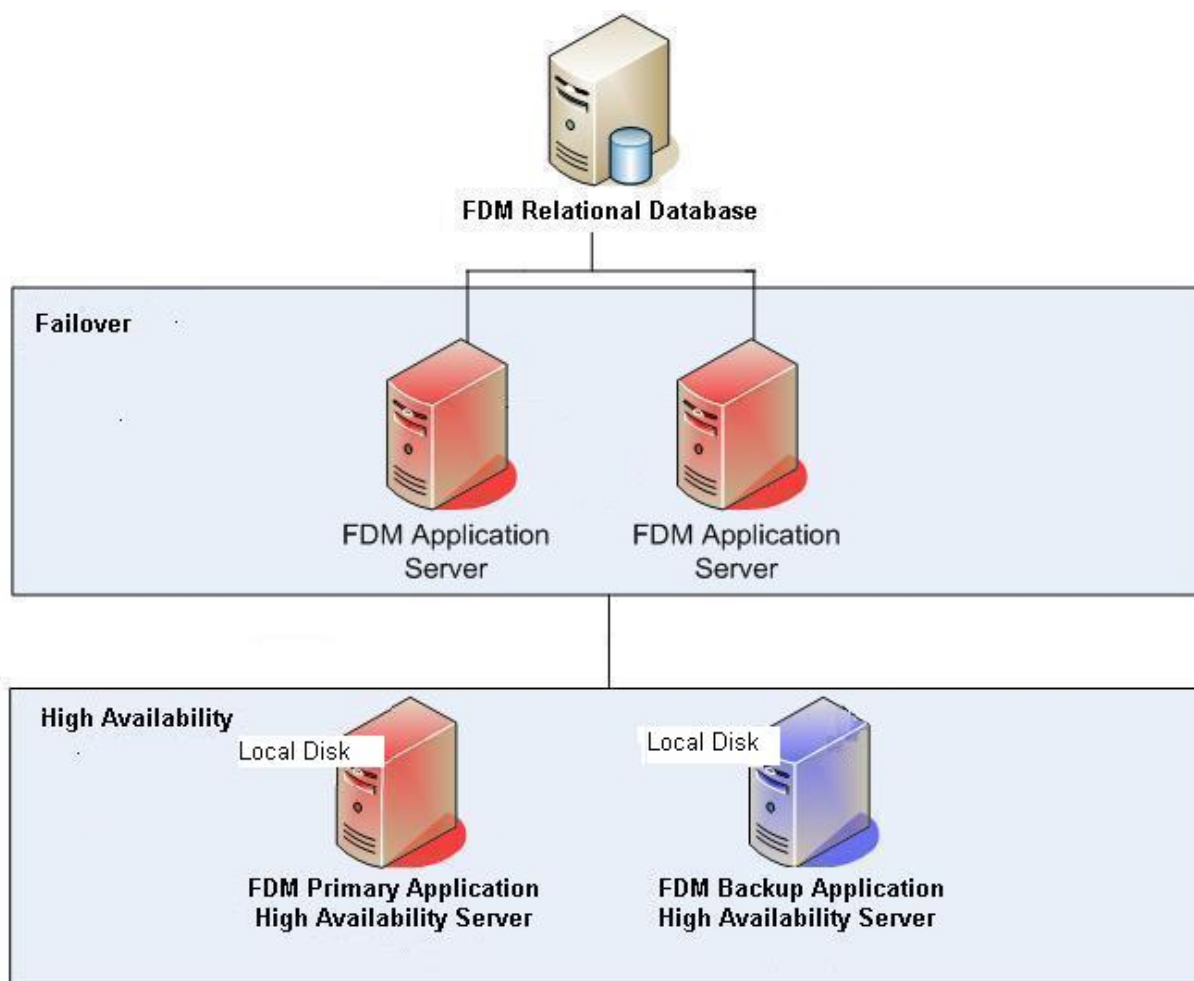
FDMアプリケーション・サーバーは、FDM固有のロード・バランサを使用してクラスタリングできます。ロード・バランサの構成については、『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Edition Configuration Guide』を参照してください。

Oracle HTTP ServerをFDM IIS Webアプリケーション用のロード・バランサとして設定できます。手順は、[26ページのIISのStrategic Finance](#)または[FDM IIS Webアプリケーションのロード・バランシング](#)を参照してください。

EPM Systemコンフィグレータを使用して、FDM WebアプリケーションとOracle HTTP Serverまたはサードパーティ製ロード・バランサのどちらかをクラスタ化して高可用性を達成できます。手順は、[26ページのIISのStrategic Finance](#)または[FDM IIS Webアプリケーションのロード・バランシング](#)を参照してください。FDMリレーショナル・データベースのクラスタ化については、データベース・ソフトウェアのドキュメントを参照してください。

[27ページの図 1](#)では、FDMリレーショナル・データベースがフェイルオーバーと高可用性のために固有のEPM Systemアプリケーション・サーバーでクラスタリングされたシナリオを示します。

図1 フェイルオーバーおよび高可用性のためにクラスタリングされたFDM



Data Relationship Management クラスタ

Oracle Data Relationship Management Webアプリケーションを、Oracle HTTP Serverまたはサードパーティ製ロード・バランサのいずれかとクラスタ化できます。Oracle HTTP Serverとのクラスタ化の手順については、*Oracle Hyperion Data Relationship Management インストール・ガイド*のData Relationship Management Webアプリケーションのロード・バランシングの構成に関する項を参照してください。

Data Relationship Management Serverアプリケーションは、プライマリ-セカンダリのマシン構成を使用して、ロード・バランシング目的のみでクラスタ化できます。実行時間の長い読取り専用の操作は、書込み操作を扱うプライマリ・アプリケーション・サーバーへの処理負荷を軽減するために、セカンダリ・アプリケーション・サーバー上で処理できます。ロード・バランシングのためのData Relationship Management Serverアプリケーションの構成の手順については、*Oracle Hyperion Data Relationship Management インストール・ガイド*のホスト・マシンの構成に関する項を参照してください。



注:

アプリケーション・サーバーの要求の処理は、必ずしもクラスタ内のマシン間に均等に分散されるわけではありません。特定のマシンへのルーティングは、アクセスされるデータおよび実行される操作タイプに基づいて決まります。

Data Relationship Managementをクラスタ化されたデータベース環境にインストールした状態では、Data Relationship Management構成コンソールのリポジトリ・ウィザードからデータベースを作成するときにデータベース管理者が実行するスクリプトを生成を選択できます。2つのスクリプトが生成されます: 1つはスキーマ所有者やデータベースを作成するもので、もう一方はデータベース・スキーマ・オブジェクトを作成するためのものです。Data Relationship Managementリポジトリをクラスタ化する手順については、使用するデータベース・ソフトウェアのドキュメントを参照してください。

Essbaseクラスタの構成

この項では、Essbaseサーバーのアクティブ-アクティブおよびアクティブ-パッシブ・クラスタリングについて説明します。Oracle Essbase Administration Services Java WebアプリケーションおよびOracle Hyperion Provider Services Java Webアプリケーションのクラスタリングの詳細は、[14ページのEPM Systemコンフィグレータを使用したJava Webアプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

アクティブ-パッシブ・クラスタリング(Windows): Windowsでは、Microsoft Clustering Servicesの使用をお勧めします。これは、NTFSがクラスタ・ファイル・システムではなく、CIFSベースのファイル・システムがEssbaseのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があるためです。Microsoft Cluster Serviceを使用してアクティブ-パッシブEssbaseサーバー・クラスタを構成するには、[29ページのアクティブ-パッシブEssbaseクラスタの構成\(Windows\)](#)を参照してください。

アクティブ-パッシブ・クラスタリング(Linux/UNIX): Linux/UNIXシステムでは、共有ファイル・システムによるOPMNベースのフェイルオーバーの使用をお勧めします。最適なパフォーマンスのためには、ストレージ・エリア・ネットワークを使用した対称エンタープライズ等級ソリューションをお勧めします。共有ストレージは、サーバーの通常の操作中に、アクティブ・システムおよびパッシブ・システムの両方で読取りと書込みのアクセスが可能であ

する必要があります。アクティブ-パッシブEssbaseクラスタには、2つのEssbaseサーバーのみ含めることができます。31ページの[アクティブ-パッシブEssbaseクラスタの構成\(UNIX\)](#)を参照してください。

アクティブ-アクティブ・クラスタリング: Provider Servicesを使用して、アクティブ-アクティブEssbaseクラスタを構成できます。アクティブ-アクティブEssbaseクラスタは、高可用性とロード・バランシングをサポートします。アクティブ-アクティブEssbaseクラスタは、データベース上の読取り専用操作をサポートしており、レポート作成目的にのみ使用してください。アクティブ-アクティブEssbaseクラスタは、データのライトバックまたはアウトラインの変更をサポートせず、1つのデータベースの変更内容をクラスタ内のすべてのデータベースに対して同期化するなどのデータベースの複製タスクを管理しないため、Oracle Hyperion Planningをサポートしていません。PlanningがEssbaseをデータ・ソースとしてクラスタ・モードで使用するように構成されている場合、Oracle Hyperion Calculation Managerをルール・エンジンとしてビジネス・ルールを起動する機能はサポートされません。36ページの[アクティブ-アクティブEssbaseクラスタの構成](#)を参照してください。

EPM Systemコンフィグレータを使用してアクティブ-パッシブ・フェイルオーバー、Provider Servicesを使用してアクティブ-アクティブ・フェイルオーバーを実装できますが、この両方を実装することはできません。

表1 Essbaseサーバーのクラスタリングの構成

機能	アクティブ-パッシブ (Windows)	アクティブ-パッシブ(UNIX)	アクティブ-アクティブ
ライトバック	はい	はい	いいえ
フェイルオーバー	はい	はい	はい
ロード・バランシング	いいえ	いいえ	はい
高可用性	はい	はい	はい

アクティブ-パッシブEssbaseクラスタの構成(Windows)

Microsoft Cluster Serviceを使用して、Essbaseでアクティブ-パッシブ・クラスタを設定します。

まず、Essbaseを構成してから、Microsoft Cluster Serviceを構成します。

- ▶ 外部のフェイルオーバー・メカニズムによりフェイルオーバーを管理できるようにEssbaseを構成するには:
1. 最初のマシン(Node1)で、EPM Systemコンフィグレータを使用して、クラスタで最初のEssbaseインスタンスを設定します:
 - 「**Essbaseクラスタ名**」にはクラスタの名前を指定します。
 2. 2番目のマシン(Node2)で、EPM Systemコンフィグレータを使用して、最初のマシンで作成したクラスタにこのEssbaseサーバーを含めます。
 - 「Essbaseサーバーの構成」ページの「**アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)**」の場所は、クラスタ内の最初のマシンで指定した場所と一致する必要があります。
 - 「**既存のクラスタへの割当て**」をクリックし、「**OK**」をクリックして、最初のマシンで作成したクラスタにこのEssbaseサーバーを含めます。

2番目のマシンでのクラスタ設定時、EPM SystemコンフィグレータによってARBORPATH/binにあるessbase.cfgが更新され、failovermode=trueと指定されます。
 3. 共有ドライブでARBORPATH/bin/essbase.cfgを開き、次のことを確認します:

- FAILOVERMODEがTRUEに設定されています
- ESSBASESERVERHOSTNAMEが仮想ホスト名に設定されています

4. 仮想IPを構成します。

Microsoft Cluster Serviceを使用するには、フェイルオーバー・プロセスへのバインドのために、仮想IPがハードウェア・クラスタで構成されていることが必要です。EssbaseではVIPバインディングを直接サポートしていないため、これは間接的に実行する必要があります。

- a. Essbase HOSTプロパティがVIPを指すように、Shared Servicesレジストリを更新します。次のコマンドを3回(各Essbaseインスタンスに1回とクラスタに1回)実行します:

```
epmsys_registry.bat updateproperty #<guid>/@host<Virtual
hostname>
```

GUIDはクラスタでの各Essbaseインスタンスの一意のID(essbasecluster-inst1およびessbasecluster-inst2など)、および定義したクラスタの一意のID(EssbaseCluster-1など)。

- b. hostsファイルを更新して、VIPホスト名が、マシンでの名前解決に出現する最初の名前であること、または別名がボックスのプライマリ物理IPに適切に設定されていることを確認します。

クラスタの両方のノードで、このタスクを実行します。

5. OPMNをMicrosoft Cluster Serviceによって管理されるサービスとして設定します。31ページのMicrosoft Cluster Serviceの構成を参照してください。

Essbaseは、Microsoft Cluster Serviceにより直接管理されません; ローカル・ノードのEssbaseエージェント・プロセスを起動、停止および再起動するOPMNにより、すでに管理されています。Essbaseアプリケーション・プロセスは、OPMNにより管理されていないため、自動的に起動および停止されません。これらのサーバー・プロセスは、Essbaseエージェントにより管理されています。

6. オプションで、Essbaseプロセスの起動、停止およびステータス・チェックのスクリプトを作成します。

EssbaseはMicrosoft Cluster Serviceによって直接管理されるのではなく、OPMNによって管理されているため、わずかな時間遅延が生じる可能性があり、その間OPMNではEssbaseを正常に停止できません。

OPMNにはロジックが組み込まれていて、Essbaseエージェントを正常に停止できないと、OPMNにより強制的に停止されます。Essbaseエージェントが終了すると、Essbaseサーバーにもロジックがあり、フェイルオーバー・モードで実行中に、リース有効期限ウィンドウ内で自動的に終了します(デフォルトで、<= 20秒)。

Microsoft Cluster ServiceによりOPMNが停止すると、その結果Essbaseエージェントが停止するが、それでも実行中のEssbaseアプリケーションが残るという可能性があるため、これは知っておく必要があります。ただし、クラスタ・サービスの観点から、フェイルオーバーが発生し、OPMNがスタンバイ・ノードで起動する可能性があります。OPMNによりスタンバイ・ノードでEssbaseエージェントが起動する可能性もありますが、ソース・ノードですべてが停止していなければ起動しないサーバー・プロセスがある可能性があります。

この問題を軽減するために、カスタム・ステータス・チェック・スクリプトを作成できます。たとえば、OPMNのSTOP後の操作として実行し、一定の時間(たとえば、20秒)後にEssbaseサーバー・プロセスが実行していることを確認できるカスタム・ステータス・チェック・スクリプトを作成できます。

クライアント側で必要な変更はありません。

EssbaseサーバーはFAILOVERMODEで構成されているため、アクティブ・ノード情報をShared Services Registry データベースに対して公開し、ここにEssbase高可用性状態管理表が格納されます。

Provider ServicesおよびShared Services Registry APIの両方に組み込みロジックがあり、Essbase高可用性状態管理表に問い合わせることにより、アクティブなEssbaseサーバーを確認します。

Microsoft Cluster Serviceの構成

Microsoft Cluster Serviceを構成する前提条件:

- Node1およびNode2の静的IPアドレス
- クラスタのIPアドレス
- ノードの物理IPの別名となる仮想ホスト名
- AD内のオブジェクトとして存在するクラスタ・ノード
- サービスの管理に使用されるドメイン・サービス・アカウント
- Microsoft Cluster Service構成に使用可能なクォーラム・ディスク
- 両方のクラスタ・ノードに使用可能な共有ドライブ

▶ Microsoft Cluster Serviceを構成するには:

1. Microsoft Cluster Service Cluster Administrator (Microsoftクラスタ内)で、「アプリケーションの構成」を選択して、OPMNをMicrosoft Cluster Serviceにより管理される共有リソースとして構成します。
2. 汎用サービスを作成します。
3. 汎用サービスをそのサービス名で構成します。(クラスタ・ノードで構成された同じサービス名を使用します。)

たとえば、OPMNサービスがクラスタの各ノードで構成されていることを確認します。

4. 管理しやすくするために、共有ディスクと構成済のサービスを新しいグループに移動します。

アクティブ-パッシブEssbaseクラスタの構成(UNIX)

ライトバック機能を持つアクティブ-パッシブ・フェイルオーバーを実現するためにEssbaseサーバーをクラスタリングできます。Essbaseフェイルオーバー・クラスタでは、Oracle Process Manager and Notification Serverのサービス・フェイルオーバー機能を使用します。1つのEssbaseインストールはアクティブ-パッシブ・デプロイメントで実行され、1つのホストでEssbaseエージェントと2つのサーバーが実行されます。Oracle Process Manager and Notification Serverによりエージェント・プロセスが停止、起動およびモニターされます。

Essbaseクラスタに関する次の情報に注意してください:

- アクティブ-パッシブEssbaseクラスタには、2つのEssbaseサーバーのみ含めることができます。追加のEssbaseサーバーをインストールするには、追加のEssbaseのインスタンスをインストールする必要があります。これらのサーバー間で、ARBORPATHとアプリケーションの場所を同じにする必要があります。アプリケーションは共有ドライブ上にあり、クラスタ名はデプロイメント環境内で一意である必要があります。
- アクティブ-パッシブEssbaseクラスタは、データベースへのライトバックでのフェイルオーバーをサポートします。
- アクティブ-パッシブEssbaseクラスタはロード・バランシングをサポートしていません。

- Essbaseクラスタを設定する場合、アプリケーションの場所は共有ドライブまたはUNCパスである必要があります。高可用性のためにEssbaseを構成している場合、UNCパスを指定することをお勧めします。この場所は、クラスタのすべてのEssbaseサーバーによってアクセス可能なファイル・システム上である必要があります。
- クラスタに2番目のEssbaseサーバーを追加する場合、そのアプリケーションの場所であるARBORPATHはEPM Systemコンフィグレータにより、最初のEssbaseサーバーのARBORPATHに変更されます。
- Administration Servicesで管理している特定の物理Essbaseサーバーについて、Administration ServicesではそのEssbaseサーバーが属しているクラスタの名前のみが表示されます。
- クラスタリングされていない環境で作業しているときに、クラスタリングされた環境に変更する必要があるが、Essbaseアプリケーションが共有場所にない場合、アプリケーションを共有場所に移行する必要があります。『Oracle Essbaseデータベース管理者ガイド』のアプリケーションのコピーまたは移行に関する項を参照してください。

Oracle Process Manager and Notification (OPMN)サーバーを使用したEssbaseのクラスタリング

Oracle Process Manager and Notificationサーバー(OPMN)では、Essbaseエージェント・プロセスのモニターや制御を行うことができます。Essbaseエージェントの情報をopmn.xmlに追加すると、OPMNコマンド・ライン・インタフェースを使用してOPMNでエージェントの起動、停止および再起動を行うことができます。Essbaseエージェントの応答がない場合、想定外の終わり方をした場合、またはpingおよび通知操作によってアクセス不可と決定された場合、OPMNによってエージェントが自動的に再起動されます。また、OPMNのフェイルオーバー機能を使用してEssbaseクラスタの高可用性を実現することもできます。

次の表に、OPMNを使用したEssbaseのインストール、構成および管理のプロセスの概要を示します。

表2 EssbaseおよびOPMNのインストール、構成および管理

タスク	参照
<p>Essbaseを含むEPM System製品をインストールします。各ノードにEssbaseをローカルにインストールします。インストール時、EPM Systemインストーラは、Essbaseサーバー・マシンにOPMNもインストールします。</p> <p>注:</p> <p>Oracle Hyperion Shared Servicesレジストリ・データベースをEssbaseとは異なるマシンに置くことをお勧めします。</p>	<p>『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』のEPM System製品のインストールに関する項</p>
<p>Essbaseを含むEPM System製品を構成します。デフォルトでは、EPM Systemコンフィグレータは、OPMNでEssbaseを管理するよう設定します。Essbaseクラスタリング(アクティブ・パッシブのみ)を実装する場合、EPM Systemコンフィグレータでの構成時に次のようにします:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 最初のマシンでEPM Systemコンフィグレータを使用してクラスタを設定します: 	<p>『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』のEPM System製品の構成に関する項</p>

タスク	参照
<ul style="list-style-type: none"> • 「Essbaseサーバーの構成」ページで「アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)」に指定する場所は共有ドライブにする必要があります。この場所は、クラスタのすべてのEssbaseサーバーによってアクセス可能なファイル・システム上である必要があります。 • 「Essbaseクラスタ名」にはクラスタの名前を指定します。 <p>2. 2番目のマシンで、EPM Systemコンフィグレータを使用して、最初のマシンで作成したクラスタにこのEssbaseサーバーを含めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「Essbaseサーバーの構成」ページの「アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)」の場所は、クラスタ内の最初のマシンで指定した場所と一致する必要があります。 • 「既存のクラスタへの割当て」をクリックし、「OK」をクリックして、このEssbaseサーバーを最初のマシンで作成したクラスタに結合します。 <p>2番目のマシンでのクラスタ設定時、EPM SystemコンフィグレータによってARBORPATH/binにあるessbase.cfgが更新され、failovermode=trueと指定されます。</p>	
<p>EPM Systemコンフィグレータを使用してアクティブ-パッシブEssbaseクラスタを設定する場合、クラスタの2つのノードでEssbaseフェイルオーバーを設定するための追加手順を実行する必要があります。</p>	<p>33ページのアクティブ-パッシブEssbaseクラスタのOPMN.XMLの編集</p>
<p>必要に応じて、OPMNサービス・フェイルオーバーと、フェイルオーバー用にEssbaseを構成するためにopmn.xmlに必要な要素と属性について確認します。</p>	<p>46ページのOPMNによるEssbaseサーバーのサービス・フェイルオーバー</p>
<p>OPMNを使用してEssbaseを開始します。</p>	<p>『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』のEPM System製品の開始と停止に関する項</p>
<p>OPMNのログを確認して問題を診断します。</p>	<p>Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイドのEssbaseの章</p>
<p>OPMNを使用してEssbaseを管理することで、Essbaseエージェント・プロセスのモニターと制御を行えます。</p>	<p>『Oracle Essbaseデータベース管理者ガイド』のOPMNを使用したEssbaseの管理に関する項</p>

アクティブ-パッシブEssbaseクラスタのOPMN.XMLの編集

EPM Systemコンフィグレータを使用してアクティブ-パッシブEssbaseクラスタを設定する場合、追加手順を実行して両方のクラスタ・ノードでEssbaseフェイルオーバーを設定する必要があります。

▶ Essbaseアクティブ・パッシブ・クラスタの設定を完了するには:

1. EPM_ORACLE_INSTANCE/config/OPMN/opmn/opmn.xmlを更新し、OPMNサービス・フェイルオーバー・ネットワーク・トポロジを指定します。<notification-server interface>セクションで、<topology>セクションを追加します。例:

```
<notification-server interface="any">
  <ipaddr remote="
    hostName
    " />
  <port local="
    portNumber
    " remote="
    portNumber
    " />
  <ssl enabled="true" wallet-file="\Oracle\Middleware\user_projects
\epmsystem1\config\OPMN\opmn\wallet"/>
  <topology>
    <nodes list="
      nodeName1
      :
      nodeRemotePort1
      ,
      nodeName2
      :
      nodeRemotePort2
      "/>
  </topology>
</notification-server>
```

2. ファイルの同じセクションで、hostNameを更新し、このマシンのnodeNameと一致させます。

完全修飾名を使用することをお勧めします。

3. ファイルの同じセクションで、フェイルオーバー・ノードのOPMNサーバー間の通信メカニズムとしてSSL通信を有効または無効にします。デフォルトでは、ssl enabledパラメータはTrueです。

SSLを有効にするには、クラスタの両ノードでウォレット・ファイルを再作成することも必要です。ウォレット・ファイル・パラメータは、両方のマシンで同じである必要があります。

SSL通信を無効にするには、ssl enabledパラメータをFalseに変更します。例:

```
<notification-server interface="any">
  <ipaddr remote="
    hostName
    " />
  <port local="
    portNumber
    " remote="
    portNumber
    " />
  <ssl enabled="false" wallet-file="\Oracle\Middleware\user_projects
\epmsystem1\config\OPMN\opmn\wallet"/>
  <topology>
    <nodes list="
      nodeName1
      :
      nodeRemotePort1
      ,

```

```

        nodeName2
        :
        nodeRemotePort2
    "/>
</topology>
</notification-server>

```

ここで、nodePort1とnodePort2は、クラスタ内の各マシン上のOPMNのリモート・ポートです。

4. opmn.xmlを更新し、Essbaseのサービス・フェイルオーバーを有効にします。<ias-component id="Essbase">セクションで、service-failover="1"を追加します。例:

```

        <ias-component id="Essbase">
            <process-type id="EssbaseAgent" module-id="ESS" service-failover="1"
            service-weight="100">

```

5. opmn.xmlの<ias-component id="Essbase">セクションで、最初のノードについて、service-weight="100"をservice-weight="101"に変更します。2番目のノードについては、値を100のままにします。
6. opmn.xmlを更新し、クラスタの名前を反映させます。<ias-component id="Essbase">セクションで、id="Essbase"を"Essbase"からクラスタの名前に変更します。たとえば、次を変更します:

```

<ias-component id="Essbase">

```

先:

```

<ias-component id="
EssbaseClusterName
">

```

7. opmn.xmlで、"numprocs"をプロセス・セット定義から除去し、restart-on-deathの値を"true"に変更します。たとえば、次のセクションを編集します:

```

<process-set id="AGENT" numprocs="1" restart-on-death="false">

```

次のとおりです:

```

<process-set id="AGENT" restart-on-death="true">

```

Essbaseが起動して稼働すると、OPMNはTCPベースのforward pingをエージェントに送信します。ping試行が失敗すると、OPMNはエージェントとのネゴシエーションを最大で3回試行します。すべてのping試行が失敗すると、OPMNはエージェントを停止します。OPMNは、次のシナリオに対してエージェントの再起動を試行します:

- restart-on-death (opmn.xml)がTRUEに設定されている場合。

本番環境では、restart-on-deathは常にTRUEに設定しておく必要があります。フェイルオーバーの試行前に、まずローカル・ノードでプロセスを再起動することをお勧めします。restart-on-deathがTRUEに設定されていると、OPMNはまず、opmn.xmlに構成されている再起動の回数(最初の起動と再起動の回数)だけ、ローカル・ノ

ドのEssbaseの再起動を試行します。すべての再起動に失敗すると、スタンバイ・ノードへのフェイルオーバーが行われます。

開発およびテスト環境では、`restart-on-death`をFALSEに設定してフェイルオーバーをテストできます。

デフォルト・モードである非フェイルオーバー・モードでは、`restart-on-death`のデフォルト設定はFALSEです。

- フェイルオーバー・モードがオンの場合。これは`restart-on-death`値より優先されます。`restart-on-death`がFALSEで、フェイルオーバー・モードがオンである場合、OPMNはEssbaseをアクティブ・ノードまたはパッシブ・ノードで起動する可能性があります。

アクティブ-アクティブEssbaseクラスタの構成

Provider Servicesを使用すると、あるEssbaseサーバー内のデータベースとまったく同じデータベースのアクティブ-アクティブ・クラスタを、同じコンピュータ上の複数のEssbaseサーバー、またはネットワーク上の複数のコンピュータに分散されているEssbaseサーバーに作成できます。



注:

Essbaseサーバーの使用が、ライセンスの制約を受ける場合があります。

Provider Servicesクライアントには、Oracle Smart View for Officeクライアント、カスタムJavaアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)クライアント、XML for Analysis (XMLA)クライアントが含まれます。Provider Servicesは、クラスタに属するデータベース・インスタンスにクライアント要求を分散します。アクティブ-アクティブEssbaseクラスタは、データベース上の読取り専用操作をサポートします。データのライトバックやアウトラインの変更はサポートしていません。アクティブ-アクティブEssbaseクラスタは、1つのデータベースの変更をクラスタ内のすべてのデータベースに対して同期化するなどのデータベースの複製機能を管理しません。

一連のEssbaseサーバーを構成してアクティブ-アクティブ・クラスタリングを行ったら、管理サービス・コンソールのエンタープライズ・ビューの「Provider Services」ノードで、クラスタを定義して使用可能にする必要があります。[38ページのクラスタリングされたデータベース・コンポーネントを使用可能にする](#)を参照してください。

Provider Servicesでのアクティブ-アクティブ・クラスタの構成

EssbaseがProvider Servicesでクラスタリングされ、サードパーティ製のツールがない場合:

- Essbaseにはライトバック機能がなく、レポート用にのみ使用されます。このため、Planningはサポートされません。
- ノードをロードして個々に計算する必要があります。

アクティブ-アクティブEssbaseクラスタへのサーバーの追加

クラスタに含むサーバーを指定する必要があります。

▶ サーバーをEssbaseクラスタに追加するには、管理サービス・コンソールから次の操作を行います:

1. エンタープライズ・ビュー、またはカスタム・ビューで、「**Essbaseサーバー**」を選択します。
2. 追加するサーバーごとに、次の操作を行います:
 - a. 右クリックして、「**Essbaseサーバーの追加**」を選択します。
 - b. 「**Essbaseサーバーの追加**」に、Essbaseサーバー名、ユーザー名およびパスワードを入力します。
 - c. 前の手順で入力したパスワードを確認します。
3. エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「**Provider Services**」ノードからプロバイダを選択します。
4. 右クリックして、「作成」、「**Essbaseクラスタの作成**」の順に選択します。
5. 「**Essbaseクラスタの追加**」、「**クラスタ名**」の順に選択し、クラスタの名前(たとえば「東海岸地域の販売」)を入力します。
6. 短い説明(たとえば「東海岸地域の販売データベース」)を入力します。
7. 「**追加**」をクリックし、サーバーをクラスタに追加します。
8. 「**クラスタ・コンポーネント・データベースの選択**」で、Essbaseサーバー、アプリケーション、データベース名を指定して、「**OK**」をクリックします。

Essbaseサーバーおよび関連付けられているアプリケーションおよびデータベース名(たとえばlocalhost .Demo.Basic)が、クラスタ・コンポーネント・リストに表示されます。クラスタ・コンポーネントは、Essbaseサーバー、アプリケーション、データベース名から構成されています。

9. [37ページのステップ 7](#)から [37ページのステップ 8](#)を繰り返して、その他のコンポーネントを追加します。
10. 「**クラスタの追加**」で「**OK**」をクリックします。

新しいクラスタ名が「**Essbaseクラスタ**」の下に表示されます。

アクティブ-アクティブEssbaseクラスタの除去

▶ アクティブ-アクティブEssbaseクラスタを除去するには:

1. 管理サービス・コンソールのエンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「**Provider Services**」ノードからプロバイダを選択します。
2. プロバイダのノードから「**Essbaseクラスタ**」を選択します。
3. 「**Essbaseクラスタ**」で、クラスタを選択します。
4. 右クリックして「**削除**」を選択します。
5. 「**Essbaseクラスタの削除**」で「**はい**」をクリックします。

削除は、Provider Servicesを再起動した時点で有効になります。

アクティブ-アクティブEssbaseクラスタへのコンポーネントの追加

Essbaseクラスタを作成する場合は、関連付けられるEssbaseサービス、アプリケーション、データベースを指定します。

▶ コンポーネントをクラスタに追加するには、管理サービス・コンソールから次の操作を行います:

1. エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「**Provider Services**」ノードからプロバイダを選択します。
2. プロバイダ・ノードで「**Essbaseクラスタ**」ノードを選択します。
3. 「**Essbaseクラスタ**」ノードで、クラスタを選択します。

4. 右クリックして「編集」を選択します。
5. 「Essbaseクラスタ」パネルで「追加」をクリックします。
6. 「クラスタ・コンポーネント・データベースの選択」で、Essbaseサーバー、アプリケーション、データベース名を指定します。
7. 「OK」をクリックします。

データベース・コンポーネントが「Essbaseクラスタ」パネルに表示されます。

8. その他のコンポーネントを追加するには、コンポーネントごとに [38ページのステップ 5](#)から [38ページのステップ 7](#)を繰り返します。
9. 「適用」をクリックします。
10. 「閉じる」をクリックします。

データベース・コンポーネントの除去

- ▶ データベース・コンポーネントをアクティブ・アクティブ・クラスタから除去するには、管理サービス・コンソールから次の操作を行います：
 1. エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
 2. 「プロバイダ」ノードで、「分析クラスタ」ノードを選択します。
 3. 「分析クラスタ」ノードで、クラスタを選択します。
 4. 右クリックして「編集」を選択します。
 5. 除去するデータベース・コンポーネントごとに、「分析クラスタ」パネルでコンポーネントを選択して、「削除」をクリックします。
 6. 「適用」をクリックします。
 7. 「閉じる」をクリックします。

クラスタリングされたデータベース・コンポーネントを使用可能にする

データベース・コンポーネントは、使用不可にした後で再度使用可能にできます。



注:

Provider Servicesの開始時にクラスタ定義に含まれていたコンポーネントは、動的に使用可能/使用不可を切り替えることができ、Provider Servicesを再起動する必要もありません。ただし、クラスタにコンポーネントを追加したり、クラスタを作成した場合は、新しいクラスタ定義を反映させるためにProvider Servicesを再起動する必要があります。新しく追加したコンポーネントは、Provider Servicesを再起動した後で使用可能/使用不可を切り替えることができます。

- ▶ クラスタリングされたデータベース・コンポーネントを使用可能にするには、管理サービス・コンソールから次の操作を行います：
 1. エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「Hyperion Provider Services」ノードからプロバイダを選択します。
 2. 「プロバイダ」ノードで、「分析クラスタ」ノードを選択します。
 3. 「分析クラスタ」ノードで、クラスタを選択します。
 4. 右クリックして「編集」を選択します。
 5. 使用可能にするデータベース・コンポーネントごとに、「分析クラスタ」パネルでコンポーネントを選択して、「使用可能」をクリックします。

データベース・コンポーネントのステータスが「使用可能」に変わります。

6. 「閉じる」をクリックします。



注:

Provider Servicesの開始時にクラスタ定義に含まれていたコンポーネントは、動的に使用可能/使用不可を切り替えることができ、Provider Servicesを再起動する必要もありません。ただし、既存のクラスタにコンポーネントを追加したり、クラスタを作成した場合は、新しいクラスタ定義を反映させるためにProvider Servicesを再起動する必要があります。新しく追加したコンポーネントは、Provider Servicesを再起動するまで使用可能/使用不可を切り替えることができません。

クラスタ・コンポーネントを使用不可にする

クラスタ内の個々のデータベース・コンポーネントを使用不可にできます。たとえば、データベースを更新するために、コンポーネントをオフラインにすることができます。

- ▶ クラスタ内のデータベース・コンポーネントを使用不可にするには、管理サービス・コンソールから次の操作を行います:
1. エンタープライズ・ビューまたはカスタム・ビューで、「**Hyperion Provider Services**」ノードからプロバイダを選択します。
 2. プロバイダ・ノードで「**Essbaseクラスタ**」ノードを選択します。
 3. 「**Essbaseクラスタ**」ノードで、クラスタを選択します。
 4. 右クリックして「**編集**」を選択します。
 5. 使用不可にするコンポーネントごとに、「**Essbaseクラスタ**」パネルでコンポーネントを選択して、「**使用不可**」をクリックします。
 6. 「閉じる」をクリックします。

アクティブ-アクティブEssbaseのクラスタリングの例

わかりやすくするために、この項のすべての例でSmart Viewを使用しています。

Essbaseサービス・クラスタ

Provider Servicesを使用すると、同じデータベースでアプリケーションを実行しているEssbaseサーバーをグループ化して、それらを1つのリソースとして使用できます。



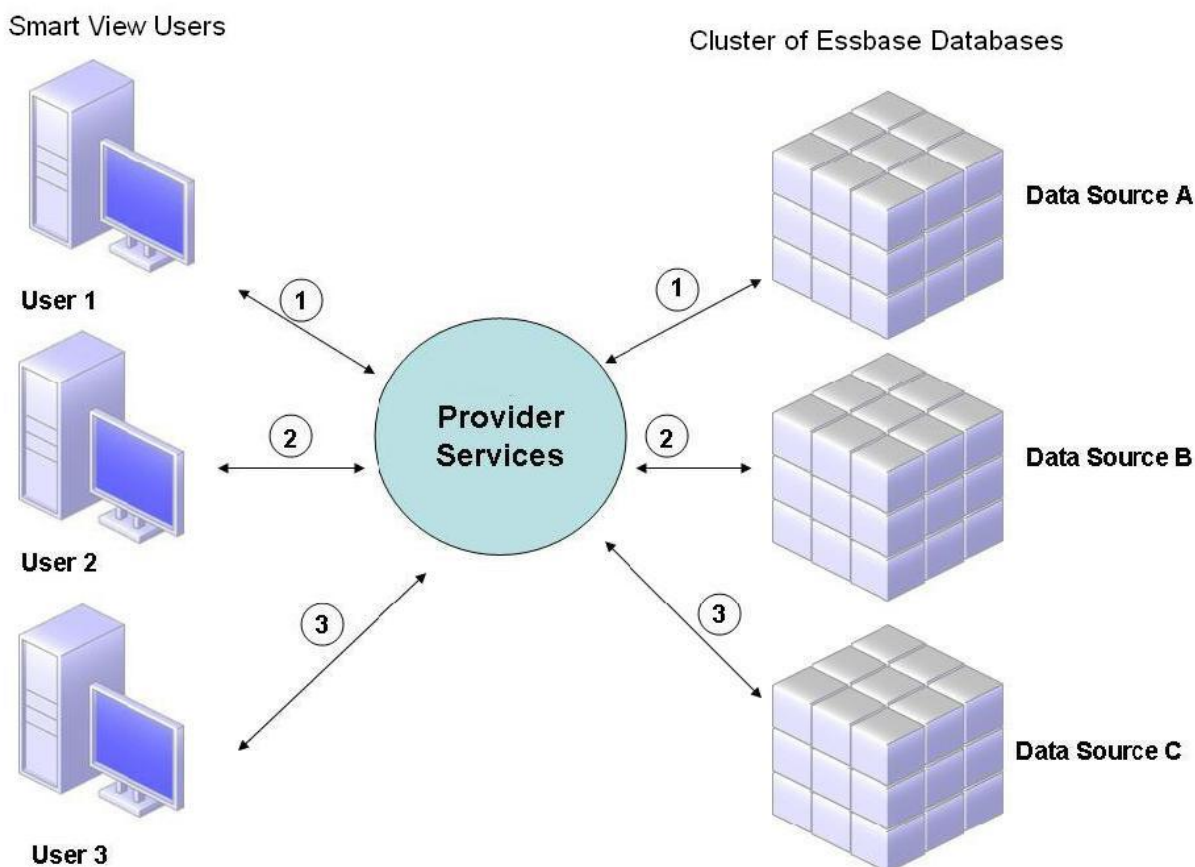
注:

Essbaseサーバーをクラスタに追加または削除する場合は、サーバーを再起動してグループへの変更を反映させます。グループ内のコンポーネントは、サーバーを再起動せずに使用可能/使用不可を切り替えることができます。

Essbaseデータベース・クラスタ

Essbaseデータベースをクラスタリングすると、負荷分散とフェイルオーバーをサポートできるようになります。Provider Servicesは並列クラスタリングを提供します。これは、ユーザーの要求に応答する、一連のアクティブな重複データベースです。ユーザーからは、どのデータベースにアクセスしているかは見えません。ユーザーは単一のデータ・ソースに接続して、そのソースからデータを取得します。Provider Servicesを使用すると、可用性および優先ルールに基づいた、クラスタ内のデータベース間での接続のルーティングが容易になります。

図2 Provider ServicesでのEssbaseデータベースのクラスタリング



40ページの図 2では、Smart ViewのユーザーはProvider Servicesを介してEssbaseに接続します。

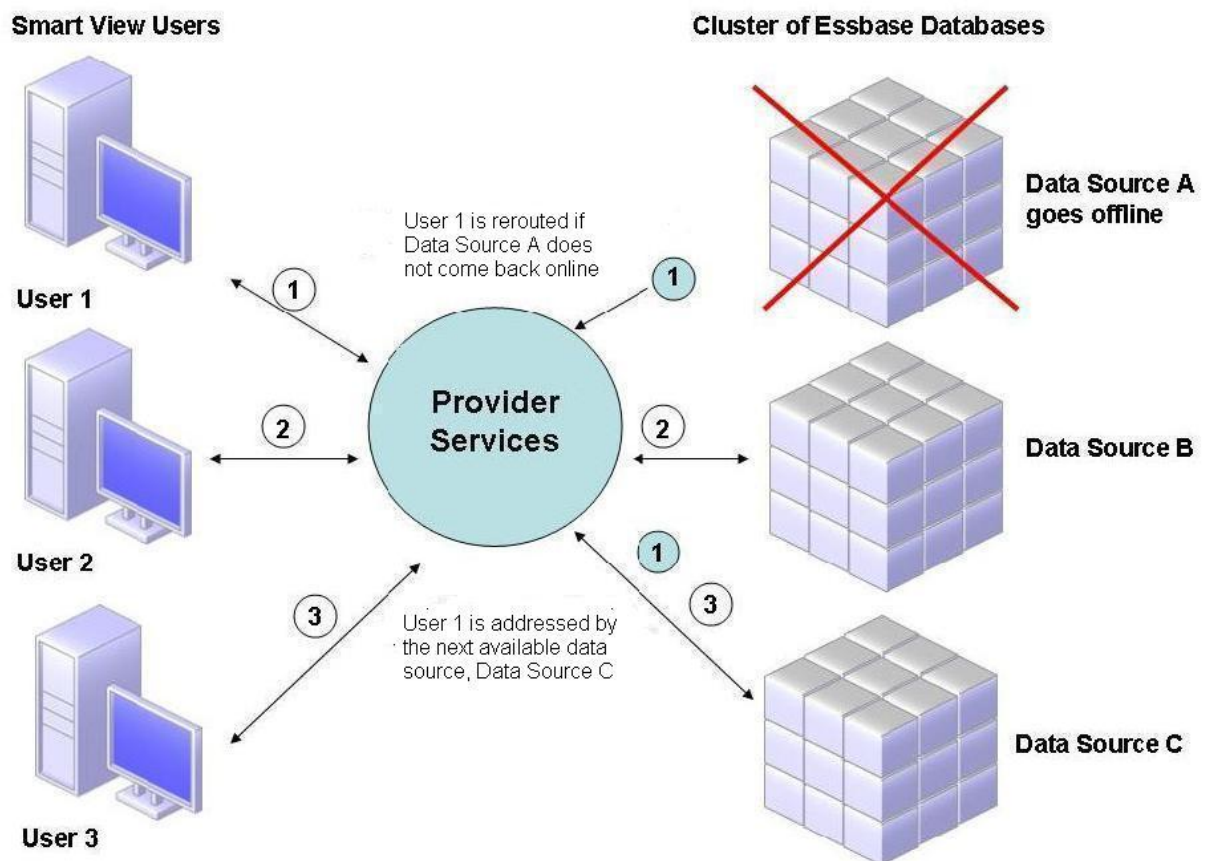
各ユーザー接続は、Essbaseのセッション中にサーバーに割り当てられます。Provider Servicesはセッションレベルでロード・バランシングを行います。たとえば、40ページの図 2では、ユーザー1の接続はデータ・ソースAにマップされます。ユーザー2の接続はデータ・ソースBにマップされます。ユーザー3の接続はデータ・ソースCにマップされます。つまりユーザー1からのすべての要求は、接続中はデータ・ソースAで処理されます。

データ・ソースAで障害が発生した場合:

- ユーザー1はデータ・ソースAでタイムアウトします。
- ユーザー1は次に使用可能なデータ・ソースに再ルーティングされます。この場合は、41ページの図 3のデータ・ソースCです。

41ページの図 3に、データ・ソースAがオフラインになった場合に行われる処理を示します。

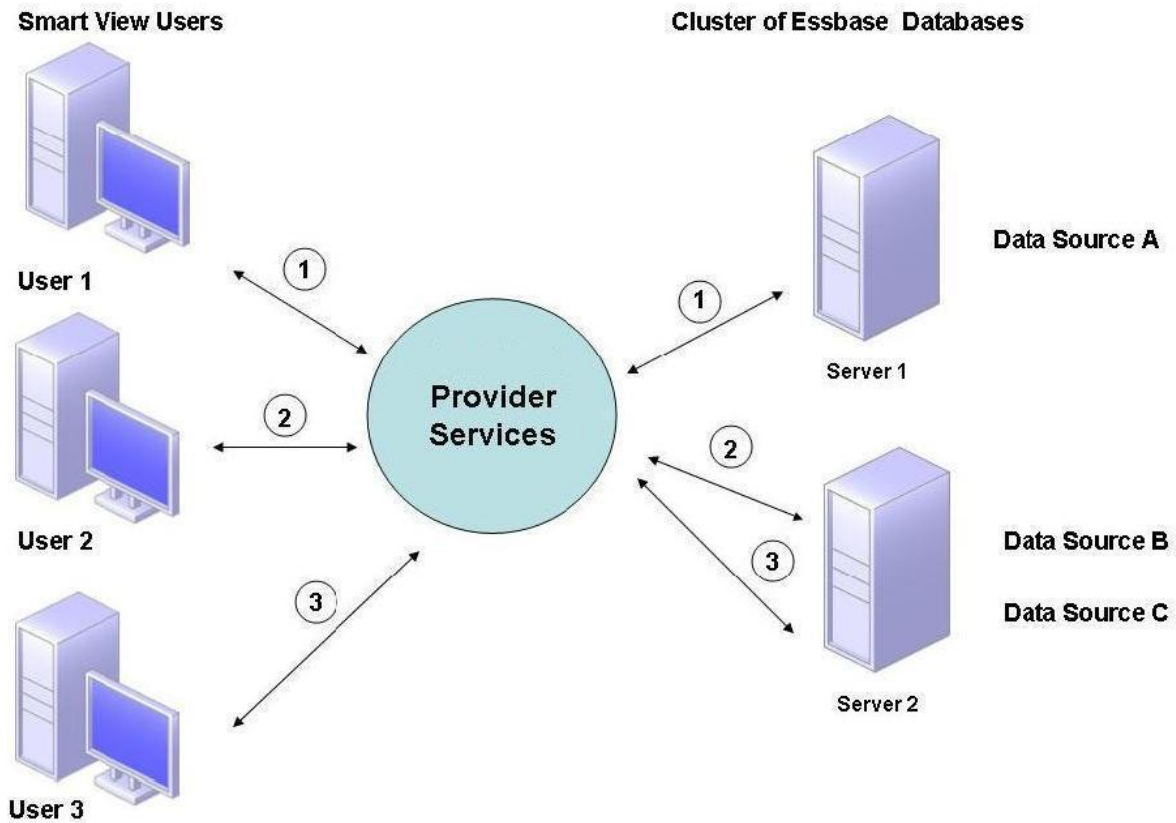
図3 1つのデータ・ソースがオフラインになったデータベース・クラスタ



41ページの図 3では、問合せ1の状態は中間層に保持されて再ルーティングされます。Provider Servicesにも、サーバー間のロード・バランシング機能があります。

42ページの図 4に、単一サーバーにデプロイされたクラスタ・データベースを示します。

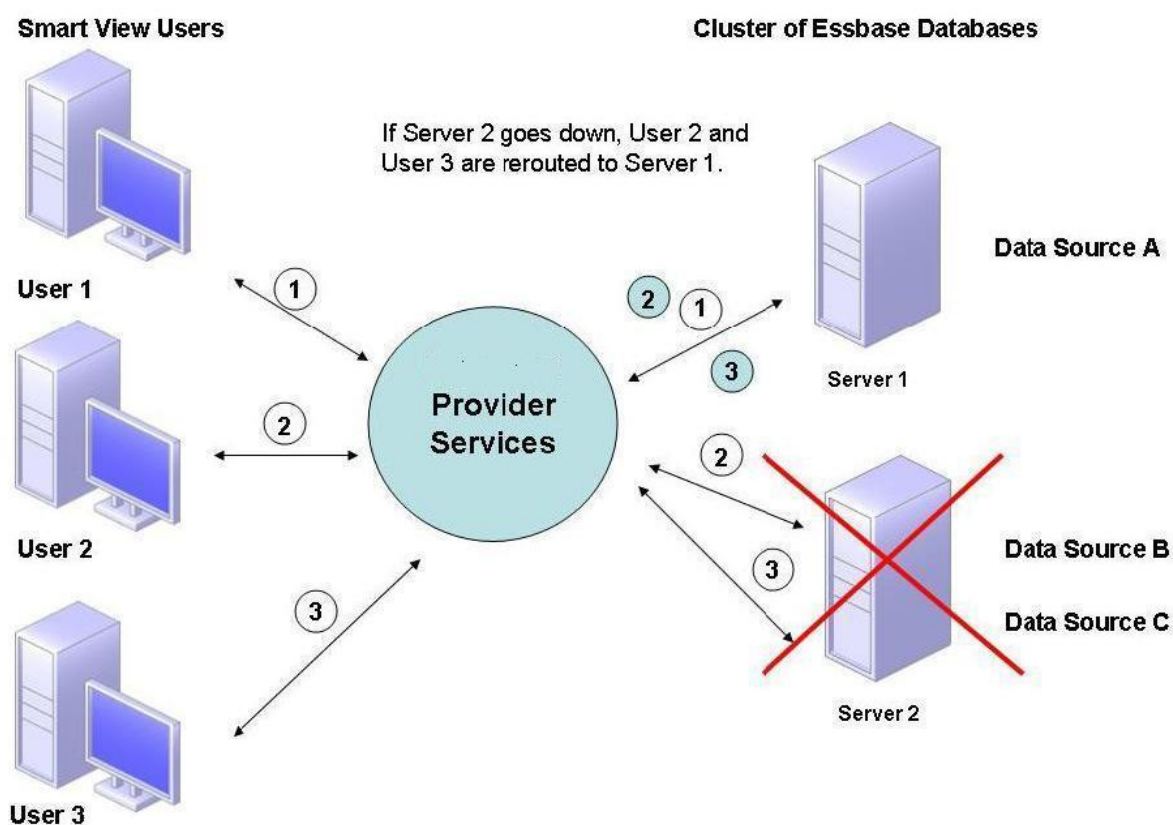
図4 単一サーバー上のEssbaseデータベース・クラスタ



42ページの図 4では、2つのサーバーにEssbaseデータベースがあります。サーバー1には4つのプロセッサがあり、RAMは8GBです。サーバー2には8つのプロセッサがあり、RAMは16GBです。サーバー2のリソースのほうが多いため、サーバー2にデータ・ソースBとCが置かれます。このため、サーバー2は両方の接続を処理できます。

フェイルオーバーのサポートも、単一サーバー上のデータベース・クラスタに適用されます。43ページの図 5で、サーバー2がオフラインになります。ユーザー2とユーザー3は、次に使用可能なサーバーであるサーバー1に再ルーティングされます。

図5 単一サーバー上のデータベース・クラスタのフェイルオーバー



Essbaseを垂直方向にスケール

Essbaseサーバーの追加インスタンスの構成と開始

Essbaseサーバーを一度インストールしてから複数の追加Essbaseインスタンスを構成できます。通常どおりにEPM Systemコンフィグレータを使用して最初のEssbaseインスタンスを構成します。以降のEssbaseインスタンスは、構成中に新しいEPM Oracleインスタンスを指定します。

▶ 同じマシンでEssbaseサーバーの追加インスタンスを構成するには:

1. Essbaseサーバーの最初のインスタンスを構成した後、同じマシンでEPM Systemコンフィグレータを起動します。
2. 新規または既存のEPM Oracleインスタンスの構成ページで、Essbaseサーバーの追加インスタンスのEPM Oracleインスタンスの場所を指定します。

以降のインスタンスのデフォルトの場所はMIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystemNです。ここでNはEPM Oracleインスタンスの数です。

3. 「Essbaseサーバー構成」ページで次の情報を指定します:

- 一意のポート範囲。あるEssbaseサーバー・インスタンスで使用されるポート範囲は、別の製品によって使用されるポート範囲とは重複できません。

Essbaseサーバーの追加インスタンスに対するポート番号は、このインストール用の`essbase.cfg`ファイルに保管されます。

- ARBORPATH: このEssbaseインスタンスが別のインスタンスを含むクラスタ内にある場合、このEssbaseインスタンスは最初のEssbaseインスタンスと同じアプリケーションの場所を保持する必要があります。このEssbaseインスタンスが別のEssbaseインスタンスを含むクラスタ内にない場合、ARBORPATHが異なる可能性があります。

4. EPM Systemコンフィグレータを使用して構成を完了します。

Essbaseサーバーの各インスタンスには独自のOPMNおよび起動スクリプトがあります。Essbaseサーバーの追加インスタンスを開始するには、`EssbaseInstanceLocation/bin`にあるこのEssbaseインスタンス用の`startEssbase.bat | .sh`スクリプトを使用してください。

各Essbaseインスタンスには、`EssbaseInstanceLocation/diagnostics/logs/essbase`に独自のログ・ファイルがあります。

Essbaseの複数インスタンスのポートの変更

1つのマシンで複数のEssbaseサーバーのインスタンスを構成した場合、Essbaseインスタンスごとに独自のOPMN、独自の開始スクリプトおよび独自のログ・ファイルがあります。Essbaseポートの変更が必要な場合は、Essbaseインスタンスごとに`opmn.xml`のコピーを更新し、各OPMNが独自の通信ポートを持つようにする必要があります。

▶ Essbaseの追加インスタンスのOPMNを変更するには:

1. テキスト・エディタで`EPM_ORACLE_INSTANCE/config/OPMN/opmn/opmn.xml`を開きます。
2. ファイルの`<notification-server interface>`セクションで、OPMNのこのインスタンスの2つのポート値(`port local="portNumber`および`remote="portNumber"`)を更新し、OPMNの他のインスタンスと競合しないようにしてから、ファイルを保存します。例:

```
<notification-server interface="any">
  <ipaddr remote="
    hostname
  " />
  <port local="
    portNumber
    " remote="
    portNumber
    " />
  <ssl enabled="false" wallet-file="\Oracle\Middleware\user_projects
\epmsystem1\config\OPMN\opmn\wallet"/>
</notification-server>
```

3. `opmn.xml`のインスタンスごとにこの手順を実行します。

Essbaseクラスタへの接続

Essbaseクライアントとサーバーは、次のフォーマットのURLからEssbaseクラスタに接続できます:

http(s)://host:port/aps/Essbase?ClusterName=clusterName。

また、クラスタ名のみを使用してもEssbaseクラスタに接続できますが、構成ファイルを変更してURLのクラスタ名を解決するProvider Servicesサーバーを指定することにより、まずこれを有効にする必要があります。Provider Servicesサーバーは、次の構成ファイルで指定します:

- サーバー間の通信の場合 – `essbase.cfg`

次のフォーマットを使用します:

```
ApsResolver http(s)://host:port/aps
```

サーバー名の上にセミコロン(;)を使用すると、`essbase.cfg`で複数のProvider Servicesサーバーを指定できます。

- クライアントとサーバー間の通信の場合 – `essbase.properties`

次のフォーマットを使用します:

```
ApsResolver=http(s)://host:port/aps
```

これらのファイルを更新した後、Essbaseを再起動します。

Oracle Hyperion Financial ReportingまたはOracle Hyperion Web Analysisを使用してProvider Servicesアクティブ-アクティブEssbaseクラスタに接続するには、Financial ReportingまたはWeb Analysisを3層モード用に構成する必要があります。

Financial Reportingを3層モード用に構成するには:

1. `MIDDLEWARE_HOME/EPMSysstem11R1/products/financialreporting/bin/FRConfig.cmd`を起動します。
2. 「**MBean**」タブを選択して、**com.hyperion/Financial Reporting/Attributes/EssbaseJAPIServer**を参照します。
3. **EssbaseJAPIServer**がProvider Servicesサーバーとして設定されていることを確認します。
4. 「属性値」の「値」ボックスの「サーバー名」としてProvider Servicesクラスタ名を入力して、「リフレッシュ」をクリックします。
5. Financial Reportingを終了して再起動します。

Web Analysisを3層モード用に構成するには:

1. EPM Workspaceにadminユーザーとしてログオンします。
2. 「ナビゲート」、「管理」、**Reporting and Analysis**、「**Webアプリケーション**」の順に選択します。
3. 「**Web Analysis Webアプリケーション**」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
4. 「**Essbaseの構成**」タブで、次のプロパティを設定して「OK」をクリックします:
 - `ESEEmbeddedMode=false` (デフォルト設定はtrueです。)
 - `EEServerName=Provider Services server name` (デフォルト設定はlocalhostです。)
 - 「OK」をクリックします。
5. Web Analysisサーバーを再起動して、変更を有効にします。

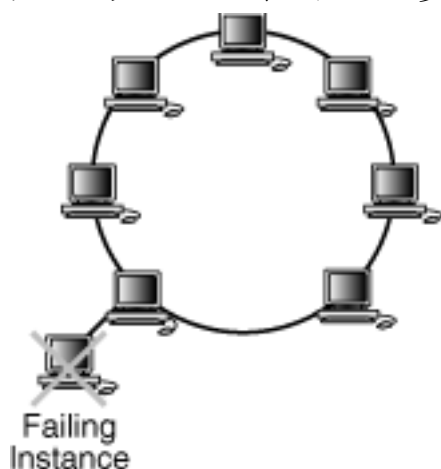
OPMNによるEssbaseサーバーのサービス・フェイルオーバー

この項では、OPMNによるサービスのフェイルオーバーの概要を説明し、フェイルオーバー用にEssbaseを構成するために必須となるopmn.xmlファイル内の要素および属性を示します。このファイルには、その他にも多くの要素と属性があります。『Oracle Process Manager and Notification Server管理者ガイド』を参照してください。

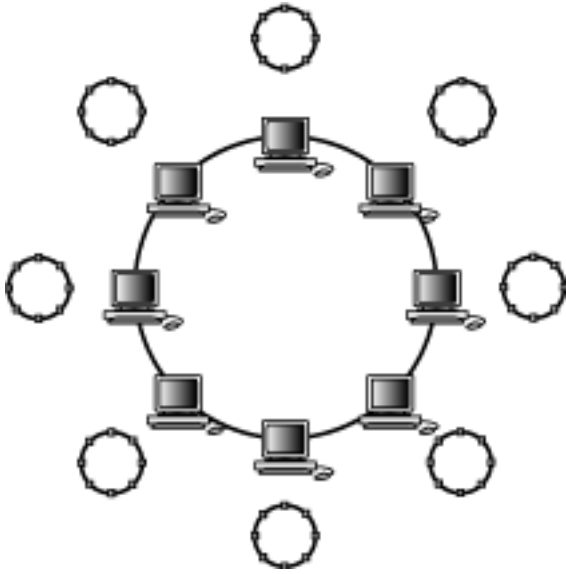
サービス・フェイルオーバー

サービス・フェイルオーバーは、処理サーバーでサービスが中断されたときにEssbaseクラスタ内のどこかで実行する必要がある重要なプロセスを指定するメカニズムです。これにより、どのプロセスを優先的に実行し続ける必要があるかを選択できます。任意のprocess-typeのopmn.xmlファイル要素をサービス・フェイルオーバーとして構成しておくと、OPMNを起動することにより、サービスとして構成された数のプロセスをクラスタ内のどこかにあるEssbaseインスタンスで確実に実行できます。サービス・フェイルオーバーにどのEssbaseインスタンスが参加するかは、インスタンス単位で構成できます。使用可能なEssbaseインスタンスで優先的に実行するプロセスの選択は、Essbaseインスタンスごとに構成できます。サービス・フェイルオーバーとして構成するprocess-typeごとに定義できるprocess-setは1つのみです。サービス・フェイルオーバー・インスタンスごとに実行されるプロセスは1つのみです。

次のダイアグラムでは、サービス・フェイルオーバー・プロセスが起動しているクラスタでは、すべてのEssbaseインスタンスがサービス・フェイルオーバーに参加するよう構成されています。



次のダイアグラムに示すように、メンテナンス、無停電装置なしでの停電またはネットワーク障害などが原因で、サービス・フェイルオーバー・プロセスが実行されているEssbaseインスタンスが停止すると、プロセスを実行するために、サービス・フェイルオーバーに参加している別のEssbaseインスタンスが選択されます。ダイアグラムに示すEssbaseインスタンスはすべてサービス・フェイルオーバーに参加しています。



opmn.xmlの共通構成

サブトピック

- `<port>`
- `<topology>`
- `<nodes>`
- `service-failover="num"`
- `service-weight="value"`
- `restart-on-death`
- `start/stop/restart timeout`

この項では、フェイルオーバー用にEssbaseを構成するために必要なopmn.xmlファイル内の要素および属性について説明します。opmn.xmlファイルでは、すべての要素は<ias_component>構成要素内にあります。(このエントリはシステム・コンポーネントを表します。)

<port>

親: notification-server

属性: local, remote, request

port要素には、ONSリスナー・スレッドのホストおよびポート・バインディングに関する構成情報が含まれます。

例:

```
<ias-component id="<Essbase-Cluster-Name>">
  <process-type id="EssbaseAgent" module-id="ESS" service-failover="1"
service-weight="101">
    <environment>
      ...
    </environment>
```

```
<port id="essbase-port-range" range="32768-33768"/>
</process-type>
</ias-component>
```

<topology>

親: notification-server

属性: none

topology要素には、クラスタ内のONSTポロジに関する構成情報が含まれます。

例:

```
<topology>
  <nodes list="adc2170731:6712,dadvmn0429:6712"/>
</topology>
```

<nodes>

親: topology

属性: list

nodes要素は、ローカルOPMNサーバーと同じクラスタ内のOPMNサーバーに固有のアドレスのリストを示します。ローカルのOPMNサーバーはリストに含まれています。複数のnodes要素を構成できます。

例:

```
<topology>
  <nodes list="adc2170731:6712,dadvmn0429:6712"/>
</topology>
```

service-failover="num"

有効な値: 0より大きい整数値

process-typeは、service-failoverとして構成できます(numがゼロでない場合)。これは、実行中のクラスタ内のどこかにnum個存在するプロセスを表します。このプロセスの実行は制限されており、1つのサービス・インスタンスで実行されるこのタイプのプロセスは1つのみです。このため、クラスタ内の特定のservice-failoverに対するプロセスの最大数は、クラスタ内の参加サービス・インスタンスの数を超えることはできません。クラスタ内でこのservice-failoverに参加するサービス・インスタンスの数よりnumの値の方が大きく、service-failoverがアクティブである(起動済である)場合、クラスタ全体の合計プロセス数がnumになるまで、クラスタに追加された各参加インスタンスによりそのservice-failoverプロセスが自動的に起動されます。

service-failoverプロセスは、サービスに参加する任意のインスタンス上で実行できます。これは、すべてのインスタンスが同じias-component id、process-type idおよびprocess-set idを使用してサービスを構成する必要があることを意味します。サービス自体を対象とする場合、要求にはias-componentとprocess-typeの両方を指定する必要があります(process-setを含めることもできます)。

service-failover process-typeに指定できるのは、1つのprocess-setのみです。1つのフェイルオーバーサービスのプロセス数が常に1つとなるため、このprocess-setにnumprocs、minprocsまたはmaxprocsを指定することはできません。

service-failoverは、(管理対象プロセスのように) 1つの依存関係として指定することも、複数の依存関係として指定することもできます。1つの依存関係として指定した場合、クラスタ内のどこかでこのタイプのプロセスの1つがアクティブになると同時に、service-failoverの依存関係チェックはnumの構成値とは関係なくtrueとして評価されます。

例:

```
<ias-component id="<Essbase-Cluster-Name>">
  <process-type id="EssbaseAgent" module-id="ESS" service-failover="1"
service-weight="101">
    <environment>
      <variable id="EPM_ORACLE_HOME" value="<Oracle Home-Location>">
    </environment>
    ...
  </process-type>
</ias-component>
```

service-weight="value"

デフォルト: 100

有効な値: 0より大きい整数値

service-failoverプロセスを実際に実行するサービス・インスタンスは、構成されている(またはデフォルトの) service-weight値に基づいて選択されます。この加重が大きいサービス・インスタンスの方が、加重が小さいサービス・インスタンスより優先して選択されます。サービスに対する一連のサービス・インスタンスの加重が同じである場合は、構成されている数のサービス・インスタンスがセットから選択され、プロセスが実行されます。

service-weight属性を指定できるのは、service-failover属性がゼロ以外の値に設定されている場合のみです。

例:

```
<ias-component id="<Essbase-Cluster-Name>">
  <process-type id="EssbaseAgent" module-id="ESS" service-failover="1"
service-weight="101">
    <environment>
      <variable id="EPM_ORACLE_HOME" value="<Oracle Home-Location>">
    </environment>
    ...
  </process-type>
</ias-component>
```

restart-on-death

親: <process-set>

有効な値: trueまたはfalse

管理対象プロセスが予期せずに終了した場合、つまり、要求によって停止したわけではない場合、このプロセスはOPMNによって自動的に再起動されません。

例:

```
<ias-component id="<Essbase-Cluster-Name>">
  <process-type id="EssbaseAgent" module-id="ESS" service-failover="1"
service-weight="101">
  <environment>
  ...
  </environment>
  <process-set id="AGENT" restart-on-death="true">
  <module-data>
  <category id="start-parameters">
  <data id="start-executable" value="$ESSBASEEXE"/>
  <data id="agent-port" value="1423"/>
  <data id="start-args" value="-b"/>
  </category>
  ...
  </module-data>
  </process-type>
</ias-component>
```

start/stop/restart timeout

親: <process-set>

有効な値: 0より大きく3600より小さい整数

アクションごとにタイムアウト値を構成できます。

例:

```
<ias-component id="<Essbase-Cluster-Name>">
  <process-type id="EssbaseAgent" module-id="ESS" service-failover="1"
service-weight="101">
  <environment>
  ...
  </environment>
  <start timeout="600" retry="2" />
  <stop timeout="600"/>
  <restart timeout="600" retry="2" />
  </process-type>
</ias-component>
```

SOAクラスタと連携するためのFinancial Close Managementの構成

サブトピック

- [仮定と前提条件](#)
- [ロード・バランサの設定](#)
- [Financial Close Managementの構成](#)
- [SOA高可用性のためのFinancial Close Management設定の検証](#)

Oracle SOA SuiteおよびFinancial Close Managementをインストールして構成してあり、SOAクラスタを構成してある場合、SOAクラスタと連携するようにFinancial Close Managementを構成する必要があります。SOAクラスタの構成の詳細は、*Oracle® Fusion Middleware高可用性ガイド*のOracle Fusion Middleware SOA Suiteの高可用性の構成に関する項を参照してください。

仮定と前提条件

- Oracle SOA SuiteとFinancial Close Managementは、『*Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』の記述どおりにインストールおよび構成されています。
- Oracle SOA Suiteは高可用性のために構成されます。
- EPM Systemインストーラを使用してインストールされたOracle HTTP Serverを使用しており、このWebサーバーはEPM SystemおよびOracle SOA Suiteの両方に使用されます。

ロード・バランサの設定

SOAクラスタと連携するようにFinancial Close Managementを構成するには、EPM SystemインストーラでインストールされたOracle HTTP Serverを使用してSOAクラスタのロード・バランシングを有効にします。

➤ SOAクラスタのロード・バランシングを有効にするには:

1. テキスト・エディタでEPM_ORACLE_INSTANCE\httpConfig\ohs\config\OHS\ohs_component/mod_wl_ohs.confを開き、次のエントリを追加します:

```
# The admin URLs should only be accessible via the admin virtual host
<Location /console>
  SetHandler weblogic-handler
  WebLogicHost <ADMIN Server Virtual DNS name >
  WebLogicPort 7001
</Location>
```

```
<Location /consolehelp>
  SetHandler weblogic-handler
  WebLogicHost <ADMIN Server Virtual DNS name >
  WeblogicPort 7001
</Location>
```

```
        <Location /em>
        SetHandler weblogic-handler
        WebLogicHost <ADMIN Server Virtual DNS name >
        WebLogicPort 7001
</Location>
```

```
        # Virtual host entry for external https URL configured at the Load
Balancer
# WSM-PM
<Location /wsm-pm>
    SetHandler weblogic-handler
    WebLogicCluster <SOASERVER1>:<WSM_PORT>,<SOASERVER2>:<WSM_PORT>
#
#                               WLProxySSL ON
#                               WLProxySSLPassThrough ON
</Location>
```

```
        <Location /soa-infra>
        SetHandler weblogic-handler
        WebLogicCluster <SOASERVER1>:<SOA_PORT>,<SOASERVER2>:<SOA_PORT>
#
#                               WLProxySSL ON
#                               WLProxySSLPassThrough ON
</Location>
```

2. Oracle HTTP Serverを再起動します。

Financial Close Managementの構成

ロード・バランサの設定後、EPM Systemコンフィグレータを再度実行してSOAクラスタの構成を終了します。

- ▶ SOAクラスタとのFinancial Close Management構成を完了するには:
 1. EPM Systemコンフィグレータを起動して、「タスクの選択」パネルで「すべて選択解除」を選択し、**Hyperion Foundation**を拡張してから、「Webアプリケーションの論理アドレスの構成」を選択します。
 2. 「Java Webアプリケーションの論理アドレスの更新」で、SOAおよびEPM Systemに面しているWebサーバーを指定します。
 3. 構成を終了し、要約パネルで「タスク・パネル」をクリックします。
 4. 「タスクの選択」パネルで、「SOAにデプロイ」を選択します。
 5. デプロイメント・プロセスが完了すると、「要約」画面が表示されます。すべてのタスクが正常に完了したことを確認し、「終了」をクリックします。

SOA高可用性のためのFinancial Close Management設定の検証

- ▶ 高可用性の設定を検証するには、ブラウザで次のURLを開きます:

http://<Admin Virtual Host name>:<OHS_PORT>/console

http://<Admin Server Virtual Host name>:<OHS_PORT>/em

http://<SOA Server1 Virtual Host name>:<OHS_PORT>/wsm-pm/validator

http://<SOA Server2 Virtual Host name>:<OHS_PORT>/wms-pm/validator

http://<SOA Server1 Virtual Host name>:<OHS_PORT>/soa-infra

http://<SOA Server2 Virtual Host name>:<OHS_PORT>/soa-infra

3

EPM System製品のOracle Web Services Managerの構成

この項の内容:

Oracle Web Services Managerの構成	55
サービス・リクエストに対するOracle Web Services Policy Managerの有効化	56
メッセージ保護のキースタアの設定	57
OID、MSAD、SunOneへのWebLogicドメインの構成	58
Financial Close Managementの構成オプション	59
FDMEET構成オプション	61
FDMEETとPeopleSoftの使用	65

Financial Close Management、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management、FDMEET、Financial Management、Provider ServicesまたはData Relationship ManagementとともにOracle Web Services Managerを使用する場合、次の手順を順番に実行します:

- Oracle Web Services Manager (OWSM)を構成します。

この手順は、Financial Close Managementには必要ありません。構成中に実行されます。Financial Close Managementを以前に構成している場合、これらの手順は既に自動的に実行済みであるため、この項をスキップできます。

- メッセージ保護のキースタアを設定します。
- サービス・リクエストに対してOracle Web Services Policy Managerを設定します。

Oracle SOA Suiteの構成中およびEPM Systemコンフィグレータでの構成中に、この手順がFinancial Close Managementに対して自動的に実行されます。

- WebLogicドメイン、Financial Close ManagementにはSOAサーバーを構成して、Oracle Internet Directory、Microsoft Active Directory(MSAD)またはSunOneに接続します。

これらの手順を実行した後、管理対象サーバーを再起動します。

Oracle Web Services Managerの構成

Oracle Web Services ManagerはEPM Workspaceとともに自動的にインストールされますが、構成はされません。

Webサービスを使用するには、事前にOWSMを構成する必要があります。この手順を実行する前に、リポジトリ作成ユーティリティをインストール済であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management

Systemインストールおよび構成ガイド』のリポジトリ作成ユーティリティhを使用したインフラストラクチャ・スキーマの作成に関する項を参照してください。



注:

この手順は、Financial Close Managementには必要ありません。構成中に実行されません。Financial Close Managementを以前に構成している場合、これらの手順は既に自動的に実行済みであるため、この項をスキップできます。

▶ OWSMを構成するには:

1. WebLogic Administration Servicesマシンで、「すべてのプログラム」、「Oracle WebLogic」、「WebLogic Server 11gR1」、「ツール」、「構成ウィザード」の順に選択します。
2. 「ようこそ」ページで、「既存のWebLogicドメインの拡張」を選択して、既存のEPMドメインに新規のコンポーネントを追加し、構成設定を変更します。
3. 「次」をクリックします。
4. 「WebLogicドメイン・ディレクトリの選択」ページで、「user_projects」、「domains」、「EPMSystem」の順に選択し、「次へ」をクリックします。

EPM System製品の構成時に異なるドメイン名を指定した場合、そのドメインを選択します。

5. 「拡張ソースの選択」ページで「以下の追加製品をサポートするために、自動的にドメインを拡張する:」、Oracle WSM Policy Managerの順に選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「JDBCデータ・ソースの構成」ページで、RCUの構成時に入力したパスワードを指定し、必要に応じてJDBCデータ・ソースの詳細を変更して、「次へ」をクリックします。
7. 「データ・ソースのテスト」ページから、テストするデータ・ソースを選択し、「接続のテスト」をクリックします。

正常に接続されると、「ステータス」の下にチェック・マークが表示されます。正常に接続されていない場合は、戻ってJDBCデータ・ソースの詳細を修正してから、テストを再実行します。

8. 「次」をクリックします。
9. 「JDBCコンポーネント・スキーマの構成」ページから、OWSM _mdsスキーマの詳細を入力し、「次へ」をクリックします。
10. 「JDBCコンポーネント・スキーマのテスト」ページで、テストするコンポーネント・スキーマを選択し、「接続のテスト」をクリックします。

正常に接続されると、「ステータス」の下にチェック・マークが表示されます。正常に接続されていない場合は、戻ってJDBCデータ・ソースの詳細を修正してから、テストを再実行します。

11. 残りのページで「次」をクリックします。
12. サーバー・マシンを再起動し、すべてのEPM Systemサービスを停止してWebLogic管理サーバー・コンソールを起動します。

サービス・リクエストに対するOracle Web Services Policy Managerの有効化

この手順は、Financial Close Managementには必要ありません。構成中に実行されます。

▶ サービス・リクエストに対してOracle Web Services Policy Managerを設定するには:

1. WebLogic管理者の資格証明を使用して、WebLogic管理コンソール([http:// WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console](http://WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console))にログインします。
2. 「サーバー」、「FoundationServices0」、「デプロイメント」、「wsm-pm」、「制御」の順に移動します。
3. 「起動と停止」で「wsm-pm」を選択し、「起動 - すべてのリクエストを処理」を選択して「はい」を選択します。

メッセージ保護のキーストアの設定

▶ メッセージ保護のキーストアを設定するには:

1. まず、keytoolコマンドを使用してキーストアを作成します。

EPM SystemドメインをホストするWebLogic管理サーバーが稼働しているサーバーの/Oracle/Middleware/user_projects/\$DOMAIN_HOME/config/fmwconfigに移動し、次のコマンドを実行します:

```
keytool -genkeypair -keyalg RSA -alias  
aliasName  
-keypass  
password  
-keystore  
keystoreName  
.jks -storepass  
password  
-validity 3600
```



注:

keytoolコマンドが認識されない場合、Path環境変数にJDKが含まれていない可能性があります。次のコマンドを使用して、JDKをPath変数に追加します: `set PATH=%PATH%;C:\Oracle\Middleware\JDK160_35\bin\;. ;`。

Oracle Fusion Middleware for Web Services セキュリティおよび管理者ガイド 11g リリース 1 (11.1.1) のメッセージ保護のためのキーストアの設定に関する項の中のJavaキーストアの作成および使用方法を参照してください。(http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/web.1111/b32511/setup_config.htm#BABJHIBI)

2. 次に、Webサービスのメッセージ保護を設定します:
 - a. WebLogic管理者資格証明を使用して、Enterprise Managerにログインします(<http://WebLogicAdminServerHost:7001/em>)。
 - b. 「WebLogicドメイン」を展開して、**EPMSystem**(またはEPM Systemデプロイメントに使用するドメイン名)を選択します。
 - c. **EPMSystem**を右クリックして、「セキュリティ」を選択し、「セキュリティ・プロバイダ構成」を選択します。
 - d. 「キーストア」セクションにスクロールし、セクションを展開して、「構成」をクリックします。
 - e. 「キーストア・パス」で、./EPMKeystore.jksなどの作成したキーストアのパスおよび名前を入力します。
 - f. キーストアの作成時に使用したキーストア・パスワードを入力して確認します。
 - g. キーストアの作成時に使用した別名およびパスワードを使用して、「署名鍵」および「暗号化鍵」の別名およびパスワードを入力します。パスワードを確認して、「OK」をクリックします。署名および暗号化鍵用の別名およびパスワードは、キーの保管および取得に使用される文字列の別名およびパスワードを定義します。
3. 変更を有効にするため、Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlをログアウトして再起動し、EPM System管理対象サーバーを再起動します。

『Oracle(R) Fusion Middleware Webサービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド 11g リリース1 (11.1.1)』のhttp://docs.oracle.com/cd/E17904_01/web.1111/b32511/setup_config.htm#BABHIBHAを参照してください。

OID、MSAD、SunOneへのWebLogicドメインの構成

この手順は、OID、MSAD、SunOneなどの外部プロバイダと通信する目的で、WebLogicドメインまたはFinancial Close Managementの場合はSOAサーバーを構成するために必要です。この外部プロバイダと連携するようShared Servicesを構成する必要もあります。使用するプロバイダに該当する項を参照してください。



注:

Financial Close Managementでは、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリはサポートされません。Profitability and Cost Management、Oracle Hyperion Provider Services、FDMEEおよびFinancial ManagementのWebサービス機能は、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリで動作しません。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

▶ OID、MSADまたはSunOneをSOAサーバーに接続するには:

1. WebLogic管理コンソールにまだログインしていない場合は、ログインします。
2. 左側の「セキュリティ・レルム」を選択し、「**myrealm**」を選択して「プロバイダ」タブを選択します。
3. 「追加」をクリックして次の詳細を入力し、「OK」をクリックします。

OIDの場合:

- 名前 — **OID**
- タイプ — **OracleIntenetDirectoryAuthenticator**

MSADの場合:

- 名前 — **MSAD**
- タイプ — **ActiveDirectoryAuthenticator**

SunOneの場合:

- 名前 - **SunOne**

サーバーの再起動を促すメッセージは無視して問題ありません。この手順の最後に再起動します。

4. 先ほど追加したプロバイダをクリックします。「プロバイダ固有」タブを選択して、プロバイダの次の詳細を入力し、「OK」をクリックします。
 - ホスト
 - ポート
 - プリンシパル
 - 資格証明
 - ユーザー・ベースDB

- グループ・ベースDB
- 名前指定によるユーザー・フィルタ(MSADのみ)
- ユーザー名属性(MSADのみ)

残りはデフォルト値のままかまいません。

5. 「OID」、「MSAD」または「SunOne」を選択し、「制御フラグ」に「SUFFICIENT」を選択します。
6. WebLogic Serverを再起動します。

Financial Close Managementの構成オプション

サブトピック

- [OAMのFinancial Close Managementの構成](#)
- [電子メール通知の言語の指定](#)
- [JMSイベント・モニタリングの構成](#)

OAMのFinancial Close Managementの構成

- ▶ シングル・サインオンにMicrosoft SQL ServerまたはOracle DatabaseとOAMを使用している場合は、次の手順を実行します:
1. WebLogic管理者の資格証明を使用して、WebLogic管理コンソール(http:// WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console)にログインします。
 2. 「ドメイン構造」ポートレットで、「セキュリティ・レルム」をクリックします。
 3. 使用可能なレルムから、「デフォルト・レルム」ステータスが「True」のレルム名をクリックします。



ヒント:

チェック・ボックスではなく、レルム名をクリックします。

4. 「プロバイダ」タブを選択し、構成されているすべての認証/アサーション・プロバイダを表示します。
5. 「認証プロバイダ」で、「新規」をクリックします。
6. サポートされている認証/アサーション・プロバイダのリストから「OAMIdentityAsserter」を選択します。「新しい認証プロバイダの作成」パネルでOAMIdentityAsserterなどのプロバイダの名前を指定し、「OK」をクリックします。

これで、構成されているプロバイダのリストにOAMIdentityAsserterが表示されます。

7. プロバイダを次の順序で並べ替えます:
 - MSAD、OIDまたはSunOne (使用しているプロバイダによって異なる)
 - OAM IdentityAsserter
 - デフォルトの認証者
 - デフォルトのIdentityAsserter

電子メール通知の言語の指定

SOAサーバーで指定されたデフォルト言語とは異なる言語で電子メール通知を受信するには、アイデンティティ・ストアでユーザーの言語プリファレンスを指定します。

たとえば、LDAPベースのアイデンティティ・ストアの場合:

1. アイデンティティ・ストアに接続します。
2. ユーザー・エントリに移動します。
3. preferredLanguage属性を追加または設定します。

JMSイベント・モニタリングの構成

Financial Close Managementを使用して、外部アプリケーションのJMSベース・イベントをモニターできます。Financial Close ManagementのJMSイベント・モニタリングは、Oracle JMSアダプタと呼ばれるJava Connection Architecture (JCA)ベース・アダプタを使用します。このアダプタは、Oracleベースのメッセージ・キューイング・プロバイダおよびTIBCO JMSやIBM WebSphere MQSeriesなどのサードパーティのキューイング・プロバイダをサポートします。Oracle JMSアダプタおよび構成の詳細は、http://fmwdocs.us.oracle.com/doclibs/fmw/E10285_01/integration.1111/e10231/toc.htmから取得できるFusion Middlewareドキュメントに示されています。

▶ JMSアダプタを構成するには:

1. すべての管理対象サーバーを停止します。
2. コマンド・プロンプトから、MIDDLEWARE_HOME/wlserver_10.3/server/binに移動し、setWLSEnv.cmd|.shを実行します。
3. 次のコマンドを実行します:

Windowsの場合:

```
java weblogic.WLST %  
EPM_ORACLE_HOME  
%/products/FinancialClose/wlscripts/FCM_JMSConfig_WLS_Script.py
```

Linuxの場合:

```
java weblogic.WLST $  
EPM_ORACLE_HOME  
/products/FinancialClose/wlscripts/FCM_JMSConfig_WLS_Script.py
```

4. プロンプトが表示されたら、次の詳細を指定します:

表3

プロパティ	値
キュー名	<QUEUE_NAME>
キューJNDI名	<QUEUE_JNDI_NAME>
接続ファクトリ名	<CONNECTION_FACTORY_NAME>
接続ファクトリJNDI名	<CONNECTON_FACTORY_JNDI_NAME>

5. JMSアダプタの構成後、WebLogicのエントリを確認します:
 - a. WebLogicコンソールにログオンします。

- b. 「サービス」、「メッセージング」、「モジュール」の順に移動します。
- c. 「JMSモジュール」表で、「SOAJMSModule」をクリックして、すべてのリソースを表示します。

「リソースのサマリー」表には、キューおよび接続ファクトリ・エントリが含まれます。

データベース・アダプタをまだ構成していない場合、次の手順を実行します。

▶ データベース・アダプタを構成するには:

1. すべての管理対象サーバーが起動していることを確認します。
2. コマンド・プロンプトから、MIDDLEWARE_HOME/wlserver_10.3/server/binに移動し、setWLSEnv.cmd|.shを実行します。
3. 次のコマンドを実行します:

Windowsの場合:

```
java weblogic.Deployer -adminurl t3://  
adminURL  
:  
adminServerPort  
-user  
adminUser  
-password  
password  
-update -name DbAdapter -plan  
dbPlanLocation  
/FCM_DBAdapter_Plan.xml
```

Linuxの場合:

```
java weblogic.Deployer -adminurl t3://  
adminURL  
:  
adminServerPort  
-user  
adminUser  
-password  
password  
-update -name DbAdapter -plan  
dbPlanLocation  
/FCM_DBAdapter_Plan.xml
```

このコマンドは、DbAdapterデプロイメントのDbAdapter接続ファクトリ"eis/DB/financialclose"を作成します。

FDMEE構成オプション

初期セキュリティ・ポリシーの構成

FDMEEは、一連のデフォルト・ポリシーでWebサービスを構成するスクリプトを提供します。PeopleSoftまたはFusion Financialsが様々なポリシーを使用する場合、Enterprise Managerを使用してポリシーを構成します。

スクリプトを実行する前に、次を確認します:

- Oracle Web Services Managerを構成する手順を実行済みです。
- FDMEEおよびWebLogic管理サーバーを実行中です。

▶ セキュリティ・ポリシーを構成するには:

1. Account Reconciliation Managerを除くすべての製品の場合:

- a. テキスト・エディタでEPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/bin/wls-infra.propertiesを開き、お客様の環境に必要なプロパティを更新します。他のすべてのプロパティはそのままにして、ファイルを保存します。プロパティのリストは、[62ページの表 4](#)を参照してください。
- b. wlsConfigMDS.batまたはwlsConfigMDS.shを実行し、スクリプトが正常に完了してエラーが表示されないことを確認します。
- c. FDMEEを再起動します。
- d. FDMEEを実行中の場合、wlsConfigOWSM.batまたはwlsConfigOWSM.shを実行して、スクリプトが正常に完了してエラーが表示されないことを確認します。
- e. FDMEEを再起動します。

2. Account Reconciliation Managerとの統合の場合:

- a. テキスト・エディタでEPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/bin/wls-infra.propertiesを開き、ユーザーの環境に必要なプロパティを更新します。他のすべてのプロパティはそのままにして、ファイルを保存します。プロパティのリストは、[64ページの表 5](#)を参照してください。
- b. コマンド・プロンプトから、EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/binに移動し、wlsConfigARM.batまたはwlsConfigARM.shを実行して、スクリプトが正常に実行することを確認します。
- c. FDMEEとOracle WebLogic Serverを再起動します。



注:

FDMEEをPeoplesoftまたはFusion Financialsとともに使用している場合、aif.earをパッチ適用または再デプロイする際はいつもwlsConfigMDS.bat/shスクリプトを再実行する必要があります。

表4 wls-infra.propertiesのプロパティ

プロパティ名	プロパティの更新?	説明
ユーザー名	はい	WebLogic管理サーバーに接続するユーザー名。有効なWeblogic管理サーバー・ユーザーにユーザー名を変更します。
パスワード	はい	WebLogic管理サーバーに接続するためのパスワード。有効なWeblogic管理サーバーのパスワードにパスワードを変更します。
adminServerURL	はい	WebLogic管理サーバーのURL。適宜ホストおよびポートを更新します。複数ノードの設定の場合、管理サーバーがインストールされているホストを使用します。

プロパティ名	プロパティの更新?	説明
partitionName	必要に応じて更新	リポジトリで作成されるパーティションを表します。すべての接続構成詳細は、このパーティションに格納されます。
schemarUserName	はい	MDSスキーマのユーザー名。
schemaPassword	はい	MDSスキーマ・ユーザーのパスワード。
databaseType	はい	MDSの構成に使用するデータベース・タイプ。有効な値はORACLEまたはMSSQLです。
ホスト名	はい	データベース・サーバに対するホスト名。
ポート	はい	データベース・サーバー・リスナーのポート。
dbName	はい	MDSスキーマ・ユーザーのサービス名/データベース名。
dataLoadServiceWSDL	はい	dataLoadAMServiceを実行しているURL。FDMEを構成してAccount Reconciliation Management (ARM)アプリケーションと統合する場合、URLを更新する必要があります。適宜ホストおよびポートの詳細を更新します。
clientSecPolicyForARM	いいえ	ARM dataLoadAMServiceは、メッセージ保護サービス・ポリシーでSAMLトークンを使用して保護されます。ARMにアクセスするには、対応するクライアント・ポリシーを使用している必要があります。
hypBudgetCheckWSDL	はい	PeopleSoft Budget確認サービスを実行しているURL。PeopleSoft Commitment Controlとの統合を構成する場合、これを変更する必要があります。適宜ホストおよびポートの詳細を変更します。
ClientSecPolicyForPSFT	必要に応じて更新	PeopleSoftは、wss10 SAMLトークン・ポリシーのみ使用します。デフォルト・ポリシーは、プロパティ・ファイルで指定されています。ポリシー詳細を更新する前に、PeopleSoft構成を確認します。
PSFTAlias	はい	このプロパティは、PeopleSoft LocalNodeを表します。エラーのない

プロパティ名	プロパティの更新?	説明
		FDMEEおよびPeopleSoftの通信のため、これが必要です。プロパティを適宜更新します。
fusionWriteBackWSDL	はい	Fusion LedgerEssbaseAPIサービスを実行しているURL。FDMEEとFusion for Write-Backの統合を構成する場合、URLを変更する必要があります。適宜ホストおよびポートの詳細を変更します。
ClientSecPolicyForFusion	必要に応じて更新	通常、Fusionシステムは、ユーザー名/パスワード保護ポリシーを使用します。プロパティ・ファイルに指定されたデフォルト・ポリシーは、ユーザー名/パスワード保護ポリシーに対応しています。
FusionUserName	はい	サービスがFusionシステムに接続するために使用するユーザー名。ユーザーは、Fusion General Ledgerアプリケーションのアクセス権を持つ有効なFusion Financialsユーザーである必要があります。
FusionUserPassword	はい	Fusion Financialユーザーのパスワード。
ServiceEndPointSecPolicy	必要に応じて更新	FDMEEはパブリックRuleServiceおよびSetupServiceを公開します。これらのサービスを保護するには、メッセージ保護サービス・ポリシーとともにデフォルトのSAMLトークンを使用します。サービスを別のポリシーで保護する必要がある場合は、ポリシーを変更します。

表5 wls-ARM.propertiesのプロパティ

プロパティ名	プロパティの更新?	説明
userName= <i>adminUserName</i>	はい	<i>adminUserName</i> をWebLogic管理者ユーザー名に置き換えます。
passWord= <i>adminPassword</i>	はい	<i>adminPassword</i> をWebLogic管理者パスワードに置き換えます。
adminServerURL= <i>t3://localhost:7001</i>	はい	<i>localhost</i> をWebLogic管理サーバーのホスト名に置き換えます。
ServiceEndPointSecPolicy	いいえ	
ServiceCallBackSecPolicy	いいえ	

FDMEEとPeopleSoftの使用

PeopleSoftで使用するためにFDMEEを使用している場合、ドメインの信頼を確立するため、キースタ証明書がPeopleSoftおよびEPMドメインにインポートされます。

参照:

- My Oracle SupportのノートID 1432843
- *PeopleSoft General Ledger 9.1ドキュメント更新: Hyperion Planning and BudgetingとPeopleSoft Commitment Controlの統合*

4

デプロイメントの変更

この項の内容:

ポートの変更	67
データベース・パスワードの変更	68
データベースの再ホスティング	71
Foundation Servicesの再ホスティング	73
ホストの変更	74
インストールおよび構成されたEPM System製品の所有権の別のユーザーへの変更	74
EPM Systemコンポーネントを別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成	75
単一のデータベース・スキーマを使用するためのEPM Systemコンポーネントの再構成	78
SSLの再構成	79

EPM Systemコンフィグレータを使用すると、製品を再構成し、環境に変更を組み込むことができます。

再構成するには、製品をホスティングしているコンピュータでEPM Systemコンフィグレータを起動し、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』のEMP System製品の構成に関する項の手順に従います。

Foundation ServicesのJava Webアプリケーション・サーバーを再構成する場合は、リレーショナル・データベースも再構成する必要があります。

ポートの変更

ほとんどのEPM Systemコンポーネントについては、EPM Systemコンフィグレータを使用してポートを変更します。詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』の付録のポートに関する項を参照してください。

再構成してポートまたはサーバーを変更する場合は、Webサーバー(EPM SystemコンフィグレータのFoundation Servicesタスクの下)も再構成する必要があります。

データベース・パスワードの変更

サブトピック

- 仮定と前提条件
- Shared Servicesレジストリ・データベース・パスワードの変更
- EPM Systemコンポーネントのリポジトリ・データベース・パスワードの変更
- Planningアプリケーション・リポジトリのパスワードの変更
- Performance Management Architectインタフェース・データ・ソース・パスワードの変更
- FDMリポジトリ・パスワードの変更
- Data Relationship Managementリポジトリ・パスワードの変更
- データベース・パスワードの変更の検証

データベース・リポジトリが必要なEPM System製品の場合、データベース・パスワードを、たとえば会社のパスワード変更ポリシーに準拠するように変更する際は、EPM Systemコンポーネントが新規パスワードを使用してデータベースに接続できるようにShared Servicesレジストリを更新する必要があります。

仮定と前提条件

- EPM System製品を、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイド*または『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』を使用してインストールし、構成しました。
- データベースのバックアップを作成しました。
- データベース管理コンソールを使用して、Shared Servicesレジストリまたは製品リポジトリ・データベースの構成に使用されたユーザー・アカウントのパスワードを変更しました。
- 単一マシンのデプロイメント、またはFoundation ServicesマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する分散デプロイメントでは、WebLogic管理サーバーを停止する必要があります。
- 分散環境で、Foundation Servicesマシン以外のマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する際は、WebLogic管理サーバーが実行中である必要があります。
- UNIXとWindowsの混合デプロイメントで、WindowsマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する際は、WebLogic管理サーバーがUNIXマシンで実行中である必要があります。UNIXマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する際は、WebLogic管理サーバーがWindowsマシンで実行中である必要があります。

Shared Servicesレジストリ・データベース・パスワードの変更

- ▶ Shared Servicesレジストリ・データベースのデータベース・パスワードを更新するには:
 1. EPM System Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを停止します。
 2. Shared Servicesをホスティングするマシンで、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに変更してconfigtool.bat | .shを起動します。
 3. 「Shared Servicesおよびレジストリ・データベース構成」ページで、「前に構成された**Shared Services**データベースに接続」を選択し、新しいデータベース・パスワードを入力します。
 4. 「タスクの選択」ページで、他の製品がShared Servicesデータベースを使用する場合は、その製品に対する「データベースの構成」タスクを選択します。

5. 「データベース構成」ページで他の製品を選択した場合は、新しいデータベース・パスワードを入力します。
6. 表を削除して再作成するか、既存のデータベースを再使用するかを選択するメッセージが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
7. 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
8. WebLogic管理サーバー(停止している場合)、Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。
9. 分散環境で作業している場合は、デプロイメント内の各マシンでShared Servicesレジストリ・データベースを構成する手順を繰り返します。

EPM Systemコンポーネントのリポジトリ・データベース・パスワードの変更

- ▶ Shared Services以外のEPM Systemコンポーネントのデータベース・パスワードを変更するには:
1. EPM System Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを停止します。
 2. データベース・パスワードが変更されたコンポーネントをホスティングするマシンから、`EPM_ORACLE_INSTANCE/bin`に変更して`configtool.bat | .sh`を起動します。
 3. 「タスクの選択」ページで、データベース・パスワードが変更されたこのインスタンス内のすべての製品に対して「データベースの構成」を選択します。
 4. 新しいパスワードを入力します。
 5. 表を削除して再作成するか、既存のデータベースを再使用するかを選択するメッセージが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
 6. 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
 7. WebLogic管理サーバー(停止している場合)、データベース、Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。



注:

Performance Management Architectに登録されたFDMEでは、FDMEデータベース・スキーマのパスワードを変更する場合、FDMEデータ・ソースに対しても同じことを実行します。

Planningアプリケーション・リポジトリのパスワードの変更

Planningアプリケーション・ウィザードで「データソースの編集」を使用して、アプリケーション・リポジトリのパスワードを変更します。Planningアップグレード・ウィザードのデータ・ソースの更新ページも使用できます。『Oracle Hyperion Planning管理者ガイド』を参照してください。

Performance Management Architectインタフェース・データ・ソース・パスワードの変更

Performance Management Architectアプリケーションでインタフェース・データ・ソース構成を使用している場合は、次の手順を実行します。

▶ Performance Management Architect インタフェース・データ・ソース・パスワードを変更するには:

1. データベースでパスワードを変更します。
2. EPM Workspace にログインし、「ナビゲート」、「管理」、「インタフェース・データ・ソースの構成」の順に選択します。
3. 必要なインタフェース・データ・ソース定義を右クリックして、「編集」を選択します。
4. インタフェース・データ・ソース・ウィザードの「データベースの詳細」ページで、新しいパスワードを入力し、「テスト」をクリックして接続が成功していることを確認し、「次へ」をクリックします。
5. 「データ・ソースの詳細」ページで、「表の作成」をクリアして、「終了」をクリックします。
6. インタフェース・データ・ソース・ウィザードの「データベースの詳細」ページで、新しいパスワードを入力し、「テスト」をクリックして接続が成功していることを確認します。

FDMリポジトリ・パスワードの変更

▶ FDMワークベンチを使用してFDMリポジトリ・パスワードを変更するには:

1. データベースでパスワードを変更します。
2. FDMワークベンチから、「アプリケーションの追加」を選択してログインします。
3. リポジトリを変更するアプリケーションを選択し、「変更」を選択します。
4. 「データベース」タブを選択し、現在のパスワードを新パスワードに変更します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「アプリケーション」画面で「OK」をクリックします。
7. アプリケーションにログインできることを確認します。

▶ FDM Webを使用してFDMリポジトリ・パスワードを変更するには:

1. データベースでパスワードを変更します。
2. Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Web ログオン画面で、「アプリケーションの追加」を選択してログインします。
3. リポジトリ・パスワードを変更するアプリケーションを選択し、「変更」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。
5. 「閉じる」をクリックします。
6. アプリケーションにログインできることを確認します。

Data Relationship Management リポジトリ・パスワードの変更

▶ アプリケーションのData Relationship Management リポジトリ・パスワードを変更するには:

1. Data Relationship Management を停止します。
2. データベースでパスワードを変更します。
3. Data Relationship Management コンソールを開きます。
4. 「構成」に移動します。
5. 矢印コントロールを使用して適切なアプリケーションを選択します。
6. 「リポジトリ構成」で、新しいパスワードを入力します。
7. 新パスワードをテストするには、「接続のテスト」をクリックします。

「接続が完了しました!」というメッセージが表示されます。

8. 「構成の保存」をクリックして、暗号化された形式で新しいパスワードを構成ファイルにコミットします。
9. アプリケーションまたはOracle Data Relationship Managementサービスを再起動します。

データベース・パスワードの変更の検証

▶ データベースの構成の変更を検証するには:

1. 次のいずれかの方法を使用して、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Diagnosticsを起動します:

- (Windows) EPM_ORACLE_INSTANCE/binで、`validate.bat`をダブルクリックします。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「`instanceName`」、「EPM System診断」の順に選択します。
- (UNIX) コンソールから、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動して、`validate.sh`と入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。

2. 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに移動して、`validation_report_date_time.html`を開きます。

データベースの再ホスティング

サブトピック

- [仮定と前提条件](#)
- [再ホスティングされたShared Servicesデータベースへの接続の更新](#)
- [再ホスティングされたEPM Systemデータベースへの接続の更新](#)
- [再ホスティングされたデータベースの検証](#)

データベース・リポジトリが必要なEPM System製品については、データベースが別のサーバーで再ホスティングされている場合、再ホスティングされたデータベースを認識するようにEPM Systemで変更を行います。

仮定と前提条件

- EPM System製品を、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイド*または『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』を使用してインストールし、構成しました。
- EPM Systemコンポーネントを停止した後、データベースのバックアップを作成してから、ターゲット・マシンでデータベースをリストアしました。
- 単一マシンのデプロイメント、またはFoundation ServicesマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する分散デプロイメントでは、WebLogic管理サーバーを停止する必要があります。
- 分散環境で、Foundation Servicesマシン以外のマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する際は、WebLogic管理サーバーが実行中である必要があります。

- UNIXとWindowsの混合デプロイメントで、WindowsマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する際は、WebLogic管理サーバーがUNIXマシンで実行中である必要があります。UNIXマシンからEPM Systemコンフィグレータを実行する際は、WebLogic管理サーバーがWindowsマシンで実行中である必要があります。

再ホスティングされたShared Servicesデータベースへの接続の更新

- ▶ Shared Servicesレジストリ・データベースのデータベース接続情報を更新するには:
 1. EPM System Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを停止し、データベースを停止します。
 2. Shared Servicesをホスティングするマシンで、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに変更してconfigtool.bat | .shを起動します。
 3. 「Shared Servicesおよびレジストリ・データベース構成」ページで、「前に構成されたShared Servicesデータベースに接続」を選択し、新しいデータベース接続情報を入力します。
 4. 「タスクの選択」ページで、他の製品がShared Servicesデータベースを使用する場合は、その製品に対する「データベースの構成」タスクを選択します。
 5. 「データベース構成」ページで他の製品を選択した場合は、新しいデータベース接続情報を入力します。
 6. 表を削除して再作成するか、既存のデータベースを再使用するかを選択するメッセージが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
 7. 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
 8. WebLogic管理サーバー(停止している場合)、データベース、Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。
 9. 分散環境で作業している場合は、デプロイメント内の各マシンでShared Servicesレジストリ・データベースを構成する手順を繰り返します。

再ホスティングされたEPM Systemデータベースへの接続の更新

- ▶ Shared Services以外のEPM Systemコンポーネントのデータベース接続情報を更新するには:
 1. EPM System Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを停止し、データベースを停止します。
 2. データベース接続情報が変更されたコンポーネントをホスティングするマシンから、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに変更してconfigtool.bat | .shを起動します。
 3. 「タスクの選択」ページで、データベース接続情報が変更されたこのインスタンス内のすべての製品に対して「データベースの構成」を選択します。
 4. 新しいデータベース接続情報を入力します。
 5. 表を削除して再作成するか、既存のデータベースを再使用するかを選択するメッセージが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
 6. 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
 7. WebLogic管理サーバー(停止している場合)、データベース、Java Webアプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。

再ホスティングされたデータベースの検証

- ▶ データベースの構成の変更を検証するには:

1. 次のいずれかの方法を使用して、EPM System Diagnosticsを起動します:
 - (Windows) EPM_ORACLE_INSTANCE/binで、`validate.bat`をダブルクリックします。
 - 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「`instanceName`」、「EPM System診断」の順に選択します。
 - (UNIX) コンソールから、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動して、`validate.sh`と入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。

2. 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに移動して、`validation_report_date_time.html`を開きます。

Foundation Servicesの再ホスティング

Foundation Services Java Webアプリケーションを新しいマシンに再ホスティングするには、EPM Systemコンフィグレータを使用してクラスタを作成し、Webサーバーを更新し、次にOracle HTTP Serverクラスタリングに基づいて、Foundation Servicesの論理Java WebアプリケーションがWebサーバーをポイントするように更新します。

この手順では、ノード1でFoundation Servicesがすでにインストールおよび構成されていることを前提としています。EPM Systemコンフィグレータでの構成時に、新規のShared Servicesデータベースの作成、新規のWebLogicドメインの作成、およびWebサーバーの構成も完了しています。

- ▶ ノード2でFoundation Services Java Webアプリケーションを再ホスティングするには:
 1. ノード1でWebLogic管理サーバーを起動します。
 2. ノード2でFoundation Servicesをインストールおよび構成します。EPM Systemコンフィグレータでの構成時に、次のようにします:
 - 新規のEPM_ORACLE_INSTANCEを作成します。
 - Shared Servicesのデータベース構成時に、「前に構成されたShared Servicesデータベースに接続」を選択し、ノード1に対して構成したShared Servicesデータベースを指定します。
 - 同じWebLogicドメインにデプロイします。
 - Webサーバーを構成します。
 3. EPM Systemコンフィグレータを使用して、ノード1でWebサーバーを再構成します。
 4. ノード1でWebLogic管理サーバーを停止します。
 5. WebLogicノード・マネージャをノード1およびノード2の両方で起動します。たとえば、MIDDLEWARE_HOME/wlserver_10.3/server/bin内の`startNodeManager.cmd`を実行します。
 6. ノード1でWebLogic管理サーバーを起動します。
 7. WebLogic管理サーバー・コンソールから、ノード1とノード2でShared Services管理対象サーバーを起動します。



注:

ノード2でのShared Services起動の失敗を回避するために、WebLogic管理サーバー・コンソールを使用して、ノード2でShared Servicesを起動してから停止することをお勧めします。

8. ノード1のWebサーバーのみを起動します。
9. 次のURLを使用して、Shared Servicesにアクセスします: <http://Node1:19000/interop/index.jsp>。

10. 高可用性が機能していることをテストするために、ノード1のShared Servicesを停止し、Shared Servicesを次のURLを使用して再度起動します: `http://Node1:19000/interop/index.jsp`。

WebLogicは、ノード2からShared Servicesをリダイレクトして起動します。

ホストの変更

ホスト名が変更された場合、Shared Servicesレジストリでホスト値を更新する必要があります。

▶ Shared Servicesレジストリでホスト名の値を更新するには:

1. `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin`から、`epmsys_registry.bat|.sh updatehost oldHostName newHostName`を実行します。
2. すべてのEPM Systemコンポーネントをすべてのマシンで再起動します。

インストールおよび構成されたEPM System製品の所有権の別のユーザーへの変更

サブトピック

- [仮定と前提条件](#)
- [インストールおよび構成された製品の所有権の別のユーザーへの変更](#)
- [変更されたユーザーの検証](#)

同じユーザー(通常、特定のユーザーに属していないアカウント)を使用して、すべてのEPM System製品をインストールおよび構成する必要があります。この項の手順を使用して、インストールおよび構成された製品の所有権を別のユーザーに変更できます。

仮定と前提条件

- EPM System製品を、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイド*または『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』を使用してインストールし、構成しました。
- EPM SystemインストーラおよびEPM Systemコンフィグレータを、すべてのEPM System製品に対する管理者権限を持つ同じユーザーとして実行しました。

インストールおよび構成された製品の所有権の別のユーザーへの変更

▶ インストールおよび構成されたEPM System製品の所有権を変更するには:

1. 中央のOracleインベントリに移動します。たとえば、(Windows): `C:/Program Files/Oracle/Inventory/ContentsXML/inventory.xml`または(UNIX): `oraInventory/ContentsXML.inventory.xml`です。

2. ContentsXML/inventory.xmlを更新してEPM_ORACLE_HOMEに関連付けられているユーザーを変更します。たとえば、この例ではuser1を新しいユーザー名に変更します。

```
<HOME NAME="EpmSystem_user1" LOC="/u02/Oracle/Middleware/EPMSys11R1"
TYPE="0" IDX="2"/>
<HOME NAME="OH1684206986" LOC="/u02/Oracle/Middleware/odi" TYPE="0" IDX="3">
  <DEPHOMELIST>
    <DEPHOME LOC="/u02/Oracle/Middleware/oracle_common"/>
  </DEPHOMELIST>
</HOME>
```

3. (Windowsのみ)Windowsマシンでは、EPM Systemコンフィグレータの「共通設定」パネル内のサービスに対し名前付きユーザーを指定した場合、次のように新しいユーザー・アカウントを使用して開始するWindowsサービスを更新します:
 - a. Microsoft管理コンソールのWindowsサービスのページに移動します。
 - b. 各EPM Systemサービスに対し、サービスを右クリックして「プロパティ」を選択し、「ログオン」タブをクリックしてから、新しいユーザー名およびパスワードを指定します。
4. リリース11.1.2.0および11.1.2.1の場合: .oracle.instancesファイルを、以前のユーザーの\$HOME (UNIX)またはユーザー・プロファイル(Windows)から新しいユーザーの\$HOME (UNIX)またはユーザー・プロファイル(Windows)に移動します。
5. (WebSphereのみ)以前のユーザーが持っていたのと同じWebSphereファイルへの読取り/書込み/実行アクセス権が新しいユーザーにあることを確認します。

変更されたユーザーの検証

新しいユーザーとしてログインし、Windowsサービス・コントロール・パネルからEPM Systemサービスを起動します。

EPM Systemコンポーネントを別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成

サブトピック

- [仮定と前提条件](#)
- [EPM Systemコンポーネントを別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成](#)
- [データベース構成の変更の検証](#)

すべてのEPM Systemコンポーネントが単一のデータベース・スキーマを使用するように構成されている場合、各コンポーネントが別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成できます。決定を下す際に、パフォーマンス、単一のアプリケーションまたは製品のロールバック手順、および障害リカバリ・プランについて検討してください。

仮定と前提条件

- EPM System製品を、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイド*または『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』を使用してインストールし、構成しました。

- すべてのEPM Systemコンポーネントは、単一のデータベース・スキーマを使用するように構成されます。

EPM Systemコンポーネントを別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成

- ▶ EPM Systemコンポーネントを、別々のデータベース・スキーマを使用するように再構成するには:
1. Foundation Servicesマシン(WebLogic管理サーバーが稼働)およびデータベースが再構成対象であるコンポーネントをホスティングしているすべてのマシンで、実行されている全プロセスを停止します。
 2. 標準のデータベース・ベンダーのメカニズムを使用して、コンポーネントごとにデータベース表を抽出します。

たとえば、Oracleデータベースで、エクスポート・ユーティリティを使用します。

76ページの表 6にあるパターンを使用して、コンポーネントごとに表を抽出します:

表6 コンポーネントの接頭辞

製品	接頭辞
Account Reconciliation Management	ARM%
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition	AIF%
Oracle Hyperion Calculation Manager	CALC%
Disclosure Management	DISCMAN%
EPM Workspace	WKS%
Essbaseサーバー	ESS%
Financial Close Management	FCC%、S_ROW_ID%
Financial Management	HFM%、HSV%、LINSCRIPT%
Financial Reporting	FR%
Performance Management Architect	DS%、JM%、OR%、SM%およびPRODUCTという名前の単一の表
Oracle Hyperion Performance Scorecard	HPS%

製品	接頭辞
Planning	アプリケーションのHSPSYS%、HSP%
Oracle Hyperion Profitability and Cost Management	HPM%
Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework	注釈のV8% + ANNOT%、BRIOSECG%、BRIOSECP%、BRIOSECR%
Shared Services	CSS%、CES%、QRTZ%、LCM%、HSS%、SMA%、HDB%
Web Analysis	ATF%、HYA%、OBJ%

- 標準のデータベース・ベンダーのメカニズムを使用して、コンポーネントごとに新規データベース・スキーマを作成して、コンポーネントごとの表を新規の別々のデータベース・スキーマにインポートします。
たとえば、Oracleデータベースで、インポート・ユーティリティを使用します。
- データベースが再構成中であるコンポーネントをホスティングしているマシンの1つで、EPM Systemコンフィグレータを起動し、コンポーネントの1つに対して「データベースの構成」および「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」タスクを選択して、「次」をクリックします。
- 「データベースの構成」パネルで新規の個々のデータベースの資格証明を入力し、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
- 残りのパネルで「次」をクリックし、「要約」パネルで「終了」をクリックします。
- EPM Systemコンフィグレータを終了します。
- データベースを再構成するコンポーネントごとに [77ページのステップ 4](#)から [77ページのステップ 7](#)を繰り返します。
- すべてのマシン上のすべてのプロセスを再起動します。
- Shared Services Registryデータベースに対して問合せツールを実行し、分離されたコンポーネントの表を削除します。
[76ページの表 6](#)に記載されている接頭辞を持つ表、ビュー、プロシージャおよびシーケンスを削除します。

データベース構成の変更の検証

▶ データベースの構成の変更を検証するには:

- 次のいずれかの方法を使用して、EPM System Diagnosticsを起動します:
 - (Windows) EPM_ORACLE_INSTANCE/binで、`validate.bat`をダブルクリックします。
 - 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「instanceName」、「EPM System診断」の順に選択します。
 - (UNIX) コンソールから、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動して、`validate.sh`と入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。
- 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに移動して、`validation_report_date_time.html`を開きます。

単一のデータベース・スキーマを使用するためのEPM Systemコンポーネントの再構成

サブトピック

- 仮定と前提条件
- EPM Systemコンポーネントを単一のShared Services Registryデータベースを使用するように再構成
- データベース構成の変更の検証

EPM Systemコンポーネントが別々のデータベース・スキーマを使用するように構成されている場合、すべてのコンポーネントの表が単一のデータベース・スキーマにまとめられるように再構成することで、単純化できます。

仮定と前提条件

- 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を使用して、EPM System製品をインストールし、構成しました。
- すべてのEPM Systemコンポーネントは、別々のデータベース・スキーマを使用するように構成されています。

EPM Systemコンポーネントを単一のShared Services Registryデータベースを使用するように再構成

- ▶ EPM Systemコンポーネントを、単一のデータベース・スキーマを使用するように再構成するには:
1. Foundation Servicesマシン(WebLogic管理サーバー稼働)およびデータベースが再構成対象であるコンポーネントをホスティングしているすべてのマシンで、実行されている全プロセスを停止します。
 2. 各データベースで、標準のデータベース・ベンダーのメカニズムを使用して、コンポーネントごとにデータベース表を抽出します。

たとえば、Oracleデータベースで、エクスポート・ユーティリティを使用します。
 3. 標準のデータベース・ベンダーのメカニズムを使用して、表をShared Services Registryデータベースにインポートします。

たとえば、Oracleデータベースで、インポート・ユーティリティを使用します。
 4. データベースが再構成中であるコンポーネントをホスティングしているマシンの1つで、EPM Systemコンフィグレータを起動し、コンポーネントの1つに対して「データベースの構成」および「アプリケーション・サーバーへのデプロイ」タスクを選択して、「次」をクリックします。
 5. 「データベースの構成」パネルでShared Services Registryデータベースの資格証明を入力し、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
 6. 残りのパネルで「次」をクリックし、「要約」パネルで「終了」をクリックします。
 7. EPM Systemコンフィグレータを終了します。
 8. データベースを再構成するコンポーネントごとに [77ページのステップ 4](#)から [77ページのステップ 7](#)を繰り返します。
 9. すべてのマシン上のすべてのプロセスを再起動します。

データベース構成の変更の検証

- ▶ データベースの構成の変更を検証するには:

1. 次のいずれかの方法を使用して、EPM System Diagnosticsを起動します:

- (Windows) EPM_ORACLE_INSTANCE/binで、`validate.bat`をダブルクリックします。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「**Oracle EPM System**」、「**Foundation Services**」、「instanceName」、「**EPM System診断**」の順に選択します。
- (UNIX) コンソールから、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動して、`validate.sh`と入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。

2. 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに移動して、`validation_report_date_time.html`を開きます。

SSLの再構成

非SSL対応の環境にデプロイしていて、SSLを有効にする場合は、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemセキュリティ構成ガイド*を参照してください。

5

Shared Servicesレジストリの更新

この項の内容:

Shared Servicesレジストリのコンポーネント階層の理解	81
Shared Servicesレジストリの編集	82

Shared Servicesレジストリは、コマンド・ライン・ユーティリティを使用して編集できます。このユーティリティを使用するのは、EPM Systemコンフィグレータを使用してShared Servicesレジストリに必要な変更を実行できない場合のみにしてください。



ヒント:

ほとんどの変更は、EPM Systemコンフィグレータを使用して実行できます。たとえば、デプロイされているJava Webアプリケーションを変更する場合、EPM Systemコンフィグレータの「Webアプリケーションの論理アドレスの構成」タスクを選択すると、Java Webアプリケーションを再デプロイしなくても変更を実行できます。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。

epmsys_registry.batユーティリティ(UNIXではepmsys_registry.sh)を使用して、Shared Servicesレジストリに対して必要な変更を行います。

Shared Servicesレジストリのコンポーネント階層の理解

Shared Servicesレジストリを修正するには、その構造を理解する必要があります。11.1.x製品の構成時に、EPM Systemコンフィグレータは、各製品のコンポーネントを使用してShared Servicesレジストリを自動的に更新します。コンポーネントには、階層を形成する子コンポーネントも含まれます。階層の各コンポーネントには、独自のコンポーネント・プロパティがあります。Shared Servicesレジストリを更新するには、コンポーネント名とコンポーネント・プロパティ名を両方とも認識しておく必要があります。

たとえば、ESSBASE_PRODUCTコンポーネントには、次のコンポーネント・プロパティが含まれます:

- host
- agent_PortNumber

コンポーネントのプロパティ名および子コンポーネントを調べるには、コマンドを使用してShared Servicesレジストリ内のコンポーネントを表示します。82ページのShared Servicesレジストリ内のコンポーネントの表示を参照してください。

Shared Servicesレジストリの編集

▶ Shared Servicesレジストリを編集するには:

1. Shared Servicesレジストリをバックアップします。
2. 11.1.x EPM Systemソフトウェアをホスティングしているマシンで、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry view  
componentType
```

コンポーネント階層を表示して、コンポーネントの削除またはコンポーネント・プロパティの更新に必要なコンポーネント・プロパティ名を確認する必要があります。

詳細は、[82ページのShared Servicesレジストリ内のコンポーネントの表示](#)を参照してください。

3. 必要な変更に応じて、次のコマンドを参照してください:

コンポーネントを削除するには、[83ページのコンポーネント・インスタンスの削除](#)を参照してください。

コンポーネント・プロパティを更新するには、[84ページのコンポーネント・プロパティの更新](#)を参照してください。



注:

UNIXプラットフォームでepmsys_registryコマンドを実行する場合は、すべての#の前に\を付ける必要があります。

4. 任意の製品のLOGICAL_WEB_APPプロパティを変更した場合、EPM Systemコンフィグレータを実行し、Webサーバーを再構成します。(タスクの選択ページでFoundation Services Webサーバー構成タスクを選択します。)

Shared Servicesレジストリ内のコンポーネントの表示

コンポーネントを削除したりコンポーネント・プロパティを更新する前に、コンポーネント階層を表示し、コンポーネント・プロパティの名前と値を取得する必要があります。

▶ コンポーネント階層を表示するには:

1. EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを使用します:

```
epmsys_registry view  
componentType
```

componentTypeは、Shared Servicesレジストリ内のコンポーネントの名前です。

このコマンドは、指定された階層内のすべてのコンポーネントと、その直属の子のみを表示します。情報はコンソールに表示されます。

たとえば、PLANNING_PRODUCT階層内のコンポーネントをすべて表示するには、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry view SYSTEM9/PLANNING_PRODUCT
```

2. 必要に応じて、コマンドを繰り返してサブコンポーネントのプロパティ名を取得します。

たとえば、LOGICAL_WEB_APPは、PLANNING_PRODUCTの子です。PlanningのLOGICAL_WEB_APPのプロパティを表示するには、次のコマンドを入力します:

```
epmsys_registry view SYSTEM9/PLANNING_PRODUCT/LOGICAL_WEB_APP
```

3. この表示で、削除または更新するコンポーネントに関する次の情報を書き留めます:

- 削除または更新するコンポーネントのコンポーネントID
- 更新するコンポーネントのコンポーネント・プロパティの名前と値

たとえば、PlanningのLOGICAL_WEB_APPには、context、portおよびhostを含む様々なプロパティがあります。

コンポーネント・インスタンスの削除

コンポーネント・インスタンスを削除するには、コンポーネント階層に表示されるコンポーネントのIDを確認します。

- ▶ コンポーネントをコンポーネント階層から削除するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry deletecomponent #  
componentID
```

ここで、componentIDは、コンポーネント階層に表示されるコンポーネントのIDです。

UNIXの場合は、次を実行します:

```
epmsys_registry.sh deletecomponent \#  
componentID
```

ノードを削除しても、ノードの子は削除されません。



ヒント:

製品ノードを削除する場合は、ノードの子をすべて削除してから製品ノードを削除してください。



注意

正しいコンポーネントを削除してください。

コンポーネント・プロパティの更新

コンポーネント・プロパティを更新するには、コンポーネント階層に表示されるコンポーネントIDとコンポーネント・プロパティ名を確認します。

- ▶ コンポーネント・プロパティを更新するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry updateproperty #  
componentID  
/@  
componentProperty  
  
value
```

ここで、componentIDはコンポーネント階層に表示されるコンポーネントのID、componentPropertyは更新するコンポーネント・プロパティ名、valueはコンポーネント・プロパティの新しい値です。

UNIXの場合は、次を実行します:

```
epmsys_registry.sh updateproperty \#  
componentID  
/@  
componentProperty  
  
value
```

コンポーネント・プロパティ名は大文字と小文字が区別されます。



ヒント:

コンポーネント階層を表示するとき、「プロパティ」セクションでコンポーネント・プロパティ名を探してください。また、プロパティ名hostを使用すると、コンポーネントが実行されているホストを更新できます。

たとえば、コンポーネントIDが99999のEssbaseサーバーのポート番号を1425に変更するには、次のコマンドを入力します:

```
epmsys_registry updateproperty #99999/@agent_PortNumber 1425
```

Shared Servicesレジストリ内のホスト・エントリの表示

Shared Servicesレジストリのホスト・エントリを表示できます。

様々な目的でこのコマンドを使用できます。たとえば、コマンドを使用して次を実行します:

- 再ホスティング・プロセスの単純化
- サーバー名を別名に変更するプロセスの単純化

- サーバー通信の問題のデバッグ

- ▶ Shared Servicesレジストリのホスト・エントリを表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry viewhosts
```

Shared Services Registryに格納されているこのマシンのサーバー名が1つの列に表示され、別の列にDNSで解決されたホスト名が表示されます。



ヒント:

列の名前が一致しない場合、DNSエントリを解決するか、解決した名前と一致するホスト・ファイルを作成します。

6

Enterprise Managerを使用したEPM System Java Webアプリケーションのモニター

EPM Systemコンフィグレータでは、最初のJava Webアプリケーションをデプロイする際に、Oracle Enterprise Managerが自動的にデプロイされます。

Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlを使用して、WebLogicドメインを管理できます。組み込みのEnterprise Managerを使用すると、EPM SystemのすべてのJava Webアプリケーションをすぐに管理できます。Grid Controlを使用するフルバージョンのOracle Enterprise Managerでは、Fusion Middleware Controlに機能(メトリックの履歴情報を含む)を追加します。

- サーバーおよび実行中のJava Webアプリケーションのステータス
- Java Webアプリケーションを実行しているサーバーおよびリスニングしているポート
- Java Webアプリケーションおよび管理対象サーバーの状況およびパフォーマンス(モニターするサーバーを選択し、WebLogicサーバー、パフォーマンス・サマリーの順に移動して、メトリックの使用可能なカテゴリを表示します)

Fusion Middleware Controlに関連するドキュメントは、http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/core.1111/e10105/monitor.htmにあります。Enterprise Managerに関連するドキュメントは、http://download.oracle.com/docs/cd/E11857_01/nav/overview.htmにあります。

- ▶ Enterprise Managerを起動するには、<http://WebLogicAdminServerHost:port/em>に移動します。

7

EPM Oracleインスタンスの削除とEPM Systemのアンインストール

この項の内容:

EPM Oracleインスタンスの削除	89
EPM System製品のアンインストール	91
EPM Systemクライアントのアンインストール	94

EPM System製品のこのリリースをアンインストールするには、次のワークフローに従います。

1. デプロイメントに関連するインスタンスを削除します。90ページの**インスタンスの削除**を参照してください。
2. バイナリを削除するには、EPM Systemアンインストーラを使用します。91ページの**EPM System製品のアンインストール**。また、EPM Systemコンポーネントをサイレント・アンインストールできます。
3. EPM Systemクライアントをアンインストールします。94ページの**EPM Systemクライアントのアンインストール**を参照してください。
4. 他の製品にミドルウェア・ホームの残りのコンテンツを使用していない場合は、「プログラムの追加/削除」を使用してOracle HTTP Server、WebLogic Server、`oracle_common`およびOracle Databaseクライアントのアンインストーラを実行するか、製品のアンインストール・ショートカットを使用します。

EPM Oracleインスタンスの削除

EPM Systemコンフィグレータを使用して、EPM Systemコンポーネントまたはデプロイメントのアンインストールの一部としてEPM Oracleインスタンスを削除します。

また、次の理由でインスタンスを削除できます(この場合、インスタンスは削除しますがアンインストールはしません):

- 追加のEPM Oracleインスタンスを構成することでデプロイメントをスケール・アウトしましたが、今度はそのインスタンスを削除することで、デプロイメントをスケール・ダウンする必要があります。
- EPM Oracleインスタンスを間違えて構成したため、そのインスタンスをデプロイメントから削除する必要があります。

仮定と前提条件

- EPM System製品を、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイド*または『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』を使用してインストールし、構成しました。
- 削除するインスタンスを確認するために、デプロイメント・レポートを実行しました。

- WebSphere Application ServerにJava Webアプリケーションをデプロイメントした場合、デプロイメント・マネージャ、ノード・エージェント、およびすべてのアプリケーションを停止します。すべてのデータベースをバックアップし、`manageprofiles`コマンドを使用してプロファイルをバックアップします。
- WebLogic管理サーバーは、WebLogic管理サーバーをホストしているマシンからインスタンスを削除する場合は停止する必要があります。WebLogic管理サーバーは、WebLogic管理サーバーをホストしているマシン以外のマシンからインスタンスを削除する場合は実行中である必要があります。
- Oracle SOA Suiteを使用する製品の場合は、SOAサーバーが実行中である必要があります。

インスタンスの削除

▶ インスタンスを削除するには:

1. 次のいずれかの方法を使用して、削除するインスタンスをホスティングしているマシンからEPM Systemコンフィグレータを起動します:

- `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin`に移動してから起動します:

```
configtool.bat (.sh) -remove
```

- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM Oracleインスタンス名」、「Foundation Services」、「EPM Systemコンフィグレータの削除インスタンス」の順に選択します。

EPM Systemコンフィグレータにより必要なサービスが停止されます。

2. 警告のプロンプトで「はい」をクリックして続行します。

残っている最後のFoundation Servicesのインスタンスを削除する場合は、Shared Servicesレジストリが削除されるため、他のすべてのEPM System製品が機能しくなくなります。

3. コンソール上で削除タスクの進行状況および完了を確認します。
4. Java WebアプリケーションをWebSphere Application Serverにデプロイした場合、削除するインスタンスをホスティングしているマシンから次のスクリプトを実行します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE  
/bin/deployment/runWASDeployment.bat [sh] - remove
```

スクリプトによって必須パラメータの入力が求められます。

EPM Systemコンフィグレータでは、このインスタンスのコンポーネントのインスタンス削除中に、次のタスクを実行します:

- クラスタからJava Webアプリケーションを削除します。クラスタ内の最後のJava Webアプリケーションの場合、クラスタを削除します。
- IIS Webアプリケーションの構成を削除します。
- `EPM_ORACLE_INSTANCE`からファイルを削除します。
- Oracle Hyperion Shared ServicesレジストリのエンTRIESを削除します。
- Windowsの「スタート」メニューのエンTRIESを削除します。
- WindowsサービスのエンTRIESを削除します。

- Windowsレジストリのエントリを削除します。
- Oracle Hyperion Financial Close Managementの場合、コンポジットを削除します。

EPM Systemコンフィグレータでは、このインスタンスのコンポーネントのインスタンス削除中に、次の情報を保持します:

- EPM_ORACLE_HOMEのバイナリ・ファイル。
- EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnosticsの内容。
- 製品データ。
- 製品のレポート。

単一の管理対象サーバーにデプロイしたインスタンスを削除する場合、(単一の管理対象サーバーが最初にデプロイされた)管理サーバー・マシン上のインスタンスは最後に削除します。

インスタンス削除の検証

EPM Oracleインスタンスの削除後に、デプロイメントにインスタンスが残っている場合、次の検証手順を実行します。

▶ インスタンスが正常に削除されたことを検証するには:

1. デプロイメント・レポートを実行して、インスタンスが削除されたことを確認します:

EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry report deployment
```

レポート・ファイル(deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html)は、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに格納されています。

2. 次のいずれかの方法を使用して、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Diagnosticsを起動します:

- (Windows) EPM_ORACLE_INSTANCE/binで、`validate.bat`をダブルクリックします。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「**Oracle EPM System**」、「**Foundation Services**」、「instanceName」、「**EPM System診断**」の順に選択します。
- (UNIX) コンソールから、EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動して、`validate.sh`と入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。

3. 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに移動して、`validation_report_date_time.html`を開きます。

EPM System製品のアンインストール

EPM System製品をアンインストールすると、EPM Systemアンインストーラは、インストール場所からバイナリを除去します。デプロイメント内のどのインスタンスでも今後使用されないコンポーネントを完全に削除する場合にアンインストールを使用します。



注意

EPM System製品をアンインストールすると、EPM Systemアンインストーラにより、インストール・ディレクトリからすべて削除されます。アンインストールを実行する前に、保持するファイルは必ずバックアップしておくようにしてください。ファイルのバックアップについては、*Oracle Enterprise Performance Management System*バックアップおよびリカバリガイドを参照してください。

▶ EPM System製品をアンインストールするには:

1. EPM Systemプロセスが実行されていないことを確認します。
2. アンインストーラを起動するメソッドを選択します:
 - (Windows) EPM_ORACLE_HOME/uninstall内のuninstall.cmdをダブルクリックします。
 - (Windows) Windowsのコントロール・パネルで、削除/アンインストールする「**Oracle EPM System**」を選択します。
 - (Windows) Windowsコンソールから、EPM_ORACLE_HOME/uninstall/に移動し、uninstall.cmdと入力します。
 - 「スタート」メニューから、「プログラム」、「**Oracle EPM System**」、「**EPM Systemのアンインストール**」の順に選択します。
 - (UNIX) EPM_ORACLE_HOME/uninstallディレクトリに移動し、./uninstall.shと入力します。
 - (UNIX) EPM_ORACLE_HOME/uninstallディレクトリに移動し、./uninstall.sh -consoleと入力します。
3. 続行する前にその他のプログラムを終了してから、「次へ」をクリックまたは選択します。
4. アンインストールする製品を選択して、「次へ」をクリックまたは選択します。選択した製品の同じ層上のすべてのコンポーネントがアンインストールされます。

たとえば、任意のFinancial Management Webコンポーネントをアンインストールする場合、EPM SystemアンインストーラはすべてのFinancial Management Webコンポーネントをアンインストールします。

デフォルトでは、インストールされているすべての製品が選択されています。「すべて選択解除」を選択し、全製品に対する選択をクリアしてから、アンインストールする製品のみ選択します。

任意のReporting and Analysisコンポーネントをアンインストールすると、その他のすべてのOracle Hyperion Reporting and Analysisコンポーネントが使用不可になります。

5. EPM Oracleホーム・ディレクトリ内のすべてのファイルとディレクトリを削除するかどうかを指定します。

このオプションを選択すると、データ・ファイルやカスタマイズしたファイルも削除されます。

6. アンインストールする製品を確認した後、「次へ」をクリックまたは選択します。

EPM Systemアンインストーラにより、各アセンブリのアンインストールが完了するたびに進行状況の表示が更新されます。



注:

アンインストールを取り消すには、「取消し」をクリックまたは選択します。「取消し」を選択すると、EPM Systemアンインストーラは、現在のアセンブリのアンインストールを停止し、そのアセンブリをインストール済の状態にロール・バックします。すでにアンインストールされたアセンブリのアンインストールは元に戻せません。

EPM Systemアンインストーラにより、アンインストールが成功したかどうかが表示されます。アンインストールが部分的に失敗した場合、EPM Systemアンインストーラは、アンインストールできなかったアセンブリを指摘します。エラーの詳細はログ・ファイルを確認してください。ログ・ファイルは、EPM_ORACLE_HOME/diagnostics/logs/installにあります。アセンブリごとにproduct-install.logというログ・ファイルがあります。たとえば、hss-install.logなどです。

7. 「終了」をクリックまたは選択し、EPM Systemアンインストーラを閉じます。
8. Windowsで、Oracle HTTP Serverをアンインストールした場合、再起動してインストールを完全に削除する必要があります。この手順は、再インストールする場合に必須です。
9. EPM System製品のアンインストール後、再起動します。

クライアントをアンインストールする際、マシンにインストールされているすべてのEPM Systemクライアントを削除する場合にのみ、「設定タイプ」ウィンドウで**共通コンポーネントの削除**を選択します。複数のEPM Systemクライアントが同一マシンにインストールされていて、1つのクライアントのみを削除する場合、**共通コンポーネントの削除**を選択解除します。

製品のサイレント・アンインストールの実行

サイレント・アンインストールを使用すると、プロセスが自動化され、各コンピュータ上でアンインストール設定を手動で指定しなくても複数のコンピュータ上のEPM System製品をアンインストールできるようになります。

同じアンインストール・オプションを使用して、複数のコンピュータにあるEPM System製品をアンインストールするには、インストール中に応答ファイルを記録します。次に、応答ファイルに保存されているオプションを使用して、コマンド・ラインからサイレント・アンインストールを実行できます。

▶ サイレント・アンインストールを実行するには:

1. インストール時に作成した応答ファイルをアンインストールを実行するマシンにコピーします。また、アンインストールを実行するマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーすることもできます。

インストール中の応答ファイルの記録の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』の「サイレント・インストールの実行」を参照してください。

2. コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

```
uninstall.cmd -silent  
filename
```

Windowsの場合。または

```
uninstall.sh -silent  
filename
```

UNIXの場合。

バックグラウンドでアンインストールが実行されます。

EPM Systemクライアントのアンインストール

クライアント・インストーラでアンインストール・オプションを使用して、EPM Systemクライアントをアンインストールできます。

- ▶ EPM Systemクライアントをアンインストールするには:
1. `client_installer_folder`でクライアント・インストーラのサブフォルダを開き、クライアント・インストーラのファイル名をダブルクリックします。[94ページのデフォルト・インストール・ディレクトリと注意](#)を参照してください。
 2. インストール・ウィザードを進めて、「削除」を選択し、アンインストールを完了する場合に「終了」をクリックします。



注:

同じマシンにインストールされている複数のクライアントをアンインストールする場合またはクライアントがEPM Systemサーバー製品と同じマシンにインストールされている場合、`DELETE_COMMON=false`コマンド・ライン・パラメータを使用してアンインストールを起動します。[95ページのクライアントのサイレント・アンインストールの実行](#)を参照してください。

デフォルト・インストール・ディレクトリと注意

次の表に示す情報には、EPM Workspaceから実行されるインストール、EPM Systemクライアント・インストーラによるインストールおよびサイレント・インストールが該当します。

表7 クライアント・インストーラのインストール・ディレクトリ

クライアント	デフォルト・インストール・ディレクトリ
管理サービス・コンソール	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/eas/console</code>
Essbaseクライアント	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseClient</code>
Oracle Essbase Studioコンソール	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/console</code>
Financial Management	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Client/Client32/HFM.exe</code>
Financial Reporting Studio	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialReportingStudio</code>
Oracle Hyperion EPM Architect	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/EPMAFileGenerator</code>
Planningオフライン	<code>EPM_ORACLE_HOME/products/OfflinePlanning.</code>

クライアント	デフォルト・インストール・ディレクトリ
予測プランニング	C:/Program Files/Oracle/Crystal Ball
Smart View	C:/Oracle/SmartView
Strategic Finance	EPM_ORACLE_HOME/products/hsf/Client
Disclosure Management	c:/Program Files/Oracle Hyperion Disclosure Management

クライアントのサイレント・アンインストールの実行

Oracle Hyperion Disclosure Management以外のEPM Systemクライアントをアンインストールするには、コマンドライン・パラメータ/xを指定してEPM Systemクライアント・インストーラを使用します。

- ▶ Essbaseクライアント、Essbase Studioコンソール、管理サービス・コンソールまたはDisclosure Management以外のEPM Systemクライアントのサイレント・アンインストールを行うには、次のコマンドを使用します:

```
installer file name /x /s /v"/qn /l*v log file path and name"
```

たとえば、次のコマンドではOracle Smart View for Officeがアンインストールされ、ログc:/temp/SilentInstall.logが作成されます:

```
SmartView.exe /x /s /v"/qn /l*v c:/temp/SilentInstall.log"
```

- ▶ Essbaseクライアント、Essbase Studioコンソール、管理サービス・コンソールまたはStrategic Financeクライアントのサイレント・アンインストールを行うには、次のコマンドを使用します:

```
installer file name /x /s /v"/qn DELETE_COMMONS=value /l*v log file path and name"
```

valueは、trueまたはfalseです。

Essbaseクライアント、Essbase Studioコンソール、Oracle Essbase Administration ServicesコンソールおよびOracle Hyperion Strategic Financeは、一部の共通コンポーネントを共有します。パラメータDELETE_COMMONS=trueを使用すると、アンインストーラでこれらの共通コンポーネントが削除されます。複数のクライアントが同じマシンにインストールされるか、EPM Systemサーバー製品と同じマシンにクライアントがインストールされる場合、1つのクライアントのみを削除する場合はDELETE_COMMONS=falseを使用する必要があります。

- ▶ Disclosure Managementのサイレント・アンインストールを行うには、DiscManSetup.msiが含まれているフォルダから次のコマンドを実行します:

```
msiexec /uninstall DiscManSetup.msi /qn /l*v log file path and name"
```


8

カスタム構成の実行

この項の内容:

ヒープ・サイズの変更によるパフォーマンスの最適化	97
オンライン・ヘルプのインストールと構成	100
Essbase構成のカスタマイズ	101
(UNIX) EssbaseとOracle BI EEの統合用の環境の構成	103
Oracle BI EEおよびBI PublisherとEPM Workspaceの統合	105
Financial ManagementとOracle BI EEの統合用の環境の構成	107
Financial Reporting Studioのフォントの構成	109
Interactive Reportingのフォントの構成(UNIX)	111

この章では、EPM Systemのデプロイメントに対して作成できる追加のカスタム構成について説明します。

ヒープ・サイズの変更によるパフォーマンスの最適化

サブトピック

- [仮定と前提条件](#)
- [ヒープ・サイズの変更](#)
- [ヒープ・サイズの検証](#)

環境によっては、Java Webアプリケーション・サーバーのヒープ・サイズを変更する必要があります。たとえば、WebLogicでOutOfMemoryエラーが表示される場合、ヒープ・サイズを大きくします。WebLogic Serverのメモリー要件を小さくする必要がある場合、ヒープ・サイズを減らします。

デフォルトでは、Java Webアプリケーションを単一の管理対象サーバーにデプロイする場合、EPM Systemコンフィグレータは、マシンのメモリーに基づいて単一の管理対象サーバーのデフォルトのヒープ・サイズを設定します:

- 12GB以上のマシンでは、ヒープ・サイズを8GBに設定します
- 6GB以上12GB未満のマシンでは、ヒープ・サイズを4GBに設定します
- 6G未満の32ビット・マシンでは、ヒープ・サイズを750MBに設定します
- 6G未満の64ビット・マシンでは、ヒープ・サイズを1.536MBに設定します

仮定と前提条件

この手順は次のことを仮定しています:

- EPM System製品を、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System標準デプロイメント・ガイドまたは『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を使用してインストールし、構成しました。
- 手動でJava Webアプリケーションをデプロイした場合、管理対象サーバーが稼働している必要があります。

ヒープ・サイズの変更

▶ 管理対象サーバーのヒープ・サイズを変更するには:

1. Windowsマシンの場合、Windowsレジストリ エディタを使用して、Windowsサービスのヒープ・サイズを変更します:
 - a. 管理対象サーバーを変更する製品をホストしているマシンで、Windowsレジストリ エディタを開きます: 「スタート」、「ファイル名を指定して実行」を選択し、regeditと入力してから、「OK」をクリックします。
 - b. レジストリ エディタで「**HKEY_LOCAL_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「ManagedServerName」、「WindowsServiceName_InstanceName」の順に選択します。

たとえば、単一の管理対象サーバーをデプロイした場合、「**HKEY_LOCAL_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「**EPMServer0**」、「**HyS9EPMServer_InstanceName**」の順に選択します。

単一の管理対象サーバーをスケール・アウトした場合、スケールアウト・マシンで、「**HKEY_LOCAL_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「**EPMServer1**」、「**HyS9EPMServer_InstanceName**」の順に選択します。

たとえば、Oracle Hyperion Planningをデプロイした場合、「**HKEY_LOCAL_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「**Planning0**」、「**HyS9Planning_InstanceName**」の順に選択します。

デプロイメント内の管理対象小サーバーの完全なリストが必要な場合、デプロイメント・レポートを実行します:

EPM_ORACLE_INSTANCE/binに移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry report deployment
```

レポート・ファイル(deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html)は、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reportsに格納されています。

- c. 値が-Xmxで始まる「JVMoptionX」(Xは1、2、...)を右クリックし、「修正」を選択します。
- d. 「値のデータ」で、値を環境に適した値に変更します。

```
-Xmx
Value
m
```

たとえば、ヒープ・サイズを8GBに設定するには、次のように入力します:

```
-Xmx8000m
```

- e. 「OK」をクリックします。
 - f. レジストリ エディタを閉じます。
 - g. 「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「EPM Systemの起動」の順に選択して、EPM Systemを起動します。
 - h. デプロイメント内の各マシンで、管理対象サーバーごとにこれらの手順を完了します。
2. UNIXマシンの場合、またはWindowsマシンの別の方法では、製品の起動スクリプトで管理対象サーバーのヒープ・サイズを変更します:
 - a. 管理対象サーバーを変更する製品をホストするマシンで、製品のカスタム起動スクリプトをテキスト・エディタで開きます:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE  
/bin/deploymentScripts/setCustomParams  
ManagedServerName  
.bat|.sh
```

たとえば、Foundation Services管理対象サーバーのヒープ・サイズを変更するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/deploymentScripts/setCustomParamsFoundationServices.bat|.shを開きます。

- b. 次のようなエントリを変更します:

```
set USER_MEM_ARGS=-Xms128m -XX:PermSize=64m -  
XX:MaxPermSize=256m -Xmx512m
```

-XmxValueの値を、環境に適した値に編集します。

- c. ファイルを保存します。
- d. 変更後、製品のスクリプトを再実行します。
- e. デプロイメント内の各マシンで、管理対象サーバーごとにこれらの手順を完了します。

ヒープ・サイズの検証

▶ ヒープ・サイズが正しく設定されていることを検証するには:

1. WebLogic管理者資格証明を使用して、WebLogic管理コンソールにログインします。(http://WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console、例: http://FNDHOST1:7001/console) (または、「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle WebLogic」、ユーザー・プロジェクト、EPMSystem、管理サーバー・コンソールを選択します。)
2. ドメイン構造で、「環境」を展開して、「サーバー」を選択します。
3. サーバーのサマリーで、/ManagedServerName/を選択します。
4. モニタリングタブ、「パフォーマンス」タブの順にクリックします。
5. Java仮想メモリー使用統計で、最大ヒープ・サイズ設定を確認します。

オンライン・ヘルプのインストールと構成

サブトピック

- [仮定と前提条件](#)
- [ローカルに実行するためのオンライン・ヘルプの構成](#)

EPM System製品のオンライン・ヘルプ・コンテンツは、中央のOracleダウンロード場所から提供されます。これにより、EPM Systemのダウンロードとインストールにかかる時間が短縮されます。Oracle HTTP Server、またはFoundation Servicesとともにインストールされた組込みのWebLogic HTTP Serverを使用する場合は、EPM SystemコンフィグレータでのWebサーバー構成後、オンライン・ヘルプに自動的にアクセスできます。次のいずれかの方法でオンライン・ヘルプを起動します:

- EPM Workspaceから。
- Webベース製品から。この場合、製品の起動に使用するURLは、Webサーバーを介する必要があります。たとえば、`http://webServerHost:webServerPort/WebAnalysis`を使用して、Oracle Hyperion Web Analysisを起動します。
- Financial Reporting Studioなどのデスクトップ・クライアント製品から直接。

IBM HTTP ServerをWebSphere Application Serverとともに使用する場合、オンライン・ヘルプを有効にするにはWebサーバーを手動で構成する必要があります。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』のIBM HTTP Serverの構成に関する項を参照してください。

IISをWebサーバーとして使用する場合、中央のOracleダウンロード場所から提供されるオンライン・ヘルプはサポートされません。

オンライン・ヘルプをインストールおよび構成して、ローカルで実行することもできます。



注:

Section 508準拠のオンライン・ヘルプへのアクセスが必要な場合、またはOracle User Productivity Kit (UPK)を使用している場合、ヘルプをインストールおよび構成してローカルで実行できるようにする必要があります。



注:

何らかの理由でWebサーバーを再構成する場合、`epm_online_help.conf`を復元します。

仮定と前提条件

オンライン・ヘルプをローカルに実行するように構成する場合:

- EPM Systemコンポーネントをインストールおよび構成済です。

ローカルに実行するためのオンライン・ヘルプの構成

- ▶ オンライン・ヘルプをインストールおよび構成して、ホストされているOracleサーバーからではなくローカルに実行するには:
 1. EPM System製品をインストールおよび構成した後、<http://docs.oracle.com/cds/epm11124.zip>からepm11124.zipをダウンロードします。
 2. HTTPサーバーのホスト・マシンで、EPM_ORACLE_HOME/commonの下でepmstaticフォルダを展開します。(組込みのWebLogic HTTP Serverを使用する場合、HTTPサーバーはOracle Hyperion Foundation Servicesをデプロイしたマシンでホストされます。)フォルダ構造の例を次に示します。1製品につき1つのフォルダがあります:

```
epmstatic/wspace/docs/*
epmstatic/planning/docs/*
epmstatic/raframework/docs/*
epmstatic/raframework/docs/*
```

3. 環境がロード・バランスされている場合は、HTTPサーバーをインストールした各マシンでepm11124.zipを解凍します。
4. Oracle HTTP ServerまたはIBM HTTP Serverを使用する場合、EPM SystemコンフィグレータでWebサーバーを構成した後、EPM_ORACLE_INSTANCE/httpdConfig/ohs/config/OHS/ohs_component/でhttpd.conf (SSLを使用する場合はssl.conf)を開いて、**Include conf/epm_online_help.conf**を探し、この行の先頭に#を付けてコメント化します。例:

```
#Include conf/epm_online_help.conf
```

さらに、次の行がhttpd.confに含まれていることを確認します:

```
Alias /epmstatic "
EPM_ORACLE_HOME
/common/epmstatic"
```

5. 組込みのWebLogic HTTP Serverを使用する場合、EPM SystemコンフィグレータでWebサーバーを構成した後、EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/WEB_INF/web.xmlを開き、filterとfilter-mappingのセクションをコメント化します。例:

```
<!--
<filter>
...
</filter>
<filter-mapping>
...
</filter-mapping>
-->
```

6. FoundationServices管理対象サーバー(WebLogic)とHTTPサーバーを再起動します。

Essbase構成のカスタマイズ

この項では、必要に応じてEssbaseで使用する追加の構成設定について説明します。

Essbaseで使用するJREの特定のインストールの指定

EssbaseでJREの特定のインストールを使用するよう指定するには、`essbase.cfg`の`JVMODULELOCATION`設定を更新します。

`ARBORPATH/bin`にある`essbase.cfg`ファイルで`JVMODULELOCATION`を設定すると、Essbaseと使用するためにJREインストールを詳細に指定できます。この設定は、データ・マイニング、Shared Services、カスタム定義関数、トリガー、および外部認証を使用可能にする場合に必要です。

この設定は、Essbaseサーバー・コンピュータ上に複数のバージョンのJavaがインストールされている場合に特に有効です。

Essbaseサーバーの構成時に、`JVMODULELOCATION`の正しい設定が`essbase.cfg`に自動的に追加されます。

`JVMODULELOCATION`パラメータを変更するには、Java仮想マシン(JVM)ライブラリのフル・パスおよびファイル名を指定する必要があります。ライブラリの場所および名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。EPM Systemインストーラは、JREを`EPM_ORACLE_HOME/JDK160_35/jre`にインストールします。



注:

64ビット・オペレーティング・システムで64ビットEssbaseを実行するには、64ビットJVMが必要です。

JvmModuleLocationを使用したメモリの管理

データ・マイニング、Shared Services、カスタム定義関数、トリガーまたは外部認証を使用しない場合、使用するメモリの量を減らすには、`essbase.cfg`を編集し、`JvmModuleLocation`をNULL(空)に設定します。

これらの機能を使用し、使用するメモリの量を減らす必要がある場合は、次の環境変数を設定するとJVMヒープ・サイズを減らせます:

```
ESS_JVM_OPTION1=-Xmx16m
```

JVMヒープ・サイズのデフォルトの最小値および最大値はプラットフォームとバージョンによって異なるので、使用している環境に適した値を設定してください。たとえば、http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v4r0/index.jsp?topic=/com.ibm.support.was.doc/html/Java_SDK/1132680.htmlなどを参考にしてください。

64ビットWindowsプラットフォーム上での32ビット・ランタイム・クライアントの構成

EPM Systemインストーラは、64ビットのオペレーティング・システムのマシンには32ビットと64ビット両方のEssbaseクライアントをインストールします。

32ビット・クライアント・アプリケーションと64ビット・クライアント・アプリケーションを同じマシン上で使用し、アプリケーションの再コンパイルを行わない場合、次の手順を実行します。

- ▶ 32ビット・ランタイム・クライアントを64ビットMicrosoft Windowsコンピュータでインストールして使用するには:

64ビット・マシン上で、コマンド・プロンプトから、またはESSBASEPATHが32ビット・ランタイム・クライアントのインストール・ディレクトリに設定され、PATHがESSBASEPATHディレクトリ内のbinサブディレクトリを含むように設定されているシェル・ウィンドウから、再コンパイルした32ビット・クライアント・プログラムを実行します。

たとえば、Windows AMD64では次を設定します:

```
ESSBASEPATH=%EPM_ORACLE_HOME%\common\EssbaseRTC\11.1.2.0
PATH=%ESSBASEPATH%\bin;%PATH%
```

アプリケーション・プログラミング・インタフェースとランタイム・クライアントについては、『Oracle Essbase APIリファレンス』を参照してください。

(UNIX) EssbaseとOracle BI EEの統合用の環境の構成

Oracle Business Intelligence Enterprise EditionをEssbaseのデータ・ソースとして使用する場合、Essbaseを起動する前にOracle BI EEドライバの追加環境変数を設定する必要があります。



注:

UNIXでは、Essbaseリリース11.1.2がOracle BI EEリリース10g (10.1.3.4以降)と統合されます。

- ▶ EssbaseとOracle BI EEの統合用の環境を構成するには:

1. Oracle BI EE ODBCドライバをインストールします。

Oracle BI EE ODBCドライバ・コンポーネントは、独自のホーム・ディレクトリにインストールされます。Essbaseに対するアクセス/実行権限を持つUNIXユーザーは、Oracle BI EE ODBCドライバ・コンポーネントに対しても同じ権限を持っていることを確認してください。

2. `odbc.ini` (Essbaseの場合)および`odbcinst.ini` (Oracle Essbase Studioの場合)を変更し、Oracle BI EE ODBCドライバを追加します。これらのファイルは、`EPM_ORACLE_HOME/common/ODBC/Merant/6.0`にあります。これらのファイルを変更するには、DSN (`odbc.ini`の場合)またはドライバ記述子(`odbcinst.ini`の場合)を編集し、Oracle BI EE ODBCドライバの絶対パスを組み込みます。

`odbc.ini`のDSNエントリについては、次の例を使用します:

```
[ODBC Data Sources]
:
OBI Paint=Oracle BI Server
      [DSN for OBI driver]

[ODBC]
```

```

IANAAppCodePage=4
InstallDir=/
        EPM_ORACLE_HOME
        /common/ODBC/Merant/6.0
Trace=1
TraceFile=/
        EPM_ORACLE_HOME
        /common/ODBC/Merant/6.0/odbctrace.out
TraceDll=/
        EPM_ORACLE_HOME
        /common/ODBC/Merant/6.0/lib/odbctrac.so

[OBI Paint]
        [DSN entry]

Driver=../../OracleBI/server/Bin/libnqsodbc.so
        [path to load OBI driver]

Description=Oracle BI Server
ServerMachine=qtflnx10.us.oracle.com
Repository=
Catalog=
UID=Administrator
PWD=Administrator
Port=9703

```

odbcinst.iniの{ドライバ記述子}エントリについては、次の例を使用します:

```

        [ODBC Drivers]
Oracle BI Server=Installed
        [driver descriptor. same as the one in essbase.cfg]

[Oracle BI Server]
        [driver descriptor entry]

Driver=../../OracleBI/server/Bin/libnqsodbc.so
        [path to load OBI driver]

APILevel=3
ConnectFunctions=YYN
DriverODBCVer=3.52
FileUsage=0
SQLLevel=2

```

3. 次の環境変数をopmn.xmlファイルに追加します:

```

        <variable append="true" id="LD_LIBRARY_PATH"
        value="/vol1/prod1/OracleBI/server/Bin"/>
<variable append="true" id="LD_LIBRARY_PATH"
        value="/vol1/prod1/OracleBI/web/Bin"/>
<variable id="SATEMPDIR" value="/vol1/prod1/OracleBIData/tmp"/>
<variable id="SAROOTDIR" value="/vol1/prod1/OracleBI"/>
<variable id="SA_ROOTDIR" value="/vol1/prod1/OracleBI"/>
<variable id="SADATADIR" value="/vol1/prod1/OracleBIData"/>

```


Oracle BI EEおよびBI PublisherとEPM Workspaceの統合

サブトピック

- [EPM WorkspaceとOracle BI EEリリース10gとの統合](#)
- [EPM WorkspaceとOracle BI EEリリース11gとの統合](#)

EPM WorkspaceとOracle BI EEリリース10gとの統合

Oracle BI EEおよびOracle Business Intelligence Publisherリリース10.1.3.4.2以降をEPM Workspaceと統合するには、次のタスクを実行します。

1. 前提条件を満たします。105ページのOracle BI EEおよびBI Publisherリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspaceリリース11.1.2.4を統合するための前提条件を参照してください。
2. EPM Systemコンフィグレータを使用して、Oracle BI EEとEPM Workspaceとの間の接続を設定します。次に、Webサーバーを構成します。106ページのOracle BI EEおよびPublisherとの接続の設定を参照してください。
3. 手動構成タスクを実行します。107ページのOracle BI EEおよびBI Publisherリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspaceリリース11.1.2.4を統合するための手動構成を参照してください。

Oracle BI EEおよびBI Publisherリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspaceリリース11.1.2.4を統合するための前提条件

Oracle BI EEおよびBI Publisherリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspaceリリース11.1.2.4を統合するには、まずShared Servicesリリース11.1.1.4をEPM Systemリリース11.1.2.4で使用されていないマシンにインストールし、構成する必要があります。その後、次の手順を実行します：

- BI Publisherリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspace 11.1.2.4を統合するには、*Oracle Business Intelligence Publisher*管理者および開発者ガイド リリース10.1.3.4.2 (http://download.oracle.com/docs/cd/E10415_01/doc/index.htmから入手可能)で説明されている前提条件ステップを実行する必要があります。次の点に注意してください：
 - 「EPM Workspaceとともに使用するためのOracle BI Publisherの構成」の項で、「EPM Workspace Webサーバーの構成」の手順は必須ではありません。WebサーバーはEPM Systemリリース11.1.2.4の構成時に構成済のためです。
 - 「EPM Workspaceとの統合の前提条件」におけるレジストリ・プロパティ・ファイル(reg.properties)へのすべての参照は、Shared Servicesリリース11.1.1.4をインストールおよび構成する際に作成されるレジストリ・プロパティ・ファイル(reg.properties)を参照しています。
- Oracle BI EEリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspace 11.1.2.4を統合するには、*Oracle Business Intelligence Publisher*新機能ガイド リリース10.1.3.4.2以降(http://download.oracle.com/docs/cd/E10415_01/doc/index.htmから入手可能)で説明されている前提条件ステップを実行する必要があります。次の点に注意してください：
 - 「EPM Workspaceとともに使用するためのOracle BI Presentation Servicesのインストールおよび構成」の項にある、「EPM Workspace用のWebサーバーの構成」および「Webサーバー構成の確認」の手順は、EPM Workspaceリリース11.1.1.4を使用する場合に実行するのではなく、EPM Systemリリース11.1.2.4を使用する場合に実行します。

○このドキュメントにおけるレジストリ・プロパティ・ファイル(reg.properties)へのすべての参照は、Shared Servicesリリース11.1.1.4をインストールおよび構成する際に作成されるレジストリ・プロパティ・ファイル(reg.properties)を参照しています。

次に、タスクOracle BI EEおよびPublisherへの接続の設定を選択し、EPM Systemコンフィグレータを使用してEPM Systemリリース11.1.2.4の構成を続行します。最後にWebサーバーを構成します。

このシナリオでは、Shared Servicesリリース11.1.1.4およびEPM Systemリリース11.1.2.4がインストールされている必要があります。

この環境で作業する場合の注意点:

- ネイティブ・ユーザーはサポートされていません。
- EPM Systemリリース11.1.2.4とEPM Systemリリース11.1.1.4は、異なるサーバーでインストールおよび構成する必要があります。単一サーバーでの構成はサポートされていません。

Oracle BI EEおよびPublisherとの接続の設定

▶ Oracle BI EEおよびBI Publisherで使用するEPM Workspaceの構成情報を指定します。

このタスクの実行後、Webサーバーを再構成する必要があります。Webサーバーがこのマシン上にある場合、**Oracle BI EEおよびPublisherへの接続の設定**を選択する際、同時に「**Webサーバーの構成**」を選択します。

次の表は、EPM WorkspaceをOracle BI EEおよびBI Publisherとともに使用するための構成オプションを示します。

EPM Systemコンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Oracle BI EEの設定		
ホスト	Oracle BI EEがインストールされているホストを指定します。	
ポート	Oracle BI EEがリスニングするポートを指定します。	
SSLポート	SSLを使用している場合はSSLポートを指定します。	
URLコンテキスト	コンテキスト・パスを確認または更新します。コンテキスト・パスは、デプロイ済Java WebアプリケーションにアクセスするURLの一部です。デフォルト値は/analyticsです。	
Oracle BI Publisherの設定		
ホスト	BI Publisherがインストールされているホストを指定します。	
ポート	BI Publisherがリスニングするポートを指定します。	
SSLポート	SSLを使用している場合はSSLポートを指定します。	
URLコンテキスト	コンテキスト・パスを確認または更新します。コンテキスト・パスは、デプロイ済Java Webアプ	

EPM Systemコンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
	リケーションにアクセスするURLの一部です。 デフォルト値は/xmlpserverです。	

Oracle BI EEおよびBI Publisherリリース10.1.3.4.2以降とEPM Workspaceリリース11.1.2.4を統合するための手動構成

EPM WorkspaceをOracle BI EEまたはBI Publisherと統合する場合、互換性のあるシングル・サインオン・トークンを作成するための追加タスクを実行します。Shared Servicesリリース11.1.1.3および11.1.1.4では、リリース11.1.2.xとは異なる暗号化方式が使用されるため、新しいシングル・サインオン・トークン暗号化鍵を生成する必要があります。

「デフォルトにリセット」または「新しいキーの生成」のいずれかを選択できます。新しいキーを生成する場合は、Oracle BI EEマシンの`oraclebi/web/javahostt/lib/obiscustomauth`にある`css-9_5_0.jar`を11.1.1.3または11.1.1.4の環境にある同じファイル(`HYPERION_HOME/common/css/9.5.0.0/lib`にある)で置き換える必要があります。

- Oracle BI EEまたはBI Publisherリリース10.1.3.4.1が、Shared Servicesリリース11.1.1.3.00または11.1.1.4をホストしているマシンとは別のマシンにインストールされている場合、次の追加手順を実行します：
 - Oracle BI EEまたはBI Publisherをホストしているマシンで、`HYPERION_HOME`用のフォルダを作成し、この場所をポイントする新規の環境変数`HYPERION_HOME`を作成します。
 - `HYPERION_HOME`の下に次のディレクトリ構造を作成します：`/common/CSS`。
- `ssHandlerTK`キーを`HYPERION_HOME/common/CSS`にコピーします。

詳細は、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザー・セキュリティ管理ガイド*の暗号化鍵の再生成に関する項および暗号化オプションの設定に関する項を参照してください。

- Oracle BI EEおよびOracle Business Intelligence Publisherサービスを再起動します。

EPM WorkspaceとOracle BI EEリリース11gとの統合

EPM Workspaceリリース11.1.2.4とOracle BI EEリリース11.1.1.7を統合するには、*Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Editionシステム管理者ガイド*(http://docs.oracle.com/cd/E28280_01/bi.1111/e10541/toc.htm)のEPM Workspaceと統合するための構成に関する項を参照してください。Oracle BI EEリリース10gとのEPM Workspace統合を使用していた場合は、Oracle BI EEリリース11.1.1.7にアップグレードできますが、EPM Workspaceとの統合はアップグレードされません。*Oracle® Fusion Middleware System Oracle Business Intelligence Enterprise Editionの管理者ガイド*に記述されている手順を使用して、統合を再構成する必要があります。

Financial ManagementとOracle BI EEの統合用の環境の構成

Financial ManagementとのOracle BI EEの統合の場合、Oracle BI EEをインストールした後、Financial Managementデータ・ソースからのインポートまたはデータ・ソースへの接続設定を行う前に、Oracle BI JavaHost

プロセスを実行しているシステムにFinancial Management ADMドライバがインストールされているようにする必要があります。

次のタスクを実行します:

1. EPM Systemインストーラを使用して、Oracle BI JavaHostプロセスを実行しているマシンでFinancial Management ADMドライバをインストールします。
2. Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemコンフィグレータを使用して、Oracle Hyperion Shared ServicesとFinancial Managementのデータベース接続の詳細を指定します。
3. 構成後、Financial Managementに必要な環境変数が含まれるように、Oracle BI JavaHostプロセスを実行中の各システムでopmn.xmlを編集します。次の手順を参照してください。

Financial Managementデータ・ソースからインポートするには、オフラインおよびオンラインの両方のインポートの場合で、JavaHostプロセスが実行中である必要があります。Oracle Business Intelligence Enterprise EditionがWindows専用のデプロイメントで実行中の場合のみ、Financial Managementデータ・ソースをOracle BI EEで使用できます。

▶ Financial ManagementとOracle BI EEの統合用の環境を構成するには:

1. テキスト・エディタでORACLE_INSTANCE/config/OPMN/opmn/opmn.xmlを開きます。
2. JavaHostプロセス用のias-componentタグを特定します。例:

```
<ias-component id="coreapplication_obijh1">
```

3. 環境タグ内で、次の例をガイドとして使用し、Financial Managementに必要な新しい変数を追加します。インストールに応じて、実際の値を更新します。

```
<variable id="HYPERION_HOME" value="C:/oracle/Middleware/
EPMSys11R1"/>
<variable id="EPM_HOME"
value="C:/MW_Home/Oracle_BI1/common/jlib/11.1.2.0"/>
<variable id="ADM_HOME"
value="C:/MW_Home/Oracle_BI1/common/ADM/11.1.2.0"/>
<variable id="HFM_HOME"
value="$HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Client"/>
<variable id="ADM_ESS_NATIVE_HOME" value="$ADM_HOME"/>
<variable id="CSS_HOME"
value="c:/MW_Home/Oracle_BI1/common/CSS/11.1.2.0"/>
```

4. ADM_HOME/binと、HYPERION_HOMEのclientおよびcommonのサブディレクトリを含むようにPATH変数を更新します。例:

```
<variable id="PATH" value="C:\oracle\product\10.2.0\db_1\BIN$:
$ADM_HOME/bin$:$HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Common$:
$HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Client$:$ORACLE_HOME/
common/ODBC/Merant/5.3/lib$:$ORACLE_HOME/bifoundation/server/bin$:
$ORACLE_HOME/bifoundation/web/bin$:$ORACLE_HOME/common/ODBC/
Merant/5.3/lib$:$ORACLE_INSTANCE$:$ORACLE_HOME/lib" append="true"/>
```

5. data id="start-args"タグの位置を特定し、必要な.jarファイルの位置を含むようにclasspath属性を更新します。例:

```

        <data id="start-args" value="-Xmx1024M -Djava.security.manager=default
-
DXDO_
FONT_DIR=$ORACLE_HOME/common/fonts -Djava.security.policy=$ORACLE_
INSTANCE/config/$COMPONENT_TYPE/$COMPONENT_NAME/java.policy
-
Djava.util.logging.config.class=oracle.core.ojdl.logging.LoggingConfigurat
ion
-Doracle.core.ojdl.logging.config.file=$ORACLE_INSTANCE/config/$COMPONENT_
TYPE/$COMPONENT_NAME/logging-config.xml -Doracle.home=$ORACLE_HOME
-Doracle.instance=$ORACLE_INSTANCE -Doracle.component.type=$COMPONENT_TYPE
-Doracle.component.name=$COMPONENT_NAME -classpath $COMMON_COMPONENTS_
HOME/modules/oracle.odl_11.1.1/ojdl.jar$: $ORACLE_
HOME/bifoundation/javahost/lib/core/sautils.jar$: $ORACLE_
HOME/bifoundation/javahost/lib/core/mad.jar$: $ORACLE_
HOME/bifoundation/javahost/lib/core/javahost.jar$: $COMMON_COMPONENTS_
HOME/modules/oracle.xdk_11.1.0/xmlparserv2.jar$: $ORACLE_
HOME/opmn/lib/ons.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.jps_
11.1.1/jps-manifest.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.jps_
11.1.1/jps-api.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.jps_
11.1.1/jps-common.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.jps_
11.1.1/jps-internal.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.nlsrtl_
11.1.0/orai18n.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.nlsrtl_
11.1.0/orai18ncollation.
jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.nlsrtl_
11.1.0/orai18n-mapping.jar$: $COMMON_COMPONENTS_HOME/modules/oracle.dms_
11.1.1/dms.jar$: $EPM_HOME/epm.jar$: $ADM_HOME/lib/adm.jar$: $ADM_HOME/lib/ap
.jar$: $CSS_HOME/lib/css.jar$: $CSS_HOME/lib/common-model.jar$
com.siebel.analytics.javahost.standalone.Main"/>

```

6. ファイルを保存して閉じます。
7. ORACLE_HOME/bifoundation/javahost/lib/obisintegration/admに移動して、admintegration.jarおよびadmimport.jarを除くすべての.jarファイルを削除します。
8. JavaHostプロセスを再起動します。
9. Oracle BI JavaHostプロセスを実行する各コンピュータでこの手順を繰り返します。複数のJavaHostインスタンスを同じコンピュータで実行中の場合は、必ずiascomponentタグをopmn.xmlの各インスタンスに合せて更新します(たとえば、ias-component id="coreapplication_obijh1"、ias-component id="coreapplication_obijh2"など)。

JavaHostがOracle Hyperion Financial Managementアクセスのシングル・ポイント障害とならないように、複数のJavaHostプロセスを実行する必要があります。これを行うには、Fusion Middleware Controlを使用してJavaHostプロセスをスケール・アウトします。プロセスのスケール・アウトの詳細は、*Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Editionシステム管理者ガイド*(http://docs.oracle.com/cd/E28280_01/bi.1111/e10541/toc.htm)のデプロイメントのスケール・アウトに関する項を参照してください。

Financial Reporting Studioのフォントの構成

Financial Reportingの初期インストールおよび構成後にフォントを追加した場合、Financial Reporting印刷サーバー・ユーティリティを使用してフォントをレポートで使用するための準備をします。

仮定と前提条件

- EPM Systemコンポーネントをインストールおよび構成済みです。

- 使用するフォントをダウンロードしました。Windowsの場合、フォントはC:/WINDOWS/Fonts(システム・フォント)または%JAVA_HOME%/jre/lib/fonts(Javaランタイム・フォント)にある必要があります。UNIXの場合、フォントは任意の場所に配置できます。
- True Typeフォントのみがサポートされます。オープン・ソース・フォントはサポートされません。
- EPM_ORACLE_INSTANCEがシステム変数として設定されていることを確認してください。
- トルコ・リラ記号のサポートの詳細は、[111ページのトルコ・リラ記号のダウンロード](#)を参照してください。印刷サーバー・ユーティリティを実行する前に、フォントをダウンロードします。

印刷サーバー・ユーティリティを使用したフォントの構成

印刷サーバー・ユーティリティには、Financial Reporting Studioがフォント情報を得るために使用するxdo.cfg (Windows)およびpx.cfg (UNIX)を更新する簡単な方法が用意されています。Oracle Hyperion Financial Reportingの初期デプロイメント以降フォントを追加した場合、そのフォントをレポートで使用するにはこのユーティリティを使用します。

▶ Financial Reporting Studioのフォントを構成するには:

1. コマンド・ウィンドウから、EPM_ORACLE_INSTANCE/FinancialReporting/bin/FRPrintServerUtility.cmd|.sh -guiを起動します。
2. Oracle Financial Reports印刷サーバー・ユーティリティで、xdo.cfgのデフォルトの場所を確認し、必要に応じて変更します。

デフォルトでは、EPM Systemインストーラは、EPM_ORACLE_INSTANCE/FinancialReporting/lib/FOProcessorにxdo.cfgをインストールします。

3. フォントを検索する場所を指定します。

Windowsの場合、ユーティリティはデフォルトでは、C:/WINDOWS/Fonts(システム・フォント)およびJAVA_HOME/jre/lib/fonts(Javaランタイム・フォント)でフォントを検索します。

「検索フォント・ディレクトリ」からディレクトリを削除するには、リストでディレクトリを選択して「削除」をクリックするか、「すべて削除」をクリックします。

4. 新しいフォント・リストでxdo.cfg内の既存のフォント・リストをオーバーライドする場合、「前のフォントの削除」を選択します。xdo.cfg内の既存のファイルのリストに新しいフォントの設定を追加するには、「前のフォントの削除」(デフォルト設定)をクリアします。
5. 「ファイルの更新」をクリックします。

ユーティリティは、指定された場所でフォントを検索し、xdo.cfg (Windows)およびpx.cfg (UNIX)を更新して、「見つかったフォント」ボックスにフォントを表示します。

あるいは、コマンドライン・モードで印刷サーバー・ユーティリティを実行できます。

▶ コマンドラインを使用してFinancial Reporting Studioのフォントを構成するには:

1. コマンド・ウィンドウから、EPM_ORACLE_INSTANCE/FinancialReporting/bin/FRPrintServerUtility.cmd|.sh -consoleを起動します。
2. xdo.cfgのデフォルトの場所を確認します。場所が正しくない場合は、1を入力し、正しい場所を指定します。デフォルトの場所が正しい場合は、2を入力します。

デフォルトでは、EPM Systemインストーラは、EPM_ORACLE_INSTANCE/FinancialReporting/lib/FOProcessorにxdo.cfgをインストールします。

3. フォントを検索する場所を確認し、必要に応じて変更し、完了したら4を入力します。

Windowsの場合、ユーティリティはデフォルトでは、C:/WINDOWS/Fonts(システム・フォント)およびJAVA_HOME/jre/lib/fonts(Javaランタイム・フォント)でフォントを検索します。

ディレクトリを追加するには、1を入力してから、新しい場所を指定します。

ディレクトリを削除するには、2を入力し、削除する場所を指定します。

すべてのディレクトリを削除するには、3を入力します。

4. 新しいフォント・リストでxdo.cfg内の既存のフォント・リストをオーバーライドする場合、1を入力します。xdo.cfg内の既存のファイルのリストの末尾に新しいフォント設定を追加するには、2を入力します。
5. ユーティリティを実行するには、1を入力します。

ユーティリティは、指定された場所でフォントを検索し、xdo.cfg (Windows)およびpx.cfg (UNIX)を更新します。

完了したら、ユーティリティで「終了しました、EPM_ORACLE_INSTANCE¥FinancialReporting¥lib¥FOProcessor¥xdo.cfgは更新されました」が表示されます。

トルコ・リラ記号のダウンロード

トルコ・リラ記号をサポートするには、ソフトウェアをインストールにダウンロードする必要があります。印刷サーバー・ユーティリティを実行する前に、次の手順を実行します。

▶ トルコ・リラ記号をインストールに追加するには:

1. <http://www.tamindir.com/tl-simgesi-kurma-programi/>に移動します。
2. トルコ・リラ記号のソフトウェア・リンク(TLSimg.exe)をクリックしてダウンロードします。

このソフトウェアはトルコ・リラ記号の挿入をサポートします。

3. TLSimg.exeを実行し、レポートを作成してリラ記号を挿入する前に、実行中であることを確認します。
4. トルコ語のフォントAbakuTLSymSans.ttfをWebからダウンロードしてインストールします。

フォントは、サーバーとクライアントの両方のマシンにインストールする必要があります。

トルコ・リラ記号をレポートに含めることに関する詳細は、『Oracle Hyperion Financial Reporting Studioユーザー・ガイド』を参照してください。

Interactive Reportingのフォントの構成(UNIX)

フォントの品質を改善したい場合、次の手順を実行します。

Interactive Reporting Serviceは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management WorkspaceのBQYドキュメントがWebクライアントで一貫したルック・アンド・フィールになるように適切なフォントで構成する必要があります。Interactive Reporting ServiceでType1、TrueType、またはOpenTypeフォントを使用できるようにしてください。構成されるフォントは、対象となるすべての言語の文字をサポートしている必要があります。

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installerでは、EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/fontsディレクトリのAndale WTフォントをインストールし、Interactive Reporting Service

でこれを使用するように構成します。このフォントは、西ヨーロッパ言語のほとんどの文字に加えて中国語、日本語、および韓国語をサポートします。

ユーザーは、使用方法に適したフォントを使用する必要があります。たとえば、西ヨーロッパ言語を使用し、Windows型のルック・アンド・フィールを求める場合は、MicrosoftのTrueType Webフォントをダウンロードして次のように構成できます：

▶ EPM WorkspaceでMicrosoftのTrueType Webフォントを使用できるようにするには：

1. Microsoft TrueType Webのフォントを、次からダウンロードします：

<http://sourceforge.net/projects/corefonts/>または他のソース。

2. フォント・ファイル用のディレクトリを作成します。
3. ダウンロードしたMicrosoftのフォントを使用する場合は、cabextractユーティリティを使用して、各ファイル (*.exe)を新しく作成したディレクトリに抽出します：

```
downloadLocation
/cabextract -d directory CAB file
```



ヒント：

Cabextractは、フォント・ファイルを抽出できるオープン・ソース・ツールです。これはWebからダウンロードできます。

4. ttmkfdirユーティリティを使用して、フォント・ファイルが格納されているディレクトリにfonts.dirファイルを作成します。



ヒント：

ttmkfdirユーティリティは、次のURLからダウンロードできます：<http://packages.debian.org/stable/x11/ttmkfdir>

5. fonts.dirディレクトリを環境変数FONT_PATHに追加するか、EPM_ORACLE_HOME/common/raframeworkrt/11.1.2.0/bin/set_common_env.sh内のBQ_FONT_PATH環境変数に追加します。
6. Interactive Reporting Serviceを再起動します。

9

障害リカバリ

この項の内容:

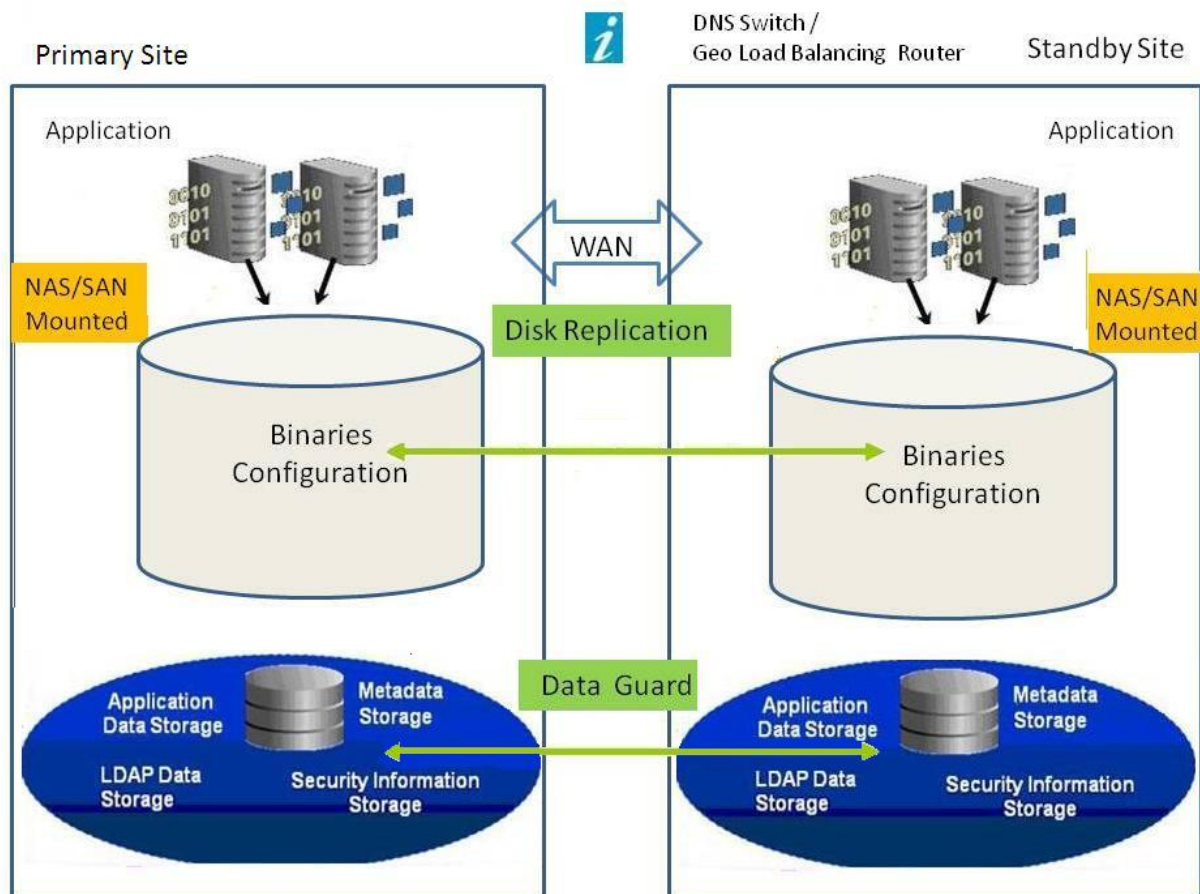
障害リカバリに関する一般情報	113
障害リカバリのアーキテクチャ	114
EPM Systemコンポーネントの障害リカバリ	115
ファイル・システムおよびデータベースの複製を使用しない障害リカバリ	116
追加情報	117

障害リカバリに関する一般情報

この章には、EPM System障害リカバリの構成に固有の情報が含まれます。『Oracle Fusion Middleware デイザスタリカバリガイド』(http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15250/toc.htm)は、設計上の注意事項、推奨事項、セットアップ手順、トラブルシューティングの手順、Oracle Fusion Middleware障害リカバリのソリューションのデプロイと管理に必要なその他の情報に関する基本リファレンスです。

障害リカバリのアーキテクチャ

図6 EPM Systemの障害リカバリのアーキテクチャ



注:

114ページの図6に示されているデプロイメントでは対称トポロジ(本番サイトおよびスタンバイ・サイトに同数のサーバーが存在する)を使用していますが、非対称トポロジ(スタンバイ・サイトには本番サイトよりも少数のサーバーが存在する)も使用できます。非対称トポロジを使用したデプロイメントでは、本番サイトのロジカル・サーバー・クラスタごとにスタンバイ・サイトのサーバーを必要とします。

共有または複製されたディスクを使用するには、すべてのマシンで共通の共有が必要です。たとえば、共有は/user_projects/dataの下にすることができます。

EPM Systemコンポーネントの障害リカバリ

サブトピック

- [環境の構成](#)
- [ホスト名の要件](#)
- [データベースの推奨事項](#)

環境の構成

障害リカバリ用の環境を構成するには、次の手順を実行する必要があります：

1. 本番サイトにEPM Systemをインストールして構成します。

ランタイム実行ファイルおよびデータは、複製可能なパーティション上に置く必要があります。

論理サービスを形成するために、分散されたサービスをクラスタ化する必要があります。

2. スタンバイ・サイトのホスト名が本番サイトのホスト名と異なる場合、スタンバイ・サイトにホスト名の別名を設定します。[115ページのホスト名の要件](#)の項を参照してください。
3. 本番サイトでのEPM Systemの構成が完了したら、スタンバイ・サイトにEPM Systemをインストールして構成します。
4. データベースの複製を設定します。



注：

複製にはバックアップおよび復元手順を使用できます。

5. スタンバイ・サイトを使用可能にします。
 - 本番サイトおよびスタンバイ・サイト間のミラーリングを無効化します。
 - アプリケーションごとにクラッシュ・リカバリ手順を実行し、Oracle Essbaseを回復します。*Oracle Enterprise Performance Management System*バックアップおよびリカバリ・ガイドの第4章「Essbaseコンポーネント」を参照してください。
 - スタンバイ・ホストのサービスを起動します。

ホスト名の要件

Oracle Enterprise Performance Management System障害リカバリのデプロイメントには、本番サイトとスタンバイ・サイト間でホストの参照を解決する手段が必要です。以下のオプション(推奨する順に記載)のいずれかを構成で使用してください：

- 本番サイトおよびスタンバイ・サイトが別々のネットワーク上にあります。

完全修飾ホスト名は両方のサイトで同じにできます。

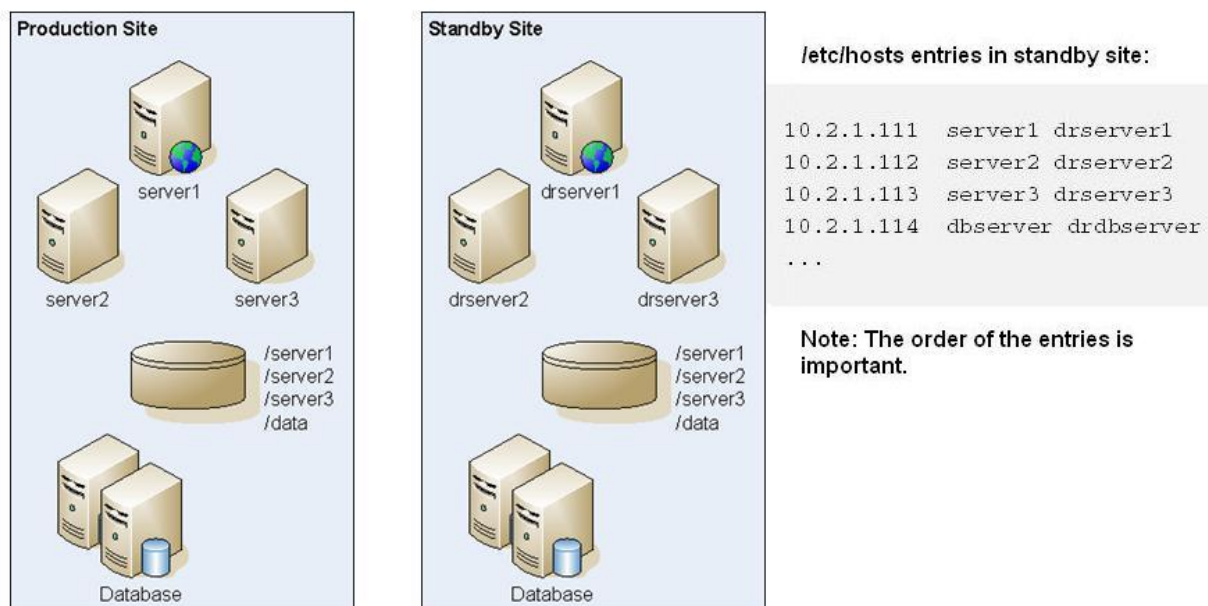
- 本番サイトおよびスタンバイ・サイトは異なるDNSを持ち、ホスト名をネットワーク上の正しいIPアドレスに解決できます。

スタンバイ・サイトには、障害の発生時にアクティブ化されるスタンバイDNSを使用できます。

- 本番ホスト名は/etc/hostsファイルによってスタンバイ・サイトのローカルIPアドレスに解決されます。

本番サイトとスタンバイ・サイトでホスト名が異なり、スタンバイ・サイトに個別のDNSがない場合、次に示すとおり、メインのサーバーが別名の中で最初のエン트리となるように、スタンバイ・サイトに本番サイトのサーバーの別名を設定します。

図7 ホスト名の別名の設定



データベースの推奨事項

障害リカバリ環境におけるデータベースの推奨事項:

- スタンバイ・サイトのデータベース・ホスト名別名を使用します。
- データ・リポジトリにOracle Data Guard構成を使用します。
- 計画的な構成の変更時には、Oracle Data Guardとデータベースの同期化を強制します。

<http://www.oracle.com/technology/deploy/availability/htdocs/DataGuardOverview.html>のOracle Data Guardに関するドキュメントを参照してください。

ファイル・システムおよびデータベースの複製を使用しない障害リカバリ

ファイル・システムとデータベースの複製ではなく、バックアップを使用して障害リカバリを設定できます。複製を使用すると、本番サイトに加えられたすべての変更は、スタンバイ・サイトにも適用されます。バックアップは複製よりは低

コストですが、復元可能なのはバックアップしたデータのみです。たとえば、金曜日にデータがバックアップされて、翌週木曜日に本番サイトで障害が発生すると、その間に発生したデータの変更は失われます。バックアップをより頻繁に行うと、より多くのデータを復元できます。

ファイル・システムのバックアップとデータベースのバックアップは、同期化されている必要があります。アクティビティが比較的少ないときにファイル・システムとデータベースをほぼ同じ頃にバックアップすると、両者の同期が確実にになります。

ファイル・システムやデータベースの複製を使用しない障害リカバリでは、次の手順のいずれかを使用します：

- インストール・イメージを複製し、本番サイトに初期設定後に適用されたすべてのパッチがスタンバイ・サイトにも確実に適用されるようにします。
- 本番サイトのすべてのパッチを手動で即座にスタンバイ・サイトに手動で適用します。

追加情報

障害リカバリ環境の設定の詳細は、次のドキュメントを参照してください：

- *Oracle Fusion Middleware障害リカバリガイド*(http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15250/intro.htm#BABHCEJJ)
- <http://www.oracle.com/technology/deploy/availability/htdocs/DataGuardOverview.html>のOracle Data Guardに関するドキュメント
- <http://www.netapp.com/us/library/technical-reports/tr-3672.html>の*Oracle Fusion Middleware DR Solution Using NetApp Storage*
- 使用するRDBMSの障害リカバリのガイド。

